秋　田　市

# 秋田臨空港新都市開発関係
# 埋蔵文化財発掘調査報告書

下堤E遺跡
下堤F遺跡
坂ノ上F遺跡
狸崎A遺跡
湯ノ沢D遺跡
深田沢遺跡

1985. 3　秋田市教育委員会

# 序

秋田臨空港新都市開発事業に係る御所野台地部の埋蔵文化財につきましては、昭和56年度から対処し、昭和57年度は５ヶ所、58年度は７ヶ所、本年度は６ヶ所の遺跡発掘調査を実施いたしました。

今回の調査におきましても、縄文時代から平安時代の各集落跡が発見され、特に縄文時代中期初頭の「坂ノ上Ｆ遺跡」では多量の北陸系土器が出土しております。このことは縄文時代から北陸・越後地方と交流があった事を示し、今後、日本海文化研究の一つの方向性を提示していると思われ、重要な資料であります。また他遺跡でも貴重な遺構・遺物も数多く検出されております。

調査の実施にあたっては県、関係機関の指導をはじめ、地元関係者、土地所有者等多くの方々の積極的なご協力をいただき深く感謝申し上げる次第です。

本報告書が文化財保護のため、さらには研究資料として広く活用されれば幸甚に存じます。

昭和60年３月

秋田市教育委員会

教育長　高　泉　宏　作

# 例　　言

1．本報告書は秋田市四ツ小屋小阿地（下堤Ｅ遺跡・下堤Ｆ遺跡・坂ノ上Ｆ遺跡・狸崎Ａ遺跡）、四ツ小屋末戸松本（湯ノ沢Ｄ遺跡）、上北手古野（深田沢遺跡）に所在する各遺跡の発掘調査報告書である。

2．本報告書は、調査員及び調査補佐員の協力を得て菅原俊行が編集したものである。

3．本報告書の報筆は、下堤Ｅ遺跡・湯ノ沢Ｄ遺跡・深田沢遺跡ー石郷岡誠一、西谷　隆、下堤Ｆ遺跡・坂ノ上Ｆ遺跡・狸崎Ａ遺跡ー菅原俊行、安田忠市、熊谷太郎、三嶋隆儀が担当し、菅原が補筆した。前記以外は菅原が担当した。

4．「坂ノ上Ｅ遺跡出土鉄滓の分析結果について」の原稿は東京工業大学・高塚秀治氏より賜わった。

5．発掘調査、整理作業の過程で下記の各氏より指導、助言を賜わった。

岡本東三、加藤三千雄、越坂一也、小島俊彰、渋谷孝雄、富樫泰時、西野秀和

特に小島俊彰氏には御多忙中、来秋していただき北陸系の土器について御指導を得た。

6．各遺跡の平面図、土層断面図中のＰは土器（片）、Ｓは石（礫）を示す。

7．各遺跡出土土器の分類は文様から群別、器形から類別し、下記表に従って説明している。

| 器形 | A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K | L |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 深鉢 | 鉢 | 浅鉢 | そ壺 | 甕 | 皿 | 台付 | 坏 | 椀 | 注口 | 香炉 | その他 |

| 口縁部形状 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---|---|---|---|---|---|
| | 直立 | 内湾 | 外反 | キャリパー | その他 |

8．発掘調査による出土遺物、実測図、写真、その他の記録は秋田市教育委員会が保管する。

# 目　　次

**序**
**例言**
**調査の概要**
調査に至るまでの経過…… 1
調査期間と体制 …… 1
調査の方法と経過…… 2
遺跡の位置と地形・地質…… 8
**下堤Ｅ遺跡**
遺跡の概観…… 14
遺構と遺物…… 14
まとめ…… 66
**下堤Ｆ遺跡**
遺跡の概観…… 74
遺構と遺物…… 74
まとめ…… 118
**坂ノ上Ｆ遺跡**
遺跡の概観…… 124
遺構と遺物…… 124
**坂ノ上Ｅ遺跡出土鉄滓の分析結果について**…… 279
まとめ…… 281
**狸崎Ａ遺跡**
遺跡の概観…… 300
遺構と遺物…… 300
まとめ…… 343
**狸崎Ａ遺跡出土（鈴木正夫氏所蔵）遺物について**…… 346
**湯ノ沢Ｄ遺跡**
遺跡の概観…… 360
遺構と遺物…… 360
まとめ…… 396
**深田沢遺跡**
遺跡の概観…… 406
遺構と遺物…… 406
まとめ…… 431

御所野台地南より秋田市街、男鹿半島を臨む

下堤Ｅ遺跡、湯ノ沢Ｄ遺跡（手前）（東から）

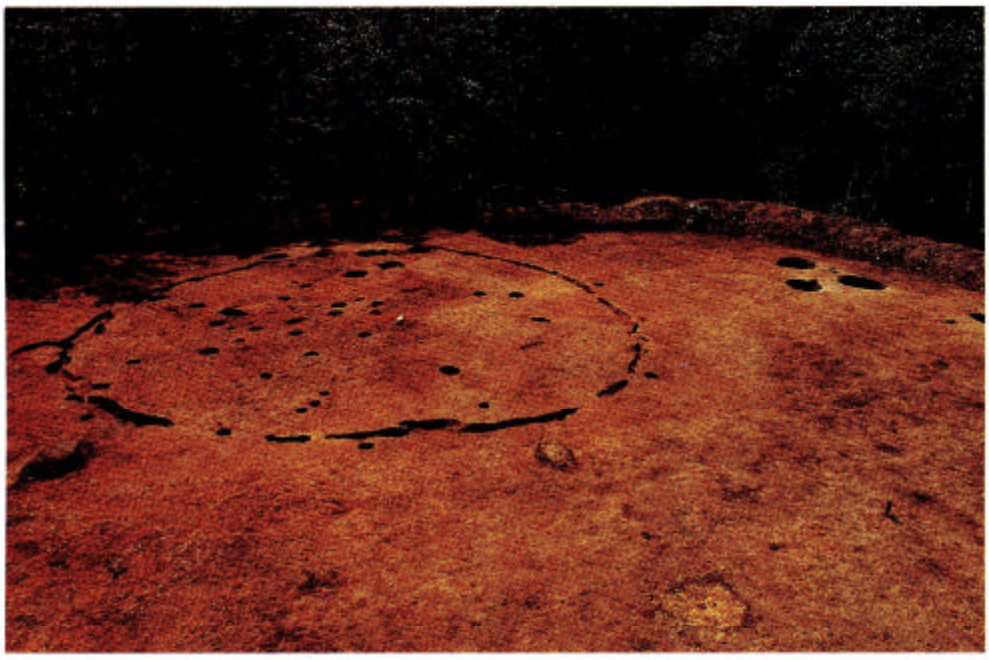
下堤Ｅ遺跡（北から）

下堤Ｆ遺跡（東から）

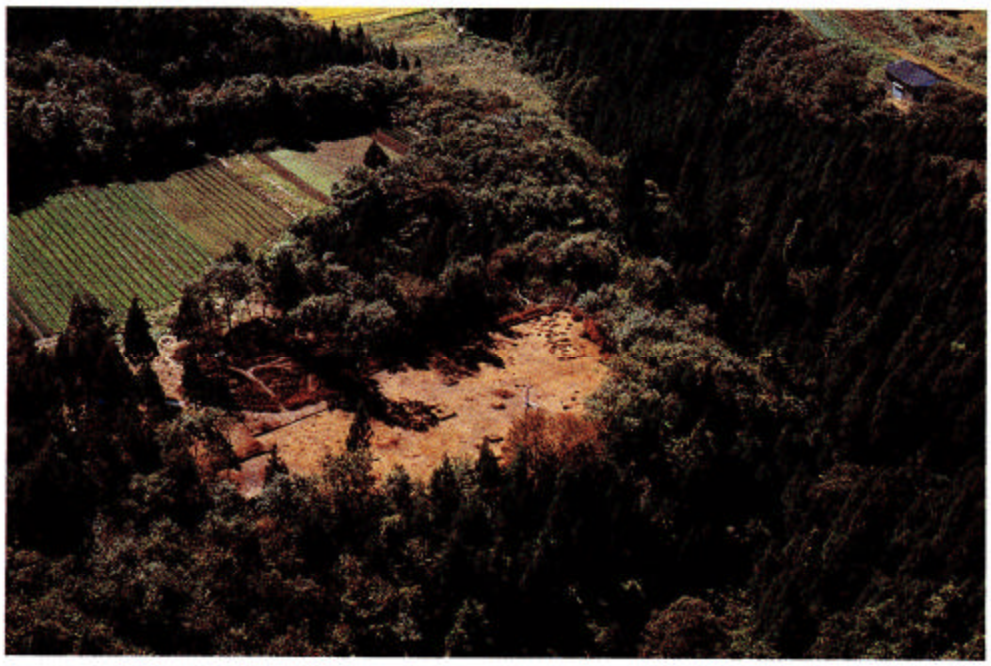
坂ノ上Ｆ遺跡全体（西から）

坂ノ上Ｆ遺跡、８号住居跡（北から）

坂ノ上F遺跡、15号住居跡（北から）



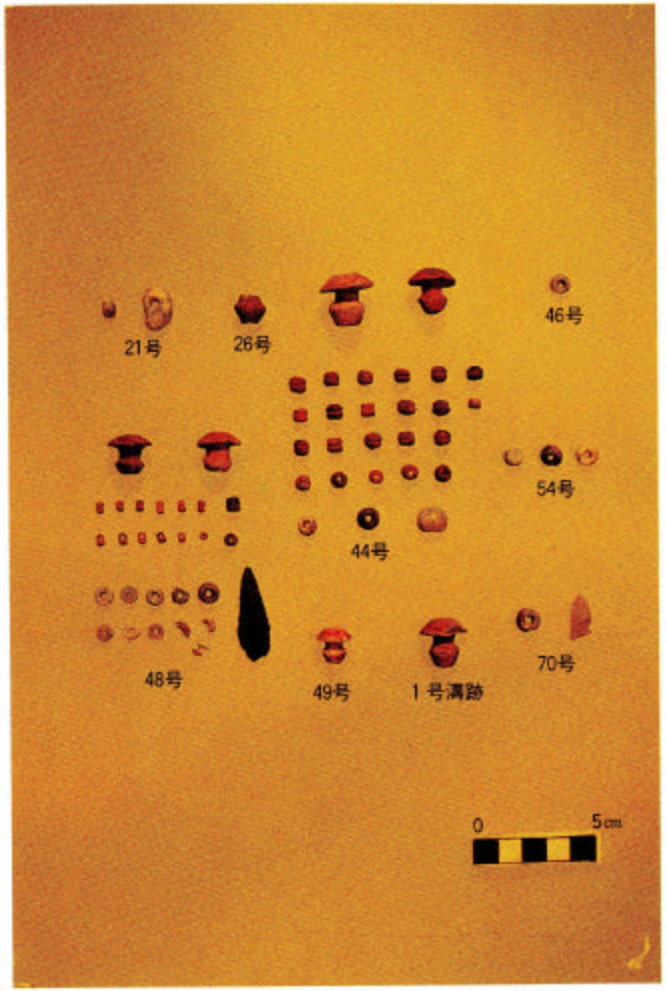
坂ノ上F遺跡、７号住居跡（東から）



狸崎Ａ遺跡（北から）

狸崎Ａ遺跡（北から）

瀬ノ沢D遺跡（西から）




狸崎A遺跡　土坑墓出土遺物

# 調 査 の 概 要

## 調査に至るまでの経過

秋田市南東部地域は昭和56年６月の秋田空港の開港、東北横断自動車道秋田線秋田インターチェンジ開設予定等、空陸両面の交通の要衝に位置する所である。このような状況の中で南東部地域における御所野地区については特に広台な台地であることから、いち速く開発可能性等についての各調査が実施され、県市総合計画においても産業、住宅団地が一体となった総合的ニュータウン＝臨空港新都市として具体的に位置づけられた。

昭和55年に御所野台地全体の分布調査を実施し、約30カ所の遺物散布地を確認した。昭和56年度は開発計画地域内の西部工業団地造成に先だち、下堤Ｄ遺跡（秋田市「下堤Ｄ遺跡発掘調査報告書」1982年３月、秋田市教育委員会）の発掘調査を行なった。昭和57年度は今後の開発計画に対処するため55年の分布調査に基づき、３カ月間で遺跡の範囲確認調査を実施し、その結果、台地上に24カ所の遺跡を確認したのである（第１図　御所野台地部範囲確認遺跡一覧表）。しかし、開発計画地内には３カ所の未範囲確認地域が存在している。範囲確認調査の結果に基づき関係機関と協議を重ね引き続き年度別に計画的な発掘調査を実施することとし、昭和57年度は下堤Ｇ遺跡、野畑遺跡、湯ノ沢Ｂ遺跡、坂ノ上Ｃ、Ｄ遺跡（秋田市「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1983年3月、秋田市教育委員会）、昭和58年度は坂ノ上Ｅ遺跡、湯ノ沢Ａ遺跡、湯ノ沢Ｇ遺跡、湯ノ沢Ｅ遺跡、湯ノ沢Ｆ遺跡、湯ノ沢Ｇ遺跡、湯ノ沢Ｈ遺跡、野形遺跡（秋田市「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1984年３月、秋田市教育委員会）の発掘調査を行なった。

昭和59年度は下堤Ｅ遺跡、下堤Ｆ遺跡、坂ノ上Ｆ遺跡、狸崎Ａ遺跡、湯ノ沢Ｄ遺跡、深田沢遺跡の発掘調査を実施した。

## 調査期間と体制

調 査 期 間　昭和59年４月１日～12月７日

調査主体者　地域振興整備公団

調査担当者　秋田市・秋田市教育委員会

調　査　員　菅原俊行、石郷岡誠一、西谷　隆、安田忠市（秋田市教育委員会社会教育課）

派遣調査員　熊谷太郎（秋田県埋蔵文化財センター）

調査補佐員　三嶋隆儀、佐藤雅子、鈴木徳行

調査協力員　五十嵐芳郎（秋田考古学協会会員）、石川恵美子（明治大学大学院）、山下英二（日本大学）、磯村　亨（国学院大学）、井上　論（秋田経法大学）、森　和彦（専修大学）、鈴木浩、小松博行、伊藤成孝、今野　歩、和田正美、後藤進栄、小西奈津雄、安藤正美、西野　稜、熊谷　朗、武藤祐浩、安田拓夫、斎藤和明、渡辺伊保子、佐々木理佳、奈良みどり、高橋　歩、長沢弘子、浅利佳子、館岡さつき、川村直子、今野春美（秋田

大学）

調査作業員　鈴木銀一、鈴木長治、鈴木茂治、鈴木一美、三浦竹治、三浦　馨、三浦吉司、三浦吉男、三浦三治、秋本与次郎、堀井藤男、水野金光、佐々木多治郎、三浦竹寛、加賀谷新之助、加賀谷金一郎、鈴木銀三郎、安藤金四郎、堀野兼雄、堀野健一、渡部謙治、佐々木東吉、鈴木藤一、嵯峨隆二、渡辺圭太郎、渡部金次郎、鈴木慶子、鈴木ウメノ鈴木ツヤ、鈴木キヨ、三浦千枝子、三浦初枝、三浦トミエ、三浦タキ、三浦ナツ、堀井ヤス、堀井キヨエ、佐々木フミ、佐々木久子、工藤キクエ、熊谷文子、宮田トキ子高島綾子、榎　トミ、榎　敏子、榎　良子、伊藤ヒメ子、伊藤ツギ、長谷部ヤエ子、会場京子、小松スミ、渡部セツ、渡部アイ子、渡部キネ子、渡部キヨ、渡辺フミ、佐々木ヨシ、佐々木縫子、高橋ヨシ子、高橋ミエ、堀野京子、矢倉アキ、加賀谷ヒデ、杉沢フミ、藤沢ミサ子、藤沢トクエ、鹿子沢ミサ、安藤チヨ、鈴木ヒデ、鈴木ヒデ子鈴木カネエ、持主チエ、嵯峨キミ、渡部かよ子

整理作業員　三浦秋子、堀井律子、堀井幸子、三浦千枝子、渡部キヨ、奈良年洋、臼井由香

事　務　員　伊藤茂子、奥村典子

## 調査の方法と経過

調査区は各遺跡ごとに任意の原点を決めて東西南北（磁北）に基準線を作り、調査区全体に大グリッド（40m×40m）を設定し、さらにその中に小グリッド（4m×4m）を設定し、単位グリッドとした。大グリッドは（1～n）、小グリッドは東西（X軸）に数字（1～10）、南北（Y軸）にアルファベット（A～J）を配し、その組み合せで遺跡番号、大グリッド番号、小グリッドの順に呼称することとした。

発掘調査は、下堤E遺跡（7/30～10/16）、下堤F遺跡（9/2～12/1）、坂ノ上F遺跡（4/1～9/7）、狸崎A遺跡（8/2～10/16）、湯ノ沢D遺跡（5/10～7/28）、深田沢遺跡（10/16～12/7）の日程で実施した。

下堤E遺跡は、下堤G遺跡（先土器時代、縄文時代前期末、中期末）[注1]と南の沢を隔てた湯ノ沢D遺跡の関連で調査したもので、下堤G遺跡、湯ノ沢D遺跡同様に縄文時代中期末葉を主体とする集落が検出された。

下堤F遺跡は同台地上の下堤E、G遺跡との台地における同時期の位置関係を把握する課題を含んだ調査で、やはり縄文時代前期末、中期末の集落が検出された。

坂ノ上F遺跡は調査面積が広く2年がかり（1年は表土、第Ⅱ層まで調査）で実施したもので、北側の坂ノ上E遺跡[注2]、北西に位置する坂ノ上A遺跡[注3]、南西の狸崎A遺跡との関連で調査し、縄文時代中期初頭、末葉、弥生時代の遺構が検出され、弥生時代の住居跡は狸崎A遺跡を含めて3遺跡で確認された。本遺跡では特に縄文時代中期初頭の北陸系土器（片）の出土に注目される。捨て場と考えられる沢部からのもので量が多い。また同時期の大型住居跡（1軒）が検出された。

狸崎A遺跡は南北の舌状台地上に所在し、南側調査区は畑地で一部天地替えで調査は不可能であ

り、残存部の調査の結果、縄文時代前期、弥生時代の住居跡が検出された。天地替えの際、出土した遺物（弥生時代）が畑地所有者（四ツ小屋小阿地字坂ノ下　鈴木正男氏）の家に保管されてあり好意により本報告書に紹介できた。北側調査区は縄文時代晩期の土坑墓を主体とした遺構が検出された。土坑墓は土製耳飾り、小玉、石製勾玉、小玉を伴い、小規模ながら環状配置が想定できるものである。

湯ノ沢Ｄ遺跡は前述の下堤Ｅ、Ｇ遺跡の関連で調査したもので、縄文時代中期中葉～末葉の集落が検出された。坂ノ上Ｅ遺跡で検出された９～10世紀と考えられる製鉄炉に伴う炭焼窯と同形態の炭焼窯が１基検出され、製鉄炉の有無を追ったが確認できなかった。

深田沢遺跡は今年度調査の予定に入っていなかったが狸崎Ｂ遺跡の調査と変更で行なったもので畑作の取り入れの関係で調査が遅れた。検出された遺構は平安時代の掘立柱建物跡を主とするもので遺物は少なかった。

（注１）「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1984年３月　秋田市教育委員会

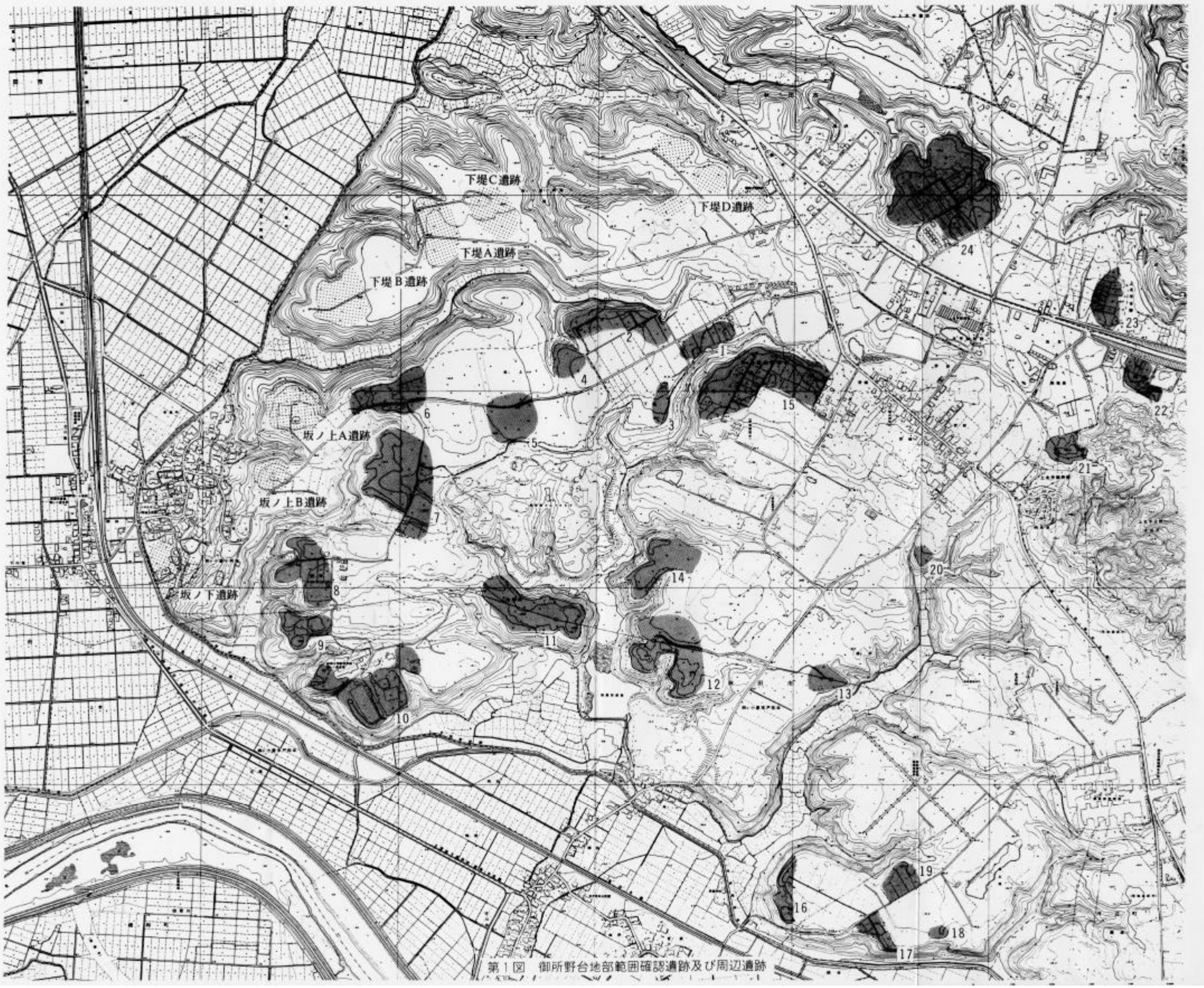
（注２）（注１）同

（注３）「小阿地、下堤・坂ノ上遺跡発掘調査報告書」1976年３月　秋田市教育委員会

## 昭和59年度来跡者（順不同・敬称略）

永瀬福男、小林　克、児玉　準、大野憲司、橋本高史、桜田　隆、船木義勝（秋田県埋蔵文化財センター）、秋元信夫（鹿角市教育委員会）、澤谷　敬、和泉昭一（横手市教育委員会）、越坂一也（石川県立埋蔵文化財センター）、岡本東三（文化庁）、富樫泰時（秋田県文化課）、小島俊彰（金沢美術工芸大学）、加藤三千雄（能都町教育委員会）、山崎文幸（仙北町教育委員会）、高田ミキ（秋田市長夫人）、秋田市ＰＴＡ連合会文化研修（26名）、秋田市立広面小学校ＰＴＡ（35名）、秋田市立御野場中学校ＰＴＡ文化部（16名）、秋田市教育研究室（15名）、秋田市立四ツ小屋小学校４年生(200名)

下北手
上北手
小山田
仁井田
大野
中野
上野
柳林
四小屋
秋田市
田草川
遺跡の位置
1000 m
0
1000
2000




第1図　御所野台地部範囲確認遺跡及び周辺遺跡

| 御所野台地部　範囲確認遺跡一覧表 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 遺跡番号 | 遺跡名 | 所在地 | 時代 | 面積㎡ | 現状 |
| 1 | 下堤E | 秋田市四ツ小屋小阿地字下堤 | 縄文 | 5,625 | 畑 |
| 2 | 下堤F | 〃　〃 | 〃 | 14,375 | 〃 |
| 3 | 下堤G | 〃　〃 | 先土器・縄文(中) | 5,000 | 山林原野 |
| 4 | 坂ノ上C | 〃　四ツ小屋小阿地字坂ノ上 | 縄文 | 6,000 | 〃 |
| 5 | 坂ノ上D | 〃　〃 | 〃 | 14,060 | 〃 |
| 6 | 坂ノ上E | 〃　〃 | 〃 | 15,000 | 〃 |
| 7 | 坂ノ上F | 〃　〃 | 〃 | 37,810 | 〃 |
| 8 | 狸崎A | 〃　四ツ小屋小阿地字狸崎 | 縄文(晩) | 13,750 | 畑・山林原野 |
| 9 | 狸崎B | 〃　〃 | 縄文 | 11,250 | 原野 |
| 10 | 地蔵田A | 〃　四ツ小屋末戸松本字地蔵田 | 先土器・縄文・平安 | 30,000 | 畑 |
| 11 | 地蔵田B | 〃　〃 | 縄文(中晩)・弥生 | 25,000 | 山林原野 |
| 12 | 湯ノ沢A | 〃　四ツ小屋末戸松本字湯ノ沢 | 縄文 | 21,555 | 〃 |
| 13 | 湯ノ沢B | 〃　〃 | 縄文(前・中) | 5,000 | 〃 |
| 14 | 湯ノ沢C | 〃　〃 | 縄文(中晩)・弥生 | 11,565 | 〃 |
| 15 | 湯ノ沢D | 〃　〃 | 縄文(中) | 35,000 | 畑 |
| 16 | 湯ノ沢E | 〃　〃 | 縄文 | 7,500 | 〃 |
| 17 | 湯ノ沢F | 〃　〃 | 縄文・土師須恵 | 5,310 | 〃 |
| 18 | 湯ノ沢G | 〃　〃 | 縄文(後) | 1,300 | 原野 |
| 19 | 湯ノ沢H | 〃　〃 | 縄文 | 5,940 | 畑 |
| 20 | 野畑 | 〃　上北手御所野字野畑 | 縄文(中) | 1,875 | 山林 |
| 21 | 野形 | 〃　上北手御所野字野形 | 土師・須恵 | 5,940 | 山林原野 |
| 22 | 深田沢 | 〃　上北手古野字深田沢 | 縄文・平安 | 6,875 | 畑 |
| 23 | 台 | 〃　上北手古野字台 | 〃 | 8,440 | 〃 |
| 24 | 地方 | 〃　上北手猿田字堤ノ沢 | 縄文(晩) | 54,670 | 畑・原野 |

## 遺跡の位置と地形・地質

### 位　　置

秋田市街から国道13号線を南下し、仁井田、横山を過ぎ、坂を登ると標高約40m前後の広大な台地が開ける。これは奥羽本線四ツ小屋駅方面からもよく見える平坦な台地であり、御所野台地、末戸台と呼ばれている。この台地が臨空港新都市開発計画地域である。

各遺跡の位置については第１図、「御所野台地部範囲確認遺跡及び周辺遺跡」を参照されたい。

### 地形・地質

遺跡の存在する地形は、大別して和田丘陵と末戸台台地に分けられる。和田丘陵は平坦面をあまり持たない。しかし、定高性を持った標高60～150mのかなり開析を受けた老年期地形を示し、地質は第３系鮮新統に属する青色砂質シルト岩（笹岡層）と青灰色塊状泥岩（天徳寺層）、それに中新統に属する暗灰色泥岩（船川層）などからなっている。末戸台台地は標高25～50m強で、その表面は大変平坦である。この台地は和田丘陵と接して数段の段丘を識別できる。これらは内藤[注1]の区分からすると、上位から標高45～50m強の椿台段丘、標高40m強の上野台段丘Ⅰ、標高35m強の上野台段丘Ⅱ、標高25m強の宝竜崎段丘の４段階に分けられる。（第２図）

椿台段丘

岩見川右岸末戸台台地では45～50m強の標高をもつ、いわゆる椿台面をその堆積面とする椿台層が厚い礫（最大径10cm前後）、砂、粘土の互層で構成されている。ただ基底高度はわからない。岩相は最上部に１～２ｍの褐色の粘土質火山灰層があり、次に礫、砂、粘土の互層で、砂礫の部分でしばしばクロス・ラミナ（斜交葉理）がみられ、砂土あるいはシルトは水平な細かい層理をなすことが多い。層厚をみると、礫層はうすく、砂、粘土層が厚い。その下部は第３系の泥岩（船川層）や砂質シルト（笹岡層）となっている。内藤はこの椿台面を関東の下末吉面に対比している。深田沢遺跡は、この椿台段丘に位置する。

上野台段丘Ⅰ

末戸台台地で椿台段丘の南側に標高40m強でついている段丘が上野台段丘Ⅰと呼ばれている。表層の１～２ｍの粘土質火山炭層を除くと、段丘堆積物は最大径20～30cmの礫を含む礫層であり、厚さは５ｍ程度で、その下部は第３系となっている。下堤Ｅ、Ｆ遺跡、坂ノ上Ｆ遺跡、湯ノ沢Ｄ遺跡はこの上野台段丘Ⅰに位置する。

上野台段丘Ⅱ

末戸台台地では上野台段丘Ⅰとの比高が５ｍ強である。段丘堆積物の岩相は、上野台段丘Ⅰとほぼ同様で、層厚は５ｍ前後である。内藤によれば、厚い礫層の下部は椿台層に当るとしている。狸崎Ａ遺跡は、この上野台段丘Ⅱに位置する。

段丘堆積物の特徴は、上野台Ⅰ・Ⅱ面では最大径30cm前後の亜円礫を主体とする、ほぼ一様な礫層をもち、河川堆積物で、厚さも加味すると岩見川などによる河成の浸食段丘面と考えられる。椿

台、上野台Ⅰ、Ⅱ面の各面をおおっている層厚１～２ｍのシルト分を含んだ粘土質火山灰層は、男鹿半島の寒風山が起源と一応考えられている。(注2) この粘土質火山灰層の表面細粒物質の風化状態をみていくと、椿台、上野台Ⅰ、Ⅱ面では黒色土の下の細粒物質のうち、上部50～100cmが明褐色を呈し、下部は灰色で、境は漸移する。また、土壌断面を見ると、椿台、上野台Ⅰ、Ⅱ面をおおう土壌は、いわゆる高岡２統に属していると考えられ、比較的大きい円礫を混入していて、黒色土層を厚く堆積させている。この層中には火山ガラスを混入しており、火山灰が関係しているものと推定される。

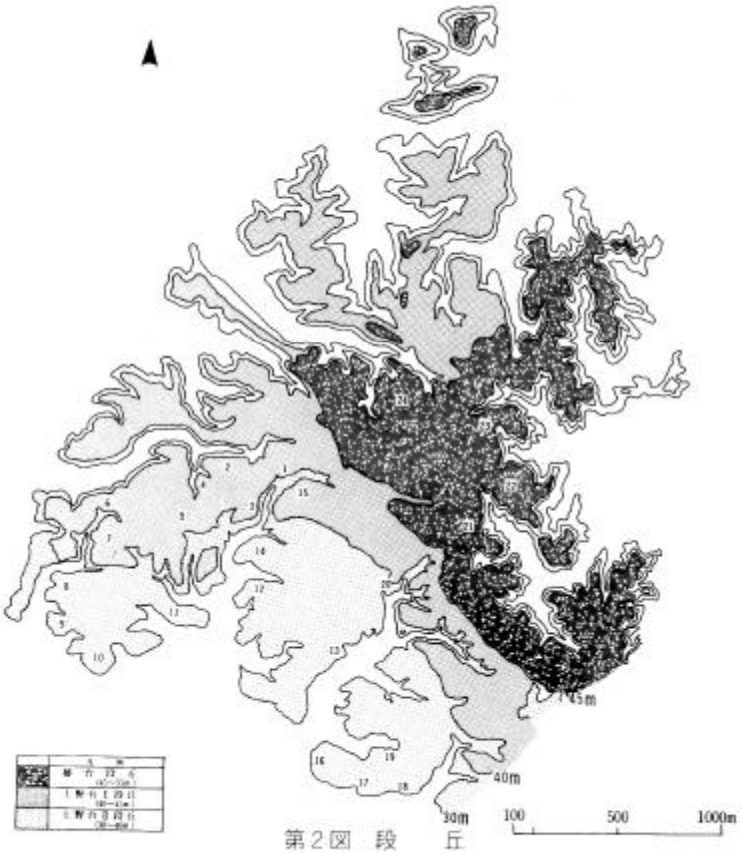
（注１）「秋田県岩見川流域およびその周辺の段丘について」 内藤博夫　1965年　第４紀研究第４巻第１号

（注２）「地形、表層地質・土壌、秋田」 経済企画庁土地分類基本調査　1966年

「八郎潟の研究」 秋田県教育委員会　1965年

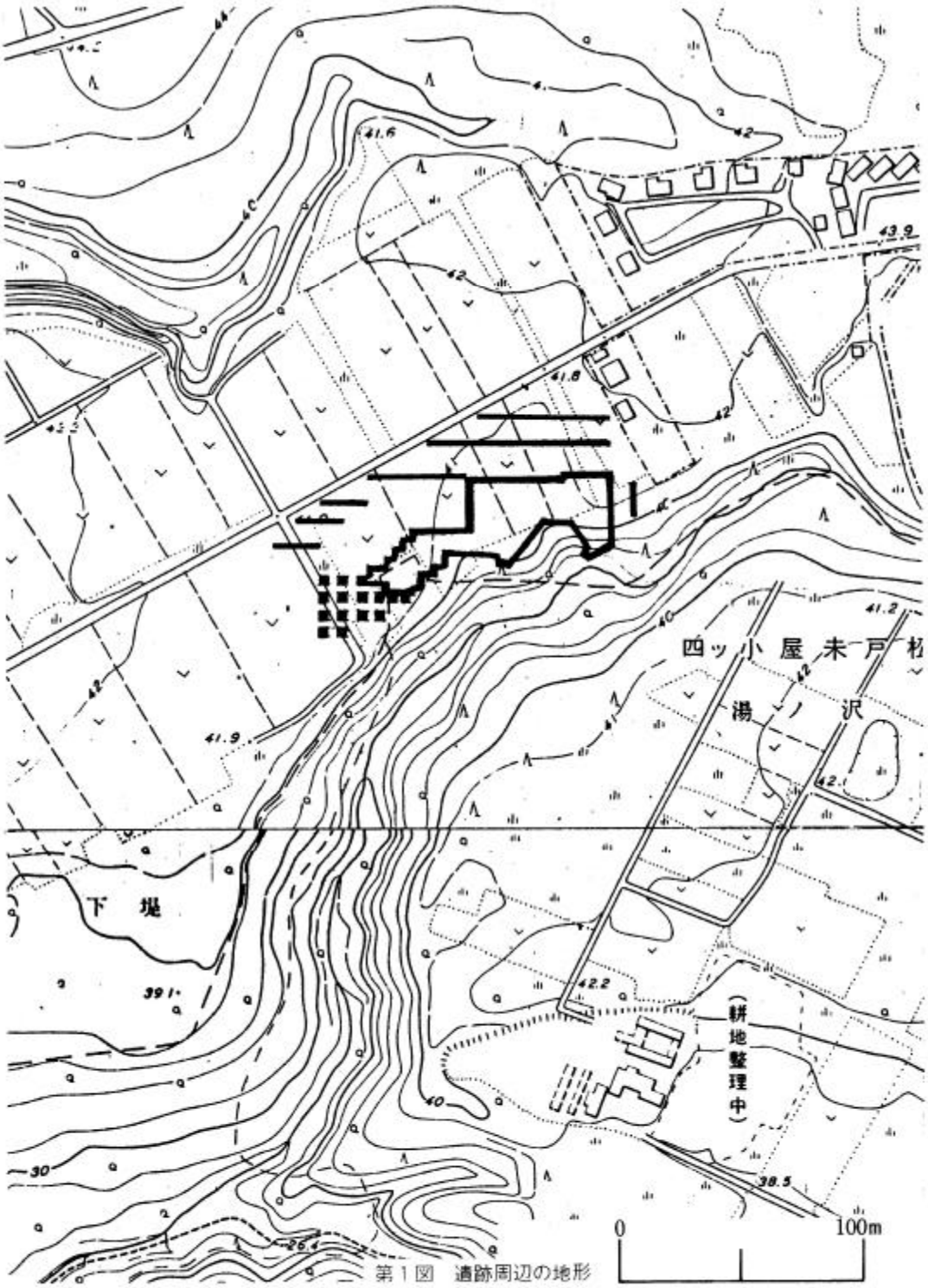
「火山活動と地形」 村山　馨　大明堂

「秋田県男鹿半島一の目潟周辺の火山抛出物について」 林　宏　地質学雑誌第61巻第717号　1955年

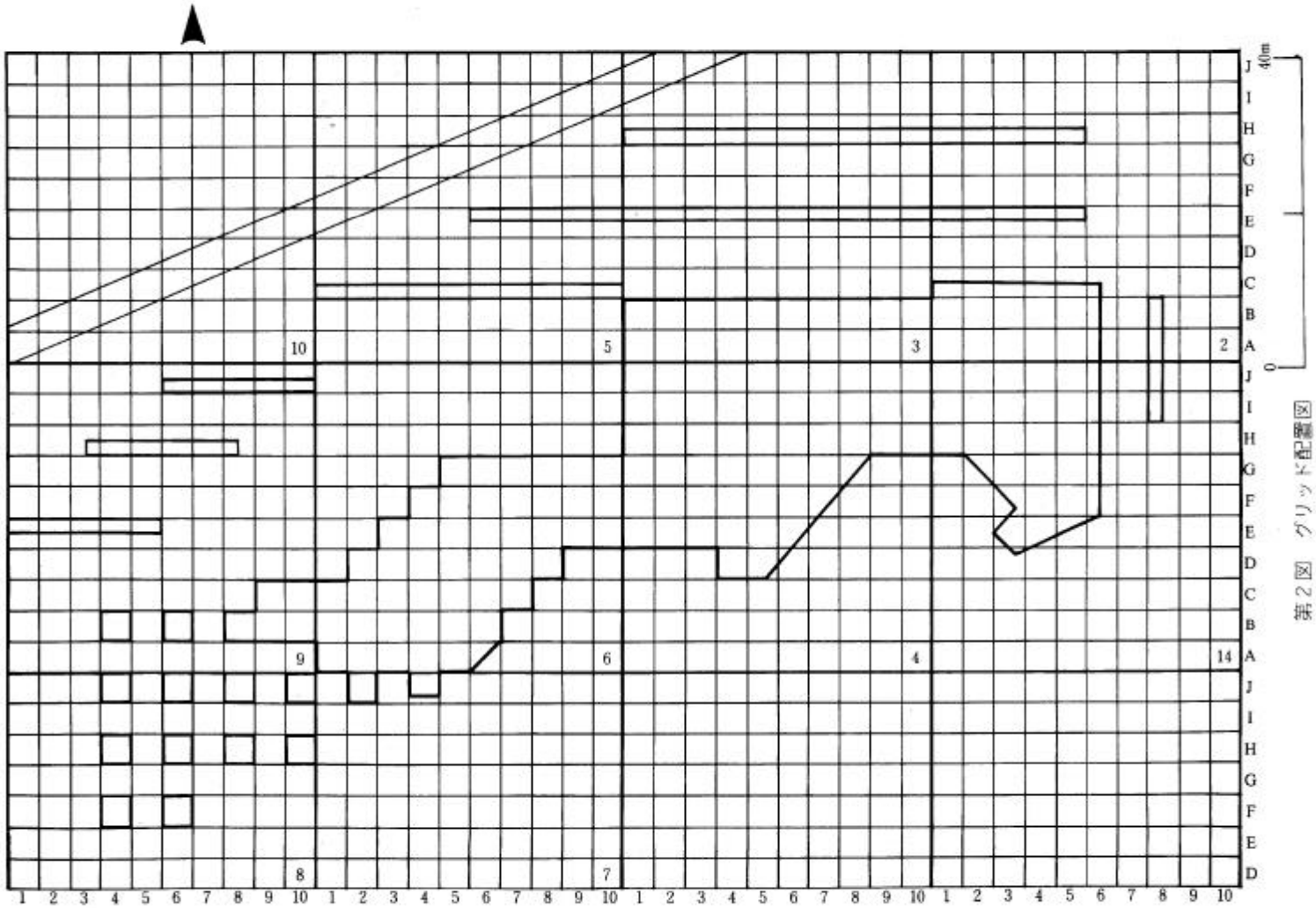



第２図　段　　丘

# 下堤E遺跡




第1図　遺跡周辺の地形




第2図　グリッド配置図

## 遺跡の概観

御所野から小阿地集落に通る市道の南側、標高40m 程の台地が遺跡である。深い沢が南から延びており、遺跡内にも小沢が２本入り込んでいる。遺跡は主に縄文時代中期のもので検出遺構は竪穴住居跡、土坑などである。沢を隔てた南側 100 m のところに湯ノ沢Ｄ遺跡がある。

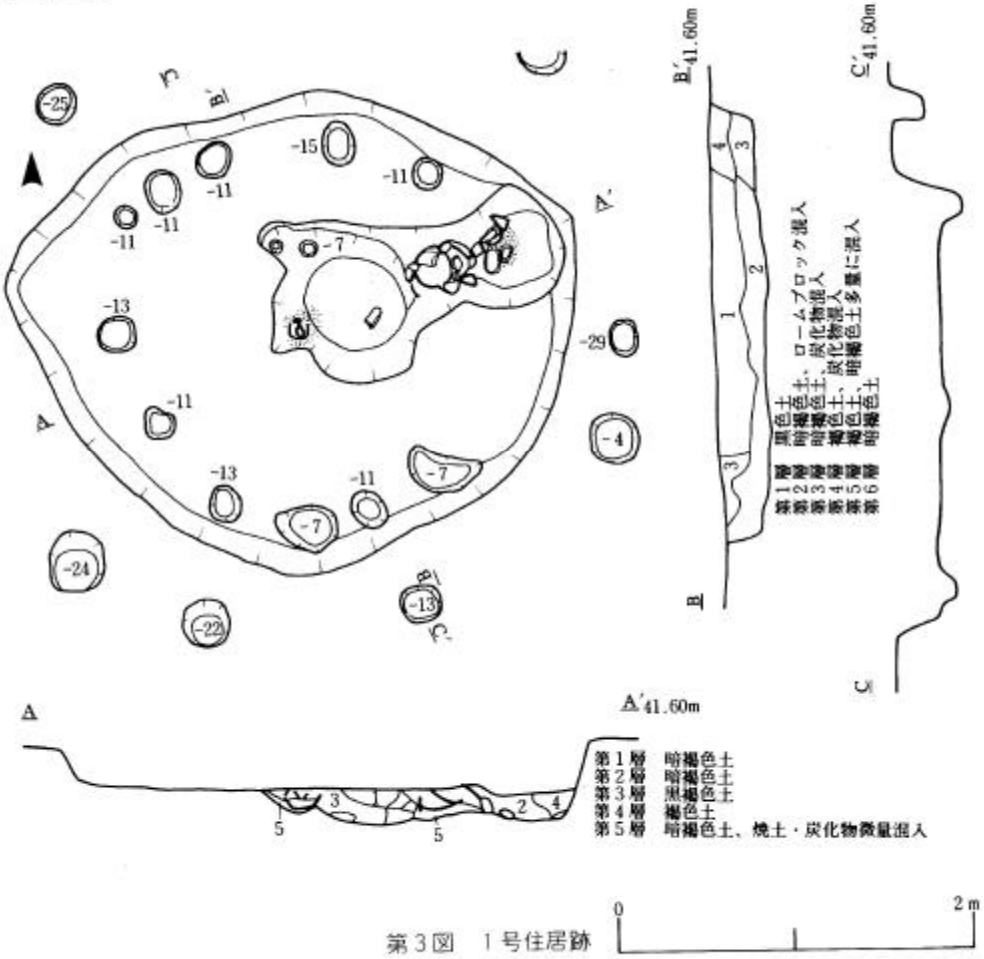
## 遺構と遺物

### １号住居跡（第３図）

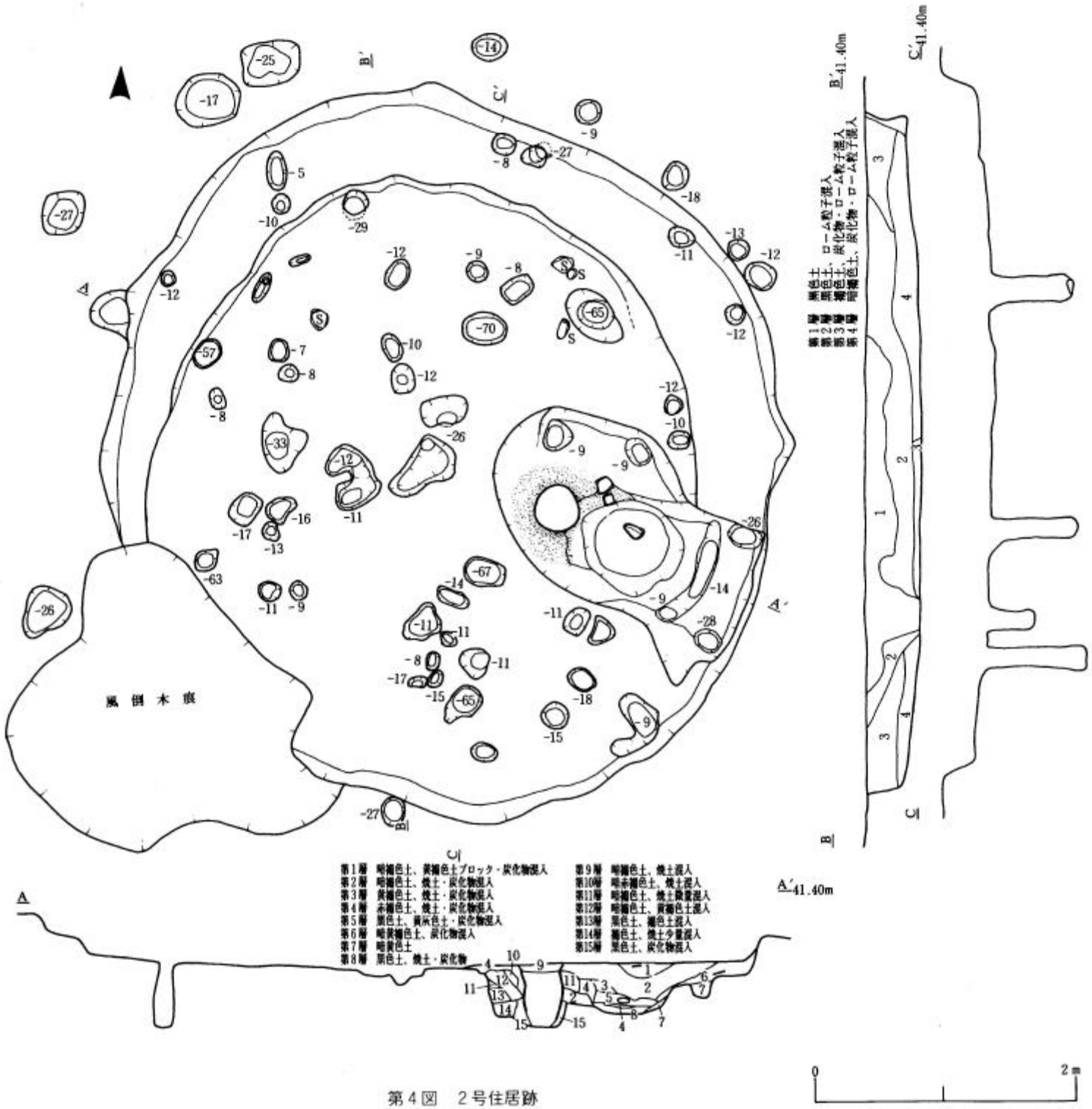
調査区の西側で検出された。

プランは長軸3.2m 、短軸2.6m の楕円形を呈する。確認面からの深さは30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは住居跡内外に検出され、いずれも比較的浅く、主柱穴は明確でない。炉は掘り込みが２ヶ所あり、炉内底面の西側に体部欠損の鉢形土器、東側からは底部の欠損した土器が検出された。床はほぼ平坦で軟弱である。

### 出土遺物




第３図　１号住居跡


風倒木痕
第1層　暗褐色土、黄褐色土ブロック・炭化物混入
第2層　暗褐色土、焼土・炭化物混入
第3層　黄褐色土、焼土・炭化物混入
第4層　赤褐色土、焼土・炭化物混入
第5層　黒色土、黄灰色土・炭化物混入
第6層　暗黄褐色土、炭化物混入
第7層　暗黄色土
第8層　黒色土、焼土・炭化物
第9層　暗褐色土、焼土混入
第10層　暗赤褐色土、焼土混入
第11層　暗褐色土、焼土微量混入
第12層　暗褐色土、黄褐色土混入
第13層　黒色土、褐色土混入
第14層　褐色土、焼土少量混入
第15層　黒色土、炭化物混入
A'41.40m
B'41.40m
C'41.40m
0
2m

第４図　２号住居跡

**土器**（第38図36～44）

36～38は炉埋設土器である。沈線と磨消し手法によって曲線的な文様を展開させる。

**石器**（第47図１・２）

１は両側縁に刃部を作出した削器である。２は磨製石斧で刃部はやや欠損している。

**２号住居跡**（第４図）

調査区西側で検出された。

プランは長軸5.7m、短軸5.2mの楕円形を呈している。南西部は攪乱を受けている。確認面からの深さは42cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは多く検出されているが主柱穴と思われるものは深さ20cm以上のものである。炉は同位置で新旧２回の作り変えが行われている。旧炉は土器埋設部の掘り方、堀り込みの一部を残すのみである。新炉はやや南側に長軸方向を変えている。土器埋設部、石組部、掘り込み部からなる。埋設土器は底部を欠く深鉢形土器を正立に据えており周辺は火熱を受けて赤変している。旧炉出土の埋設土器破片と接合することから同一土器であり、旧炉から新炉に埋設土器を移していることが確認された。石組部には、こぶし大以上の礫がわずかに検出される。周辺は赤変している。また掘り込みが壁に接する部分にピットが検出された。床は浅く２段になっている。平坦で堅い。

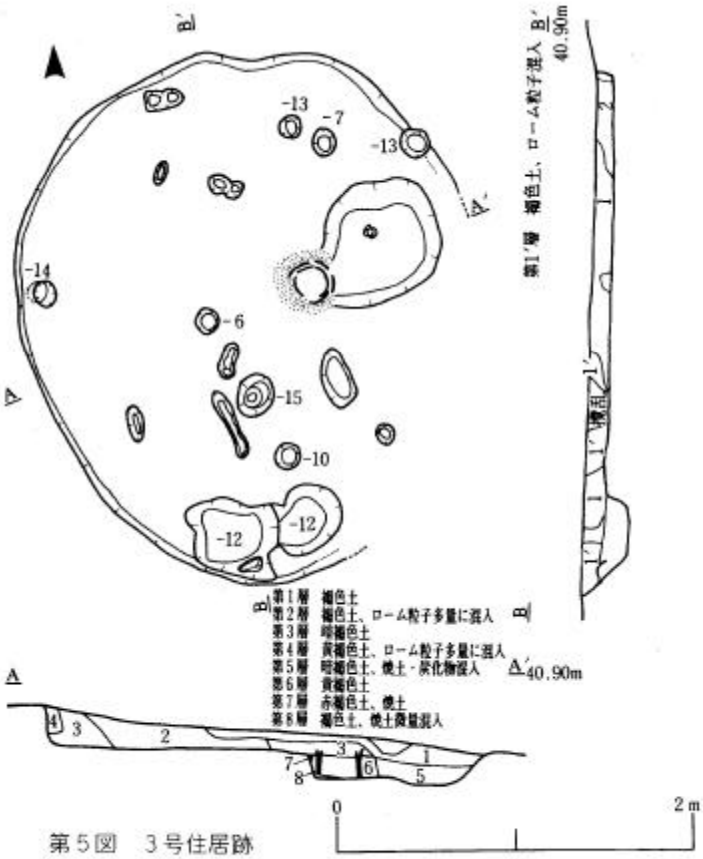
**出土遺物**

**土器**（第31図１、第38図45～48

１は炉埋設土器である。瘤状の突起を有する上部に「V」字状の磨消し帯を施し４単位に区画する。区画された間から沈線を磨消し手法によって「J」字状に文様を横方向に展開させている。地文はLR（縦回転）の縄文である。45～48は覆土から出土した。沈線と磨消し帯で文様を施す。

**石器**（第47図３～８）

３は無茎石鏃、４は縦型石匙、５は掻器（エンドスクレーパー）、６は側縁部に刃部をもつ削器である。７




第５図　３号住居跡

・8は磨製石斧である。

**3号住居跡**（第5図）

調査区の西側で検出された。

プランは長軸3.1m、短軸2.6mの楕円形を呈している。確認面からの深さは20cmで壁はほぼ垂直に立ち上がる（東壁は削平されている。）ピットはいずれも浅く主柱穴は明確でない。炉は土器埋設部と掘り込みからなる。土器埋設部には底部を欠いた個体の異なる深鉢形土器が正立に二重に据えられる。周辺は火熱をうけ赤変している。掘り込みの部分は浅く、底面から小形の鉢形土器が出土している。床は平坦で堅く良好である。

**出土遺物**

**土器**（第31図2・3、第38図49・50）

2・49・50は炉埋設土器である。2は粗製の深鉢形土器である。49・50は沈線と磨消し帯によって文様が施される。3は炉内出土の粗製の深鉢形土器である。

**石器**（第47図9、第48図23・24）

9は掻器で片面加工である。23は磨石、24はくぼみ石である。

**4号住居跡**（第6図）

調査区の西側で検出された。

プランは径5.8mの円形を呈する。確認面からの深さは西側で37cm程で壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは大小合せて44個検出されている。深さ30cm以上の7個が主柱穴と思われる。炉は新旧2基検出された。旧炉は石組部と掘り込みからなる。石組部上面から深鉢形土器の破片が検出された。旧炉は廃絶後きれいに貼床されている。新炉は北東部に作られ、土器埋設部、掘り込み部からなる。土器埋設部には底部を欠く深鉢形土器を正立に据えており周辺は火熱をうけ赤変している。掘り込みは、土器埋設部に近い上部側面が火熱をうけ赤変している。床は比較的平坦であり堅い。住居跡南側に巾10cm、深さ3～4cmの周溝が認められる。

**出土遺物**

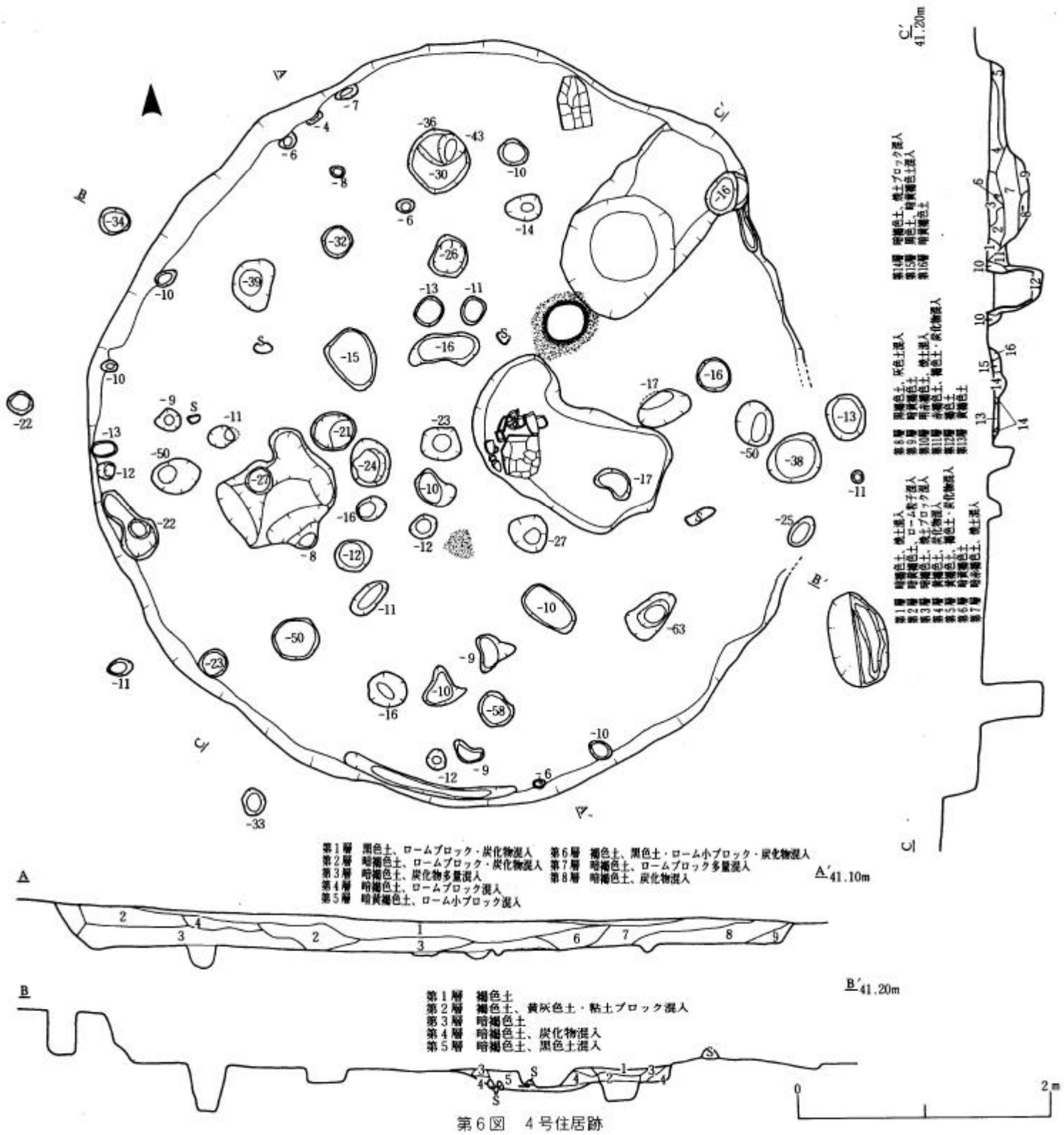
**土器**（第31図4、第32図5・6、第38図51～55、第39図56～58）

4は炉埋設土器である。ゆるい波状口縁を有し、口縁部が外反、胴部が膨らむ深鉢形土器である。口縁部の無文帯から縦にのびる磨消し帯によって4単位に区画し、間には「J」字状の文様を配している。5は旧炉内、6は床面から出土した深鉢形土器である。沈線と磨消し帯によって横方向に文様を展開させている。6は小区画内に円形の刺突を施している。51～58は覆土から出土した。沈線と磨消し帯によって文様が施される。

**石器**（第47図10・11）

10は上部が欠損している石錐で、断面が菱形を呈している。11は一部に原石面を残す掻器である。

**5号住居跡**（第7図）

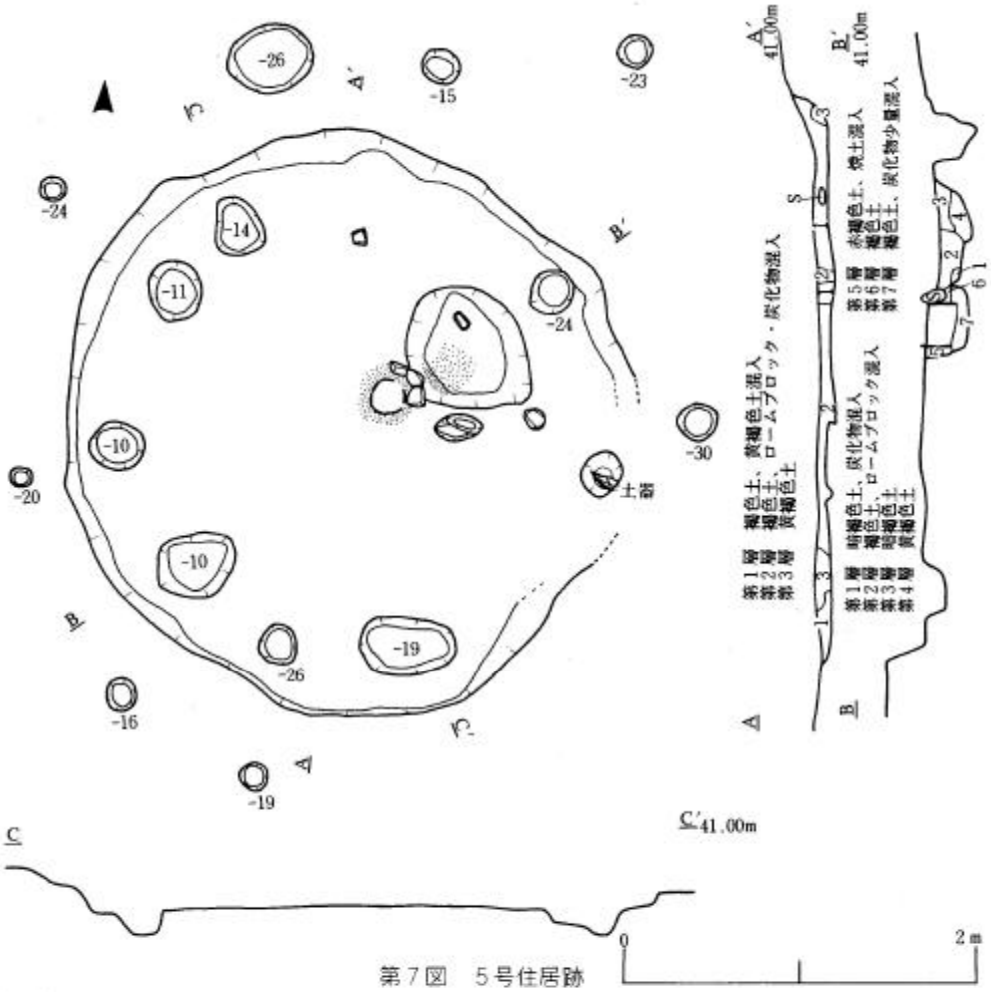

A
A'
41.10m
B
B'
41.20m
C
C'
41.20m
第1層　黒色土、ロームブロック・炭化物混入
第2層　暗褐色土、ロームブロック・炭化物混入
第3層　暗褐色土、炭化物多量混入
第4層　暗褐色土、ロームブロック混入
第5層　暗黄褐色土、ローム小ブロック混入
第6層　褐色土、黒色土・ローム小ブロック・炭化物混入
第7層　暗褐色土、ロームブロック多量混入
第8層　暗褐色土、炭化物混入
第1層　褐色土
第2層　褐色土、黄灰色土・粘土ブロック混入
第3層　暗褐色土
第4層　暗褐色土、炭化物混入
第5層　暗褐色土、黒色土混入
0
2m

第6図　4号住居跡

調査区の西側、４号住居跡南側で南にやや傾斜する斜面で検出された。

プランは径３.２ｍの円形を呈する。東壁は一部耕作により若干削平されている。確認面からの深さは西側で25cmで壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは住居跡内の壁際に８個、住居跡外に８個検出されているが、主柱穴は不明である。炉は石囲い土器埋設部と掘り込みからなる。石囲い土器埋設部には底部を欠いた鉢形土器を据えており、周辺は火熱をうけ赤変している。掘り込みは比較的浅く、底面は火熱をうけ赤変し堅くなっている。床面は比較的平坦で堅い。

**出土遺物**




第７図　５号住居跡

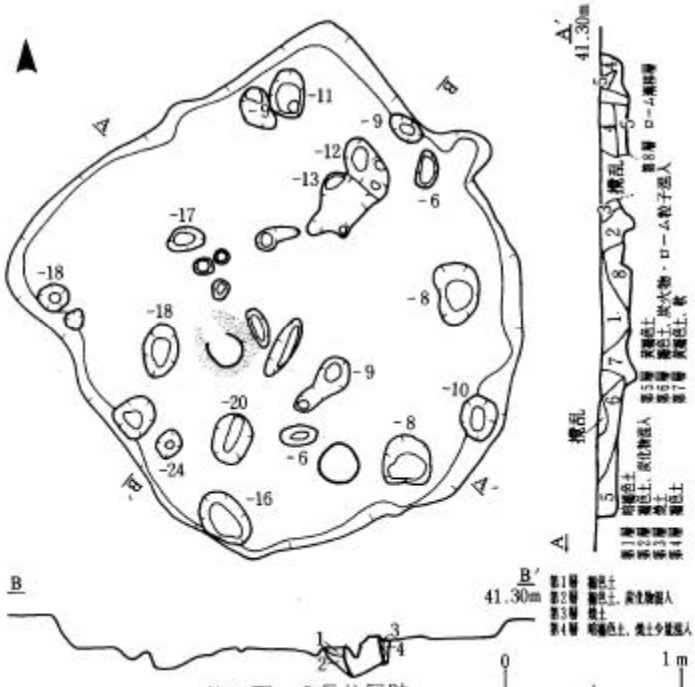
**土器**（第32図７）

７は炉埋設土器である。胴部が膨らむ深鉢の粗製土器で、地文はＬＲ（縦回転）の縄文である。

**６号住居跡**（第８図）

調査区東側で検出された。

プランは長軸2.7m、短軸2.5mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは18cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは大小合せて22個検出されているが、主柱穴は不明である。炉は土器埋設炉である。底部を欠いた深鉢形土器を据えており、周辺は火熱をうけ赤変いる。床は耕作による攪乱をうけ凹凸が著しく、やや軟弱である。



第8図　6号住居跡

**出土遺物**

**土器**（第32図8）

炉埋設土器である。口縁部が外反し、胴部がゆるく膨らむ深鉢形土器である。口縁部は無文帯で、頸部に一条の沈線がめぐる。下方は沈線と磨消し帯によって4単位に区画され、間を弧状の磨消し帯で連絡させている。

**7号住居跡**（第9図）

調査区東側で検出された。

プランは径約3.4mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは約18cmである。壁はほぼ平坦で堅く、北側に径50cmの焼土が検出された。

**出土遺物**

**土器**（第33図9、第39図59～62）

9は炉埋設土器である。体部下方に波状に沈線がめぐり、その上部は曲線的に沈線区画による磨消し帯が施されている。59～62は覆土から出土した。59は波状口縁の頂部下に粘土紐を貼付しその上部に撚糸圧痕文を施している。60～62は沈線区画による磨消し帯を施している。

**石器**（第47図12～16）

12・13は削器、掻器状石器、14～16は磨製石斧である。

**8号住居跡**（第10図）

調査区東側で検出された。

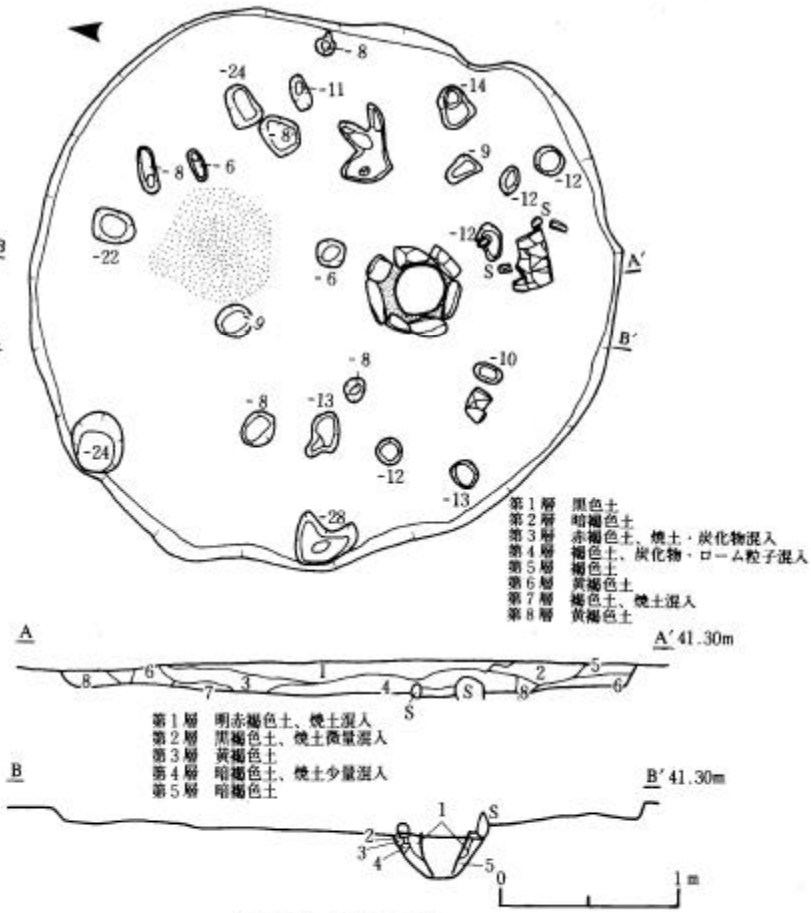
プランは長軸5.1m、短軸4.8mの楕円形を呈する。確認面からの深さは約20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは大小37個検出されており、規則的にまわる20cm以上の深さをもつ9個が主

柱穴と思われる。炉は南西部に作られており、土器埋設部と掘り込みからなる。土器埋設部には鉢形土器の胴部を正立して据えている。周辺は火熱をうけて赤変している。掘り込みの底面、側面は火熱をうけて赤変し堅い。床面は比較的平坦でやや軟弱である。

**出土遺物**

**土器**（第33図10、第39図63・64）

10は炉埋設土器である。口縁部が外反し、胴部がゆるく膨らむ深鉢形土器である。沈線区画内を磨消し、横方向へ波状に文様を展開させている。63・64は覆土から出土した。




第9図　7号住居跡

**石器**（第47図17）

両側縁部に刃部をもつ削器で、片面加工である。

**9号住居跡**（第11図）

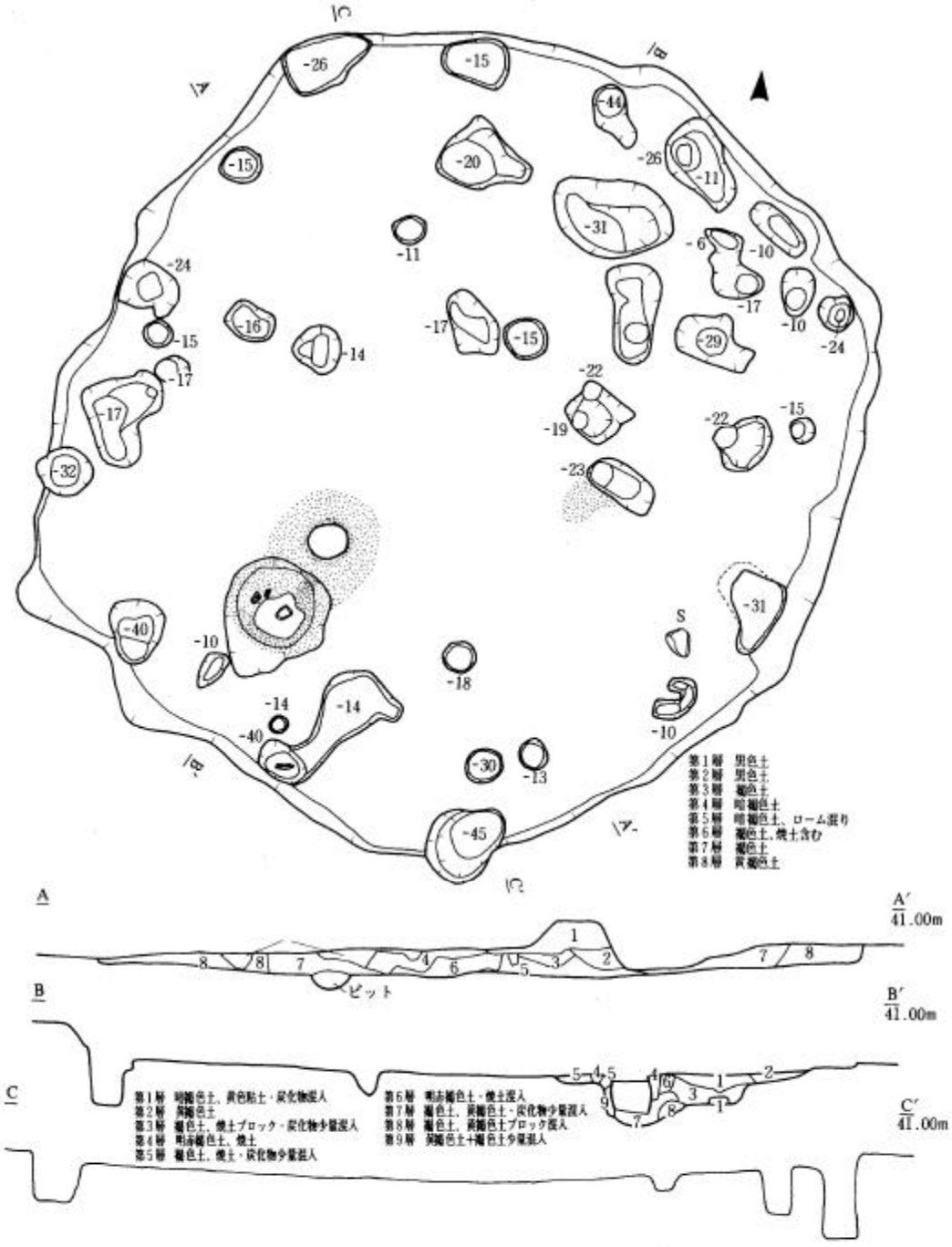
調査区東側で検出された。

プランは長軸5.0m、短軸4.3mの楕円形を呈する。確認面からの深さは東側で19cmである。壁はややゆるやかに立ち上がる。ピットは大小32個程検出されているが、主柱穴は不明である。炉は土器埋設炉で、鉢形土器の胴部を正立して据えている。炉の周辺および住居内中心部にかけて火熱をうけ、焼土が広範囲に認められる。床面は平坦である。

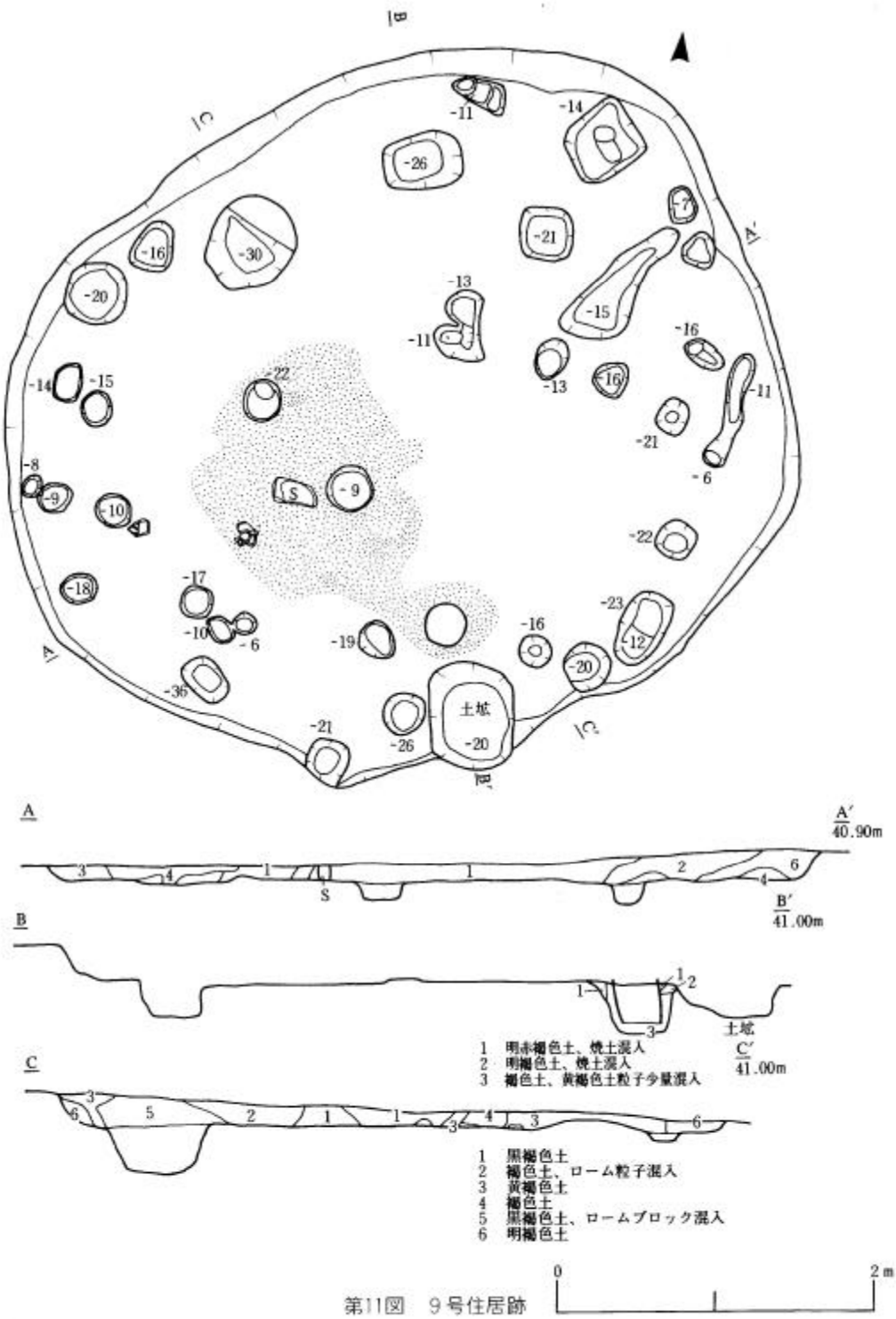
**出土遺物**

**土器**（第33図11・12、第39図65～68）

11は炉埋設土器である。口縁部が直立し、胴部がゆるく膨らむ深鉢の粗製土器である。地文は撚糸文である。12は床面直上から出土した胴部が膨らむ深鉢形土器である。沈線区画内を磨消し、曲線的な文様を展開させる。65～68は覆土から出土した。沈線区画の磨消し帯を施し、65・66は刺突文


第1層　黒色土
第2層　黒色土
第3層　褐色土
第4層　暗褐色土
第5層　暗褐色土、ローム混り
第6層　褐色土、焼土含む
第7層　褐色土
第8層　黄褐色土
A
A′
41.00m
B
B′
41.00m
C
C′
41.00m
ピット
第1層　明褐色土、黄色粘土・炭化物混入
第2層　黒褐色土
第3層　褐色土、焼土ブロック・炭化物少量混入
第4層　明赤褐色土、焼土
第5層　褐色土、焼土・炭化物少量混入
第6層　明赤褐色土・焼土混入
第7層　褐色土、黒褐色土・炭化物少量混入
第8層　褐色土、黒褐色土ブロック混入
第9層　黒褐色土十褐色土少量混入
0
2m

第10図　8号住居跡


A
A′
40.90m
B
B′
41.00m
C
C′
41.00m
土坑
1 明赤褐色土、焼土混入
2 明褐色土、焼土混入
3 褐色土、黄褐色土粒子少量混入
1 黒褐色土
2 褐色土、ローム粒子混入
3 黄褐色土
4 褐色土
5 黒褐色土、ロームブロック混入
6 明褐色土
0
2m

第11図　9号住居跡

を施している。

**10号住居跡**（12図）

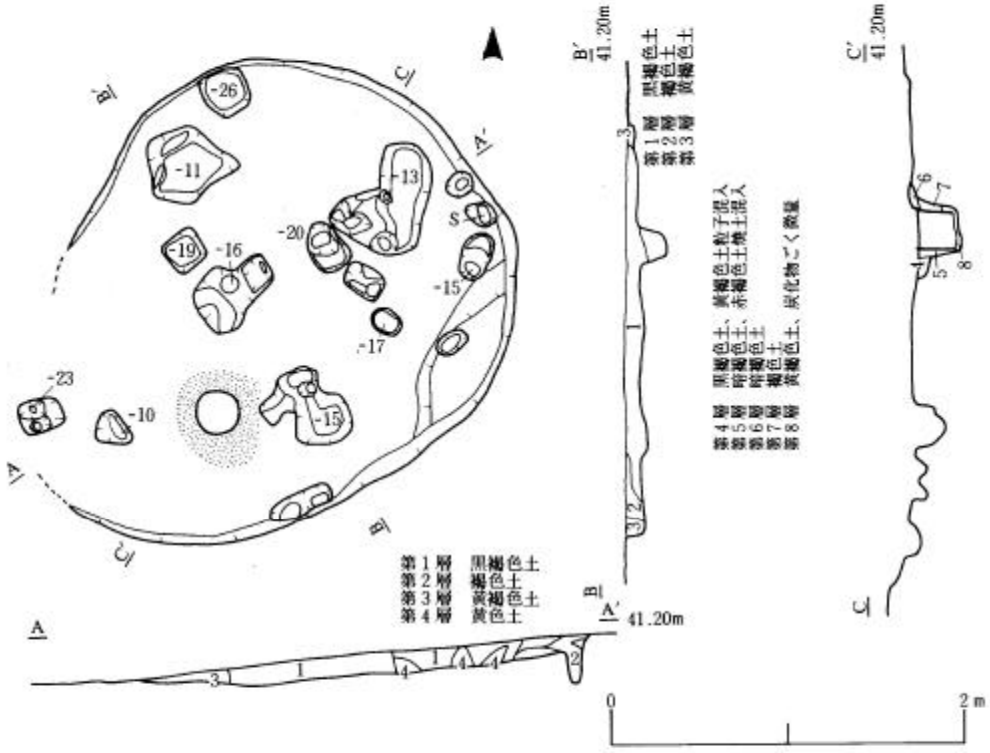
調査区東側で、西にゆるく傾斜する斜面で検出した。

プランは長軸3.0m 、短軸2.5m の楕円形を呈する。確認面からの深さは東側で12cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは小さなものが16個程検出されているが、主柱穴は不明である。炉は土器埋設炉で、鉢形土器の胴部を正立して据えている。炉の周辺は火熱をうけ赤変している。床面は比較的平坦で堅い。

**出土遺物**

**土器**（第33図13）

炉埋設土器である。深鉢の精製土器で地文はＲＬ（縦回転）の縄文である。




第12図　10号住居跡

**11号住居跡**（第13図）

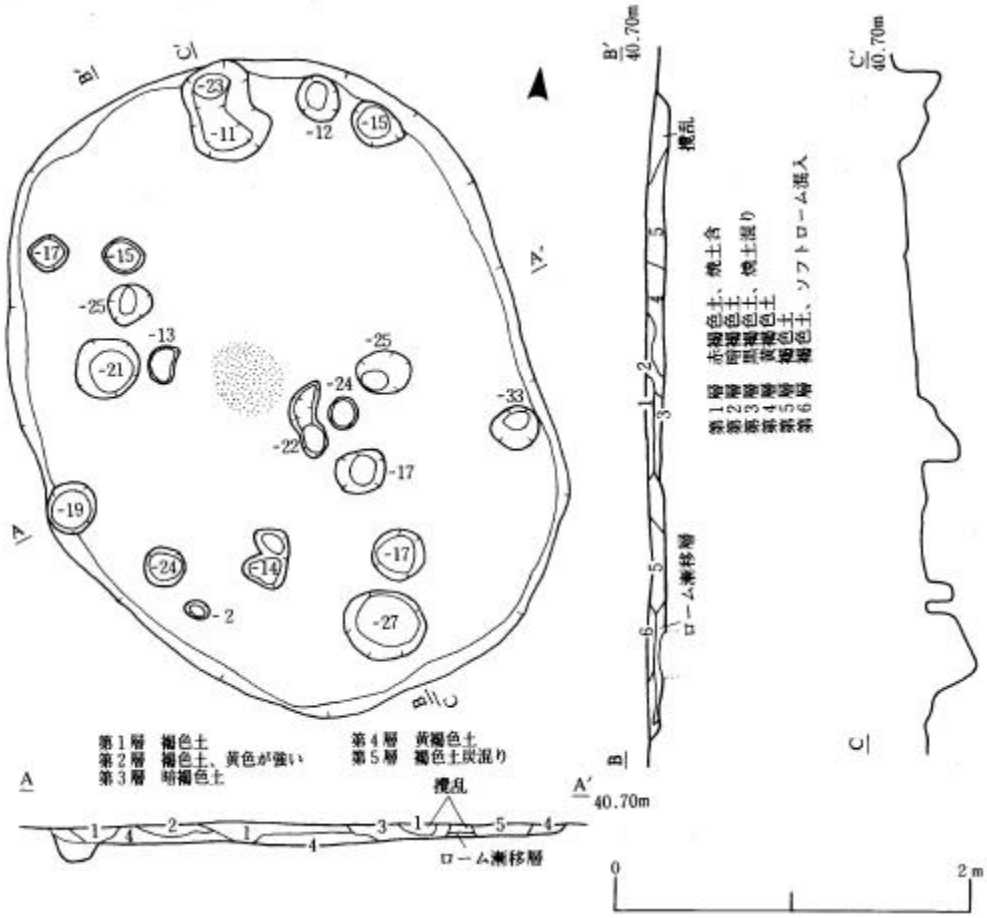
調査区の東側、南にゆるく傾斜する斜面で検出された。９号住居跡の南に隣接する。

プランは長軸3.7m 、軸2.9m の楕円形を呈する。確認面からの深さは約10cmで、壁はゆるやかに立ち上がる。ピットは不規則に20個程検出されている。炉については中央部で径40cmの広がりをもつ焼土が検出されたのみである。床面は比較的平坦で軟弱である。

**出土遺物**

**土器**（第39図69）

覆土から出土した小破片である。




第13図　11号住居跡

**12号住居跡**（第14図）

調査区の東側で南西に傾斜する斜面で検出された。

プランは長軸7.2m 、短軸6.4m の楕円形を呈する。13号住居跡によって炉の一部と床面中央部、南壁の一部が切られている。確認面からの深さは北側で50cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁直下に巾10～18cm、深さ２～５cmの周溝がめぐっている。ピットは大小合せて50個程検出されている。深さ30cm以上の壁柱穴８個と、内側で検出された深さ40cm以上のピットが主柱穴と考えられる。炉は土器埋設部、石組部、掘り込み部からなる。土器埋設部には底部を欠いた鉢形土器を正立して据えている。周辺は火熱をうけ赤変している。石組部は礫の抜き取り痕跡が認められ、礫は残存しない。床面は平坦で堅くしまり良好である。

**出土遺物**

**土器**（第33図14、第39図70～78、第40図79～84）

14は炉埋設土器である。口縁部がほぼ直立し、胴部がゆるく膨らむ深鉢形土器である。頸部に一条の沈線がめぐる。地文はＲＬ（縦回転）の縄文である。70～84は覆土から出土した。沈線区画の磨消し帯で文様を施す土器群である。76・77は刺突文がみられる。

**石器**（第47図18・19、第48図25）

18は有茎の石鏃である。19は磨製石斧で刃面に擦痕が認められる。25は両端が欠損している石棒である。

**13号住居跡**（第14図）

調査区東側で12号住居跡を切って検出された。土層断面観察の結果、明確に12号住居跡が埋ってから、ほぼ同心円状に掘り込まれていることが確認されている。

プランは径2.9m の円形を呈する。確認面からの深さは約55cmで壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁直下には南側を除き周溝がめぐり、この周溝上に、いわゆる壁柱穴が25個検出されている。ピットは外側に斜めに掘り込まれる。住居跡の南側は開かれて、沢に続いている。非常に堅くしまり道路（通路）状を呈し、出入口施設と思われる。炉は中央部に作られている。石囲い炉であり、周辺は火熱を受け赤変している。床面は平坦で堅くしまり良好である。

**14号住居跡**（第15図）

調査区の東側で検出された。

プランは長軸7.2m 、短軸6.6m の楕円形を呈する。確認面からの深さは約38cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは大小25個検出されている。主柱穴は壁直下にある深さ38m 以上のピット７個と、やや内側に掘り込まれた深さ40cm以上の７個が考えられる。北西部には巾12～20cm、深さ５～８cmの周溝が認められる。炉は石囲い土器埋設部、石組部、掘り込み部からなる。石囲い土器埋設部には底部を欠いた深鉢形土器を正立して据えている。石組部の礫は認められないが、内部に抜き取り痕と思われる凹凸があり、礫の存在をうかがわせる。また内面上部が火熱をうけ赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

**出土遺物**

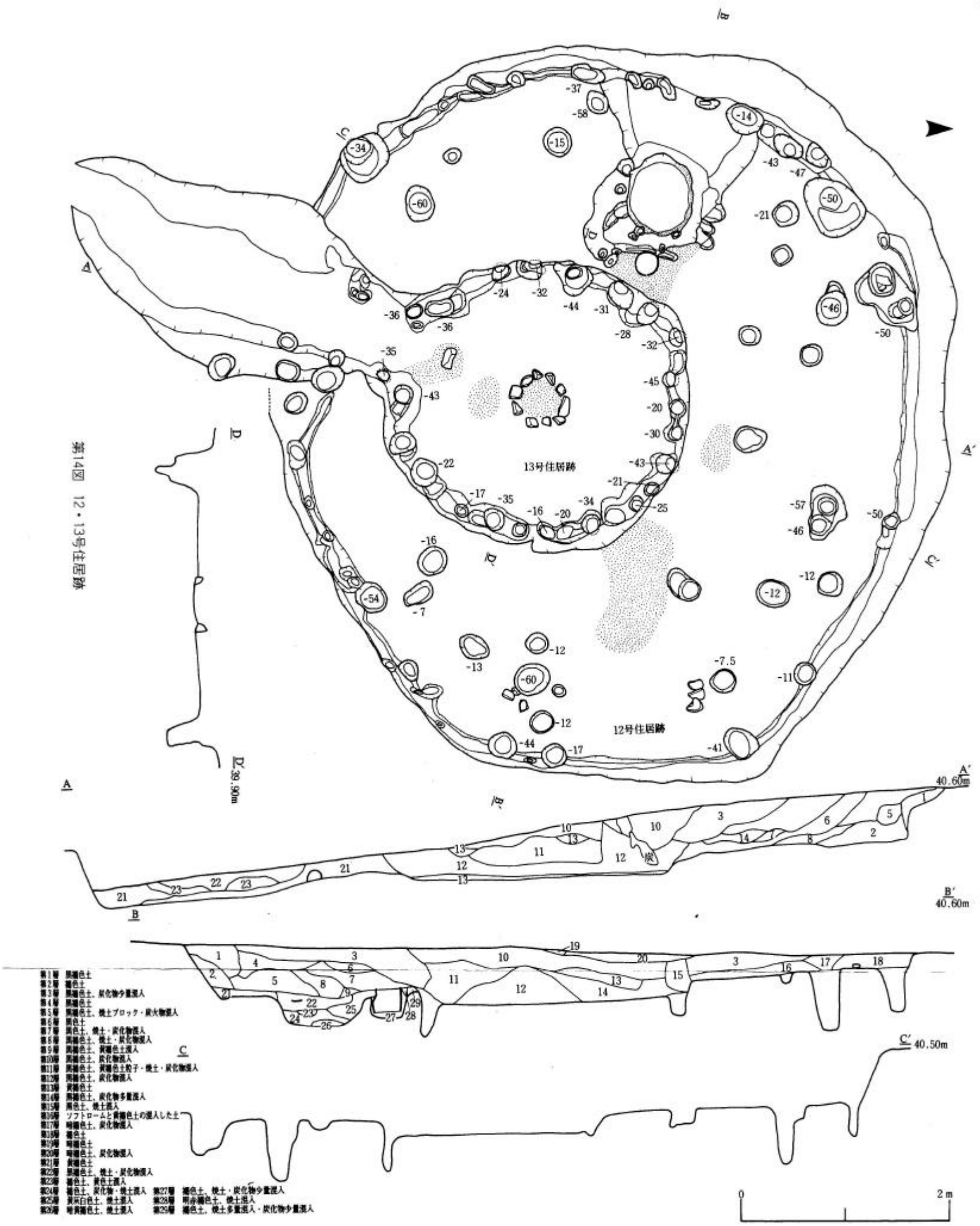
**土器**（第34図15、第40図85～92）

15は炉埋設土器である。胴部が膨らむ粗製の深鉢形土器である。地文はＬＲ（縦回転）の縄文で、原体の結び目がみえる。85～92は覆土から出土した。85～89は口縁部が無文帯で頸部に一条の沈線がめぐっている。85は撚糸文である。90～92は沈線と磨消しによって文様を施している。

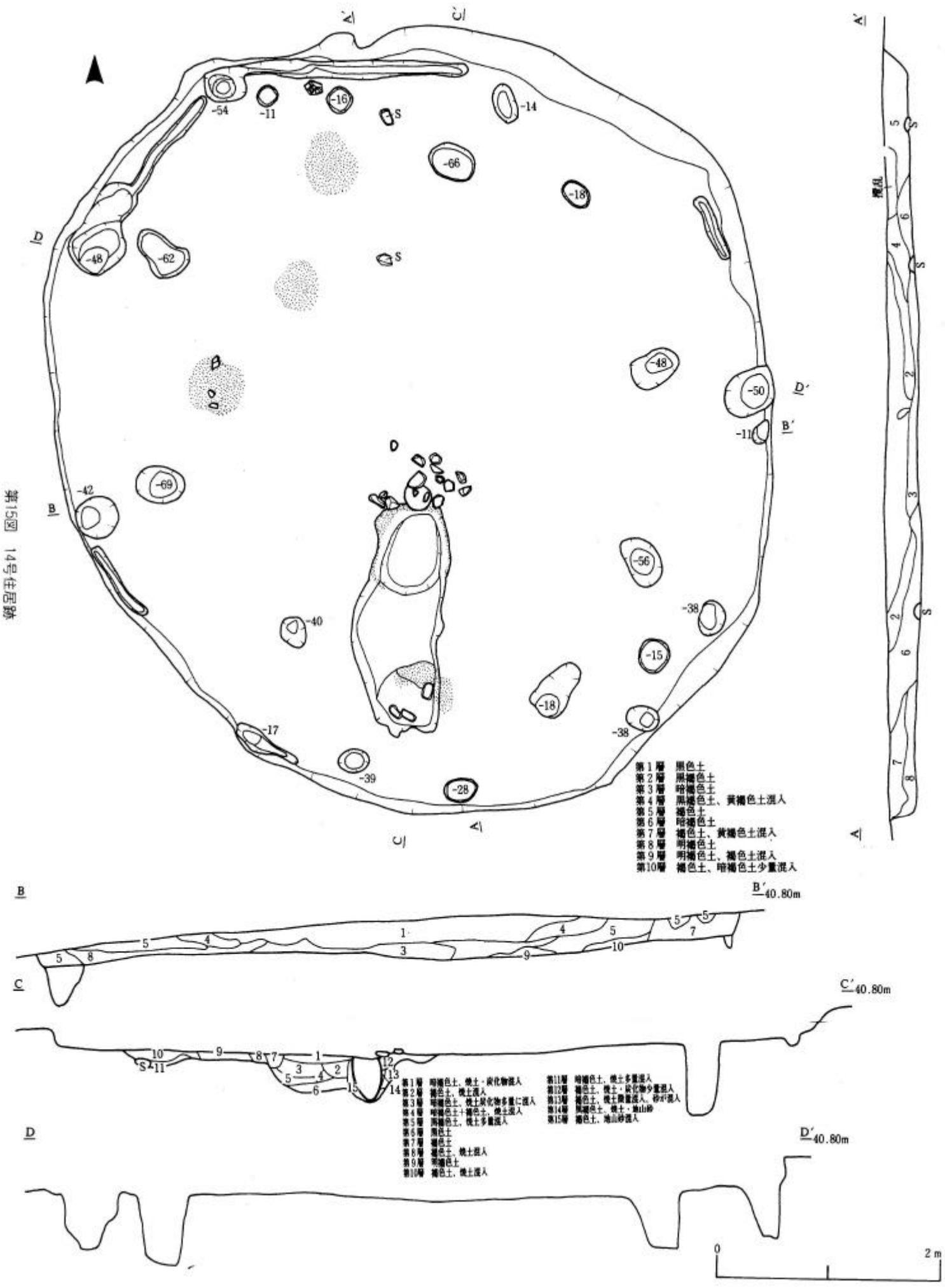
**石器**（第47図20、第48図26・27）

20は横型石匙、26は磨石、27は敲石である。

**15号住居跡**（第16図）




第14図　12・13号住居跡


第1層　黒色土
第2層　黒褐色土
第3層　暗褐色土
第4層　黒褐色土、黄褐色土混入
第5層　褐色土
第6層　暗褐色土
第7層　褐色土、黄褐色土混入
第8層　明褐色土
第9層　明褐色土、褐色土混入
第10層　褐色土、暗褐色土少量混入
第1層　暗褐色土、焼土・炭化物混入
第2層　褐色土、焼土混入
第3層　暗褐色土、焼土炭化物多量に混入
第4層　暗褐色土＋褐色土、焼土混入
第5層　黒褐色土、焼土多量混入
第6層　黒色土
第7層　褐色土
第8層　褐色土、焼土混入
第9層　黒褐色土
第10層　褐色土、焼土混入
第11層　暗褐色土、焼土多量混入
第12層　褐色土、焼土・炭化物少量混入
第13層　褐色土、焼土微量混入、砂が混入
第14層　黒褐色土、焼土・地山砂
第15層　褐色土、地山砂混入
40.80m
0
2 m

第15図　14号住居跡

調査区東側、西へ傾斜する斜面で検出された。

プランは長軸3.0m 、短軸2.6m の楕円形を呈する。確認面からの深さは東側で16cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは壁下に８個検出されているが浅い。炉は隣接して２基検出されている。いずれも土器埋設炉で、東側は鉢形土器の胴部を斜位に据えており、西側の炉は小形の鉢形土器の胴部をやや斜位に据えている。いずれも周辺は赤変している。この二つの炉には切り合いがなく新旧関係は不明である。床面はやや凹凸があり、軟弱である。

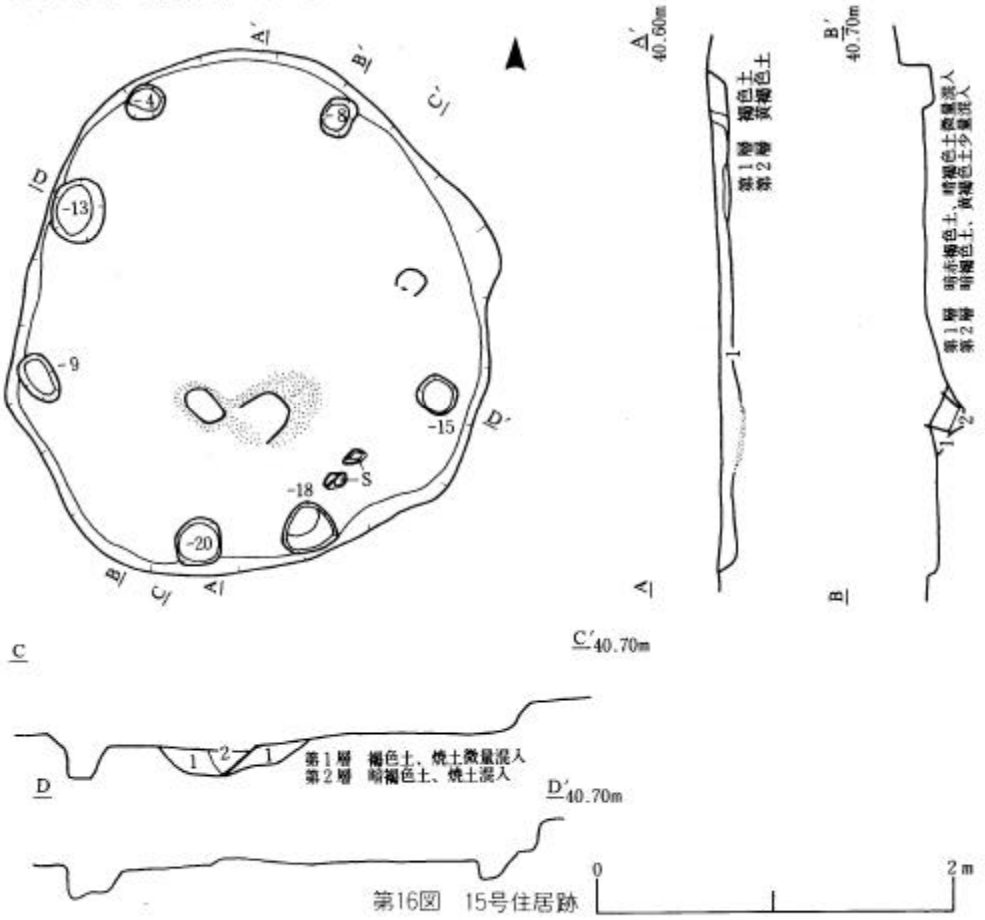
**出土遺物**

**土器**（第34図16～18）

16・17は炉埋設土器で、粗製の深鉢形土器である。16はＲＬ（縦回転）、17はＲＬ（前々段多条）の縄文である。18は床面から出土した。口縁部に４個の山形突起をもつ。口縁部は無文帯で、山形突起の下方から沈線と磨消しによって４単位に区画している。地文は区画内に残り、撚糸文である。

**石器**（第47図21）

扁平な小形の磨製石斧である。




第16図　15号住居跡

**16号住居跡**（第17図）

調査区の東側、沢に続く傾斜面で検出された。

プランは長軸3.7m 、短軸2.5m の楕円形を呈する。確認面からの深さは約15cmで壁はゆるやかに立ち上がる。壁の残存は東側が良好である。ピットは壁下に６個検出されているが主柱穴は不明である。炉は若干位置を移して２時期の作り変えがある。新炉は石囲い土器埋設炉である。炉は土器埋設部と掘り込み部からなる。部分的に貼り床が認められたり、埋設土器が新炉の下部に入り込む様相をみせる。床面は礫層の礫が多数露出しており凹凸が激しい。

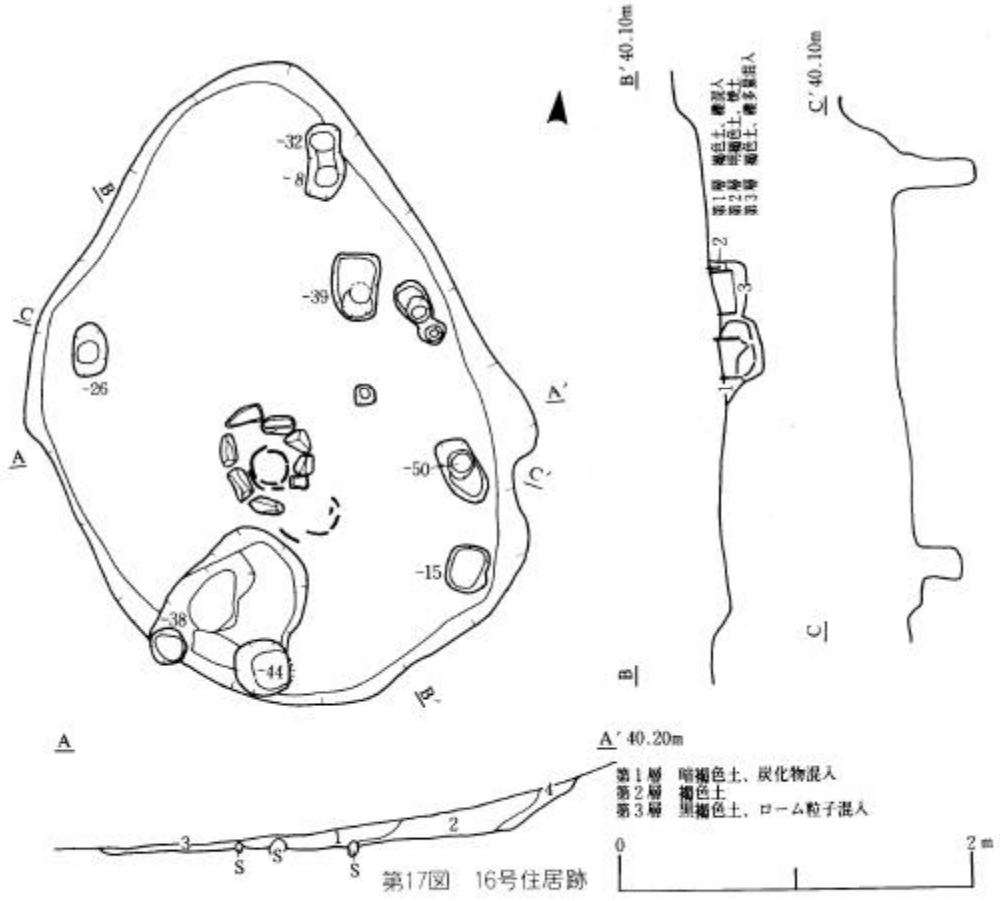
**出土遺物**

**土器**（第34図19、第35図20）

19・20は炉埋設土器である。19は胴部が膨らむ粗製の深鉢形土器である。地文は撚糸文である。20は沈線区画の磨消し帯によって文様を展開させ、区画内には刺突文を施している。

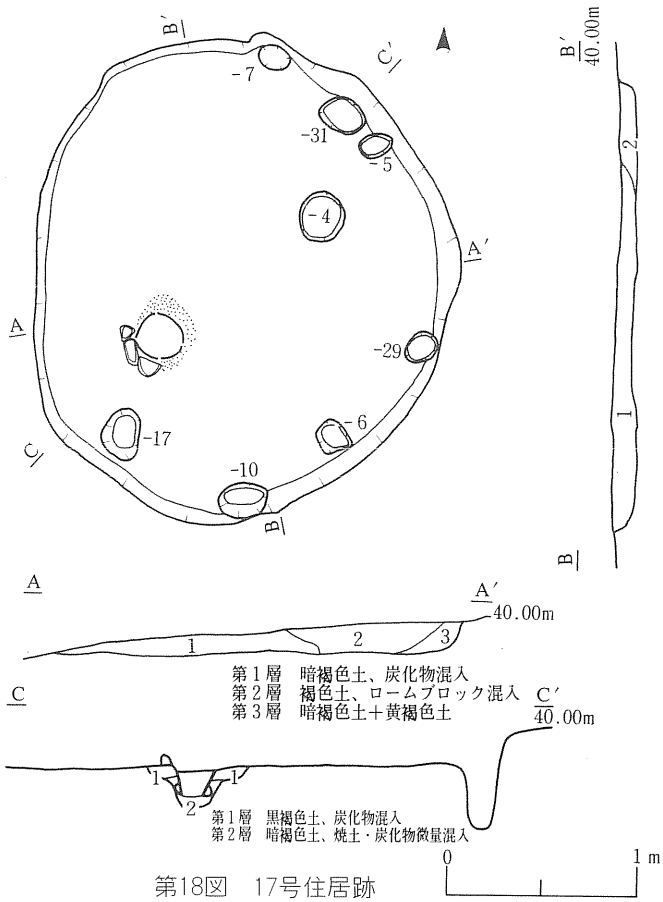
**17号住居跡**（第18図）

調査区の東側で検出された。西方に傾斜しており、南西部壁はわずかしか残存しない。




第17図　16号住居跡

プランは長軸2.5m 短軸2.3m の楕円形を呈する。確認面からの深さは約17cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは7個検出されているが、東側の壁沿いに集中してみられる。主柱穴は明確でない。炉は住居跡の南西部に作られている。南西側に礫が3個並び、本来は石囲い土器埋設炉と思われる。埋設土器は把手付き壺形土器の胴部を欠いて、倒立させて据えている。炉周辺は火熱をうけ赤変している。床は平坦である。



第18図　17号住居跡

**出土遺物**

**土器**（第35図21）

倒置されていた炉埋設土器である。胴下半部を欠いている。2本の隆線のめぐる4ヶ所に橋状把手をもつ壺形土器である。胴部は沈線区画と磨消し帯が施される。地文は複節斜縄文である。

**18号住居跡**（第19図）

調査区中央部の南側で検出された。

プランは径3mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは約20cmで壁はゆるやかに立ち上がる。ピットは壁沿いに炉を囲むように6個検出されている。炉は中央東寄りと西側の2ヶ所で検出された。ひとつは土器埋設炉で、周辺は火熱をうけ赤変している。もうひとつは焼土と掘り込み部からなる炉であるが、埋設土器はない。新旧関係については不明である。床面は平坦で堅く良好である。

**出土遺物**

**土器**（第35図22、第40図93～100）

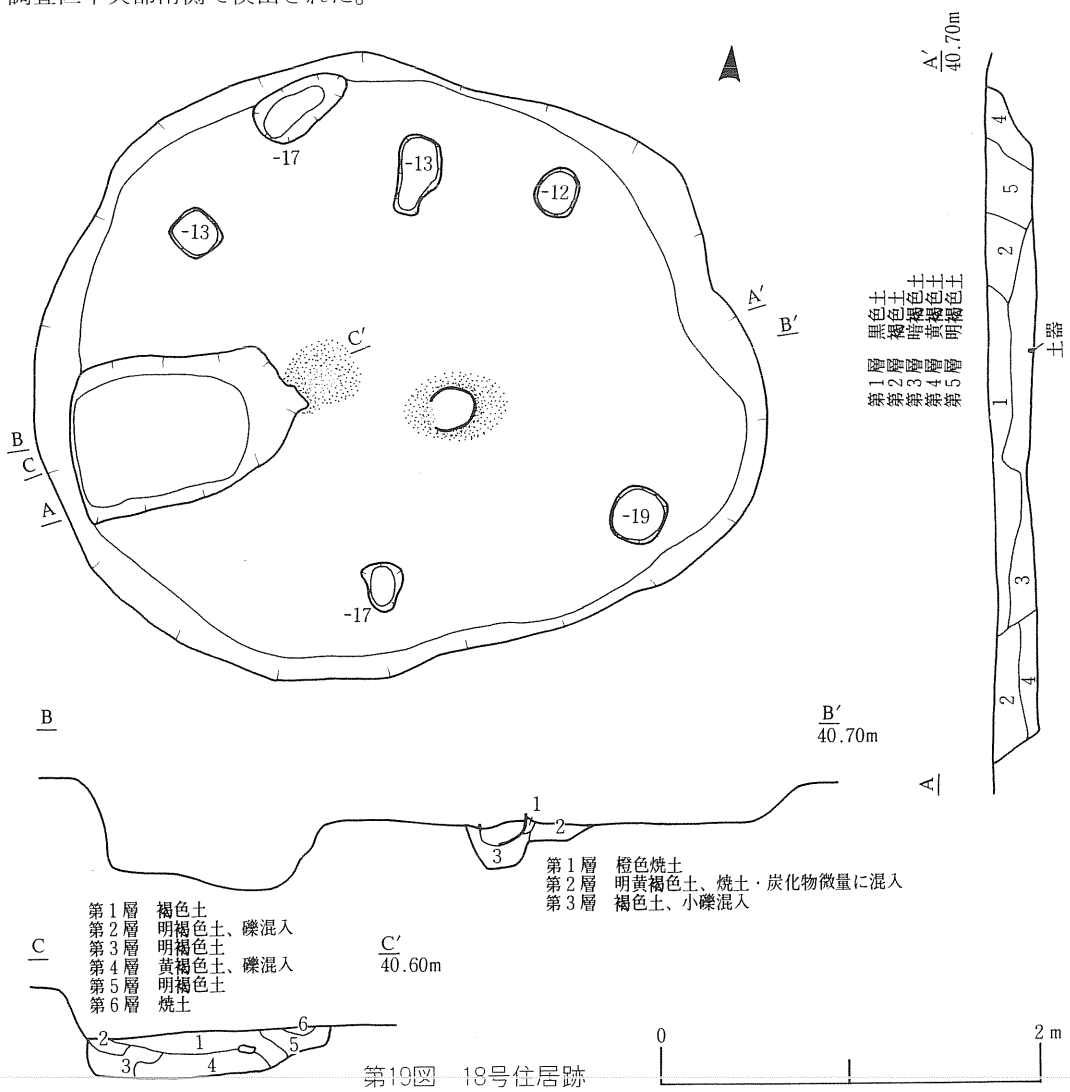
22は炉埋設土器である。内湾しながら口縁部に至る深鉢形土器である。沈線区画の磨消し帯で波状文、楕円文を描き、沈線上に刺突文を施している。地文は複節斜縄文である。93～100は覆土から出土した。93・97は口縁部は無文帯である。95・96は頸部に一条の沈線がめぐり、下部にはヘラ状工具によって細い沈線が施される。94・98～100は沈線区画の磨消し帯を施している。

**石器**（第48図28）

磨石である。

**19号住居跡**（第20図）

調査区中央部南側で検出された。




第19図　19号住居跡

プランは長軸3.3m 、短軸2.9m の楕円形を呈する。確認面からの深さは約27cmで壁はゆるやかに立ち上がる。ピットは少なく、南西寄りに４個検出されている。炉は中央東寄りに位置し、３時期の作り変えが認められる。最も新しい炉は石囲い炉であるが、礫の抜き取りがみられる。この石囲い炉を取り除いた下部から埋設土器２個が検出され、土器埋設炉を作っている。特に西側は赤変している。この土器埋設炉の新旧関係は不明である。床は平坦で堅く良好である。

**出土遺物**

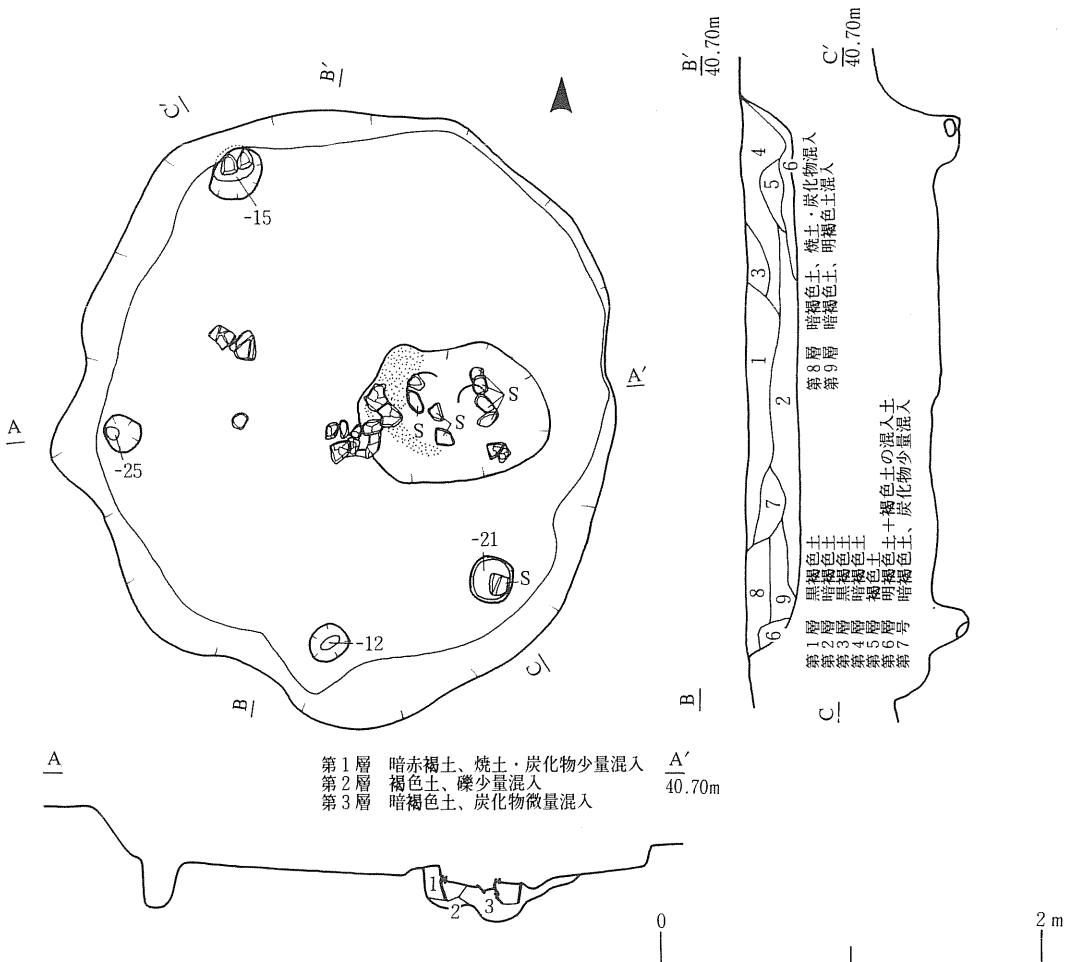
**土器**（第35図23、第41図101～106）

23は炉埋設土器である。胴部がゆるく膨らむ粗製の深鉢形土器で、地文はＲＬ（縦回転）の縄文

である。101～106は覆土から出土した。沈線区画の磨消し帯を施すものである。

**20号住居跡**（第21図）

調査区中央部南側で検出された。




第20図　19号住居跡

プランは長軸2.9m 、短軸2.6m の楕円形を呈する。確認面からの深さは約16cmで壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは７個検出されているが主柱穴は明確でない。ただ北側の２個と南西の１個が掘り方がしっかりし、深い。炉は住居跡の中央東寄りに作られている。土器埋設であり、粗製の深鉢形土器を正立に据えている。周囲は火熱をうけ赤変している。床は平坦である。

**出土遺物**

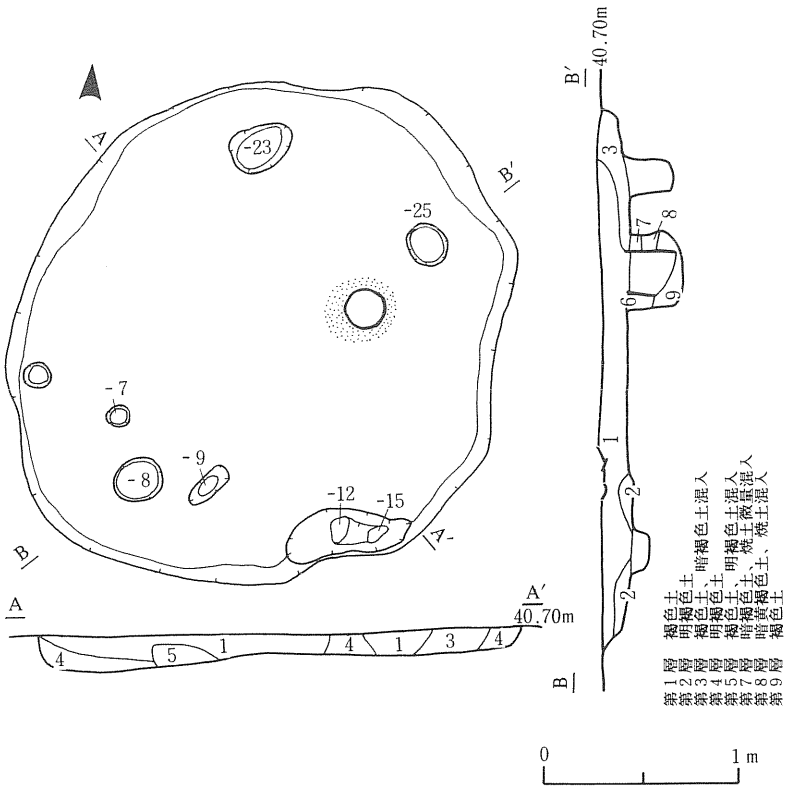
**土器**（第35図24、第41図107～109）

24は炉理設土器である。胴部がゆるく膨らむ粗製の深鉢形土器である。地文は撚糸文である。 107～109は口縁部が無文帯である。

**21号住居跡**（第22図）

調査区中央部で検出された。

プランは長軸3.5m、短軸2.9mの楕円形を呈する。確認面からの深さは40cmと深く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは壁に沿って10数個検出されており、掘り方のしっかりした深いものが主柱穴と思われる。炉は同位置で2時期の作り変えが認められる。新炉は石囲い炉である。旧炉は土器埋設炉であり、新炉の礫の下部で検出された。埋設土器の周囲は火熱をうけ赤変している。床面は平坦で堅くしまり良好である。




第21図　20号住居跡

**出土遺物**

**土器**（第35図25、第41図110・111）

25は炉理設土器である。沈線を磨消し手法によって「U」字状に文様を展開させる。110・111は覆土から出土した。

**22号住居跡**（第23図）

調査区中央部で検出された。

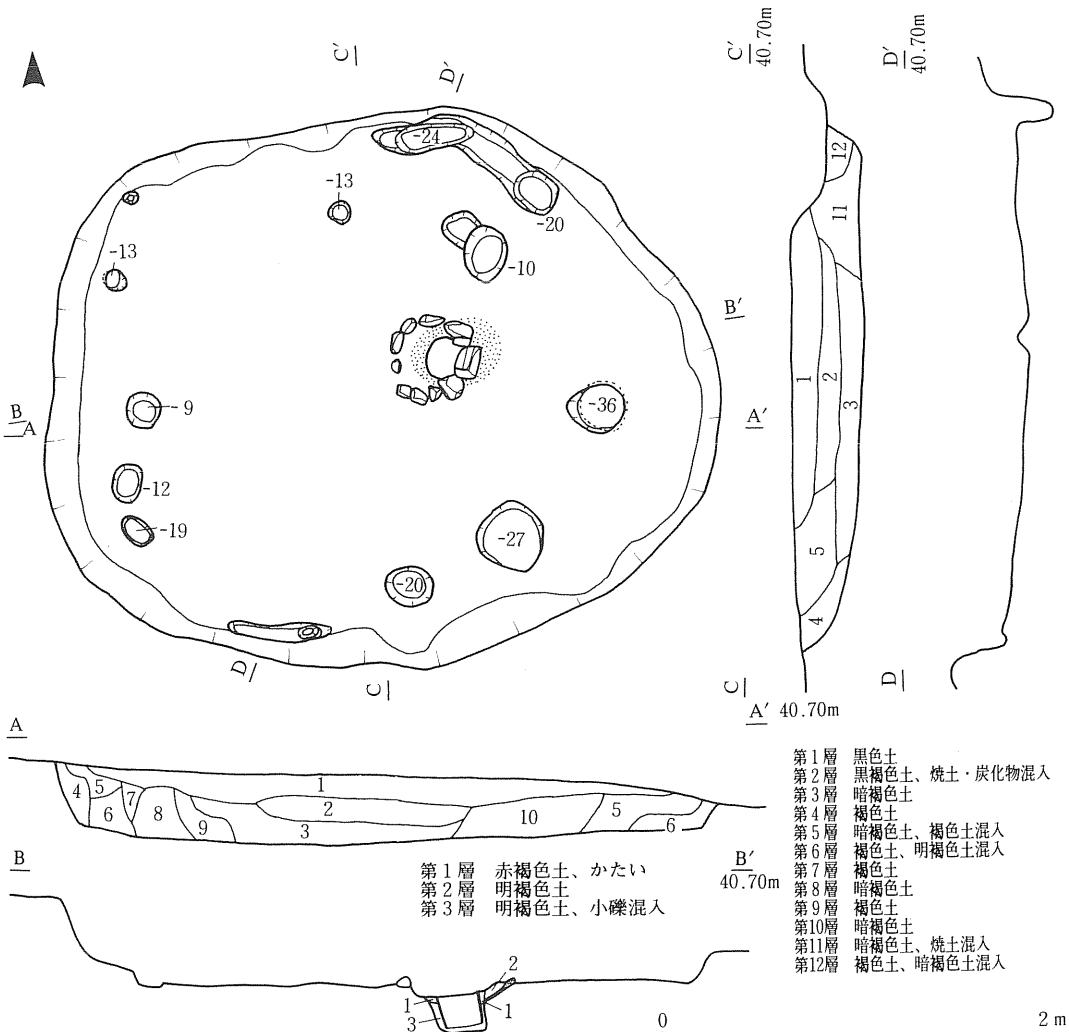
プランは長軸3.5m、短軸3.1mの楕円形を呈する。確認面からの深さは約25cm壁は斜めに立ち上がる。ピットは壁に沿って炉を囲むように6個検出されており、配列からみても主柱穴と思われる。炉は住居跡中央東寄りに作られている。長軸85cm、短軸45cmの浅い掘り込みをもち、中央に土器を据えた土器埋設炉である。周囲は火熱をうけ赤変している。床面は平坦で堅くしまり良好である。

**出土遺物**

**土器**（第36図26、第41図112・113）

26は炉理設土器である。口縁部がゆるやかに外反する深鉢形土器である。頸部に一条の沈線がめぐり、地文はＲＬ（縦回転）の縄文で原体の結び目がみえる。112・113は覆土から出土した。沈線区画の磨消し帯を施している。

**23号住居跡**（第24図）




第22図　21号住居跡

調査区中央部で検出された。東側の一部は風倒木痕によって壊されている。

プランは径約3.1mの不整円形を呈する。確認面からの深さは約10cmで壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは10個検出されているが、主柱穴については明確でない。炉は住居跡の西側に作られた土器埋設部と掘り込みからなるものである。土器埋設部には底部を欠く深鉢形土器を正立に据えている。周囲は火熱をうけ赤変している。掘り込み内には礫が2個みられる。しかし抜き取り痕跡もみられないことから掘り込みが石組となっていたのかは不明である。床面は平坦で堅くしまり良好である。

**出土遺物**

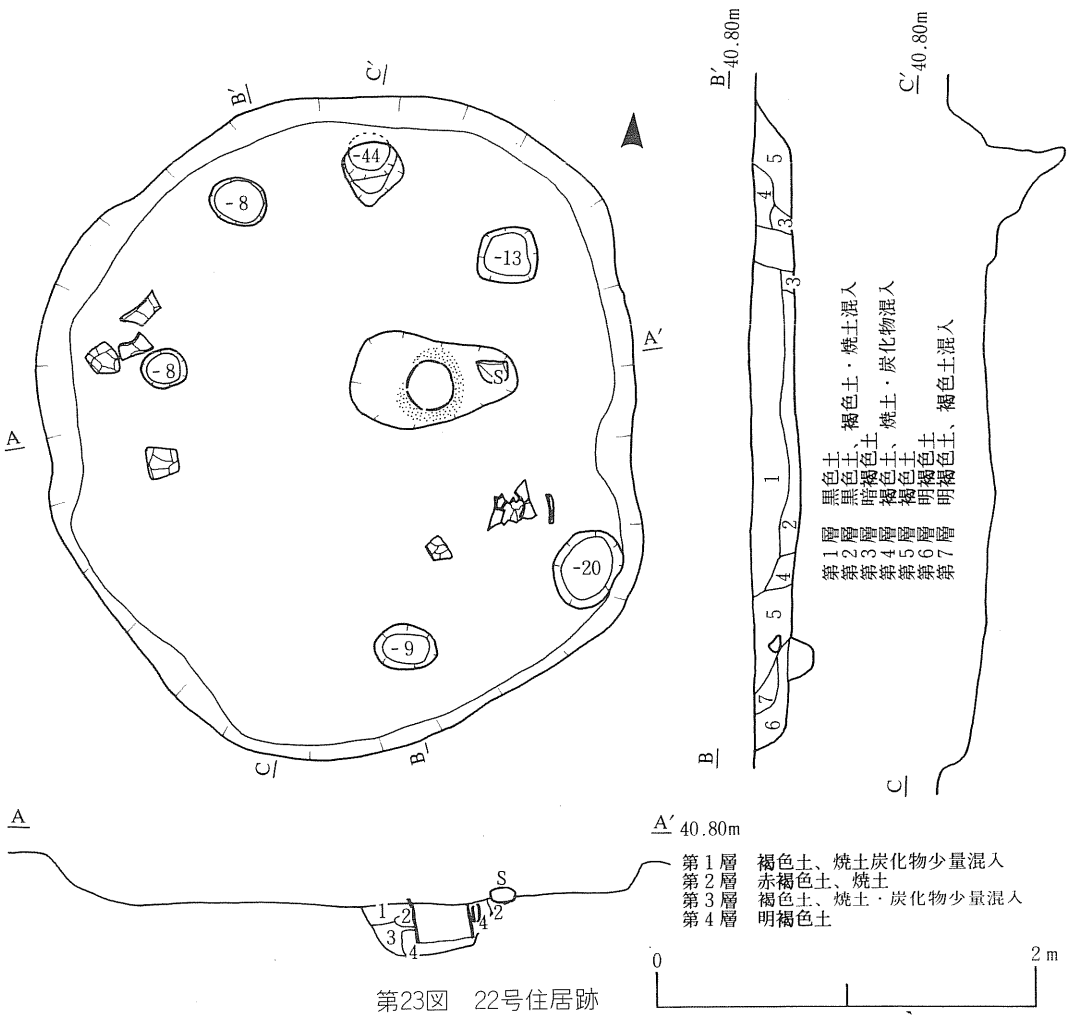
**土器**（第36図27・28、第41図114・115）

27は炉埋設土器で、28は床面から出土した。27は沈線と磨消し帯を垂下させ横方向に文様を展開

させる。28は粗製の深鉢形土器である。114・115は沈線区画の磨消し帯を施している。

**24号住居跡**（第25図）

調査区中央部北側で検出された。




第23図　22号住居跡

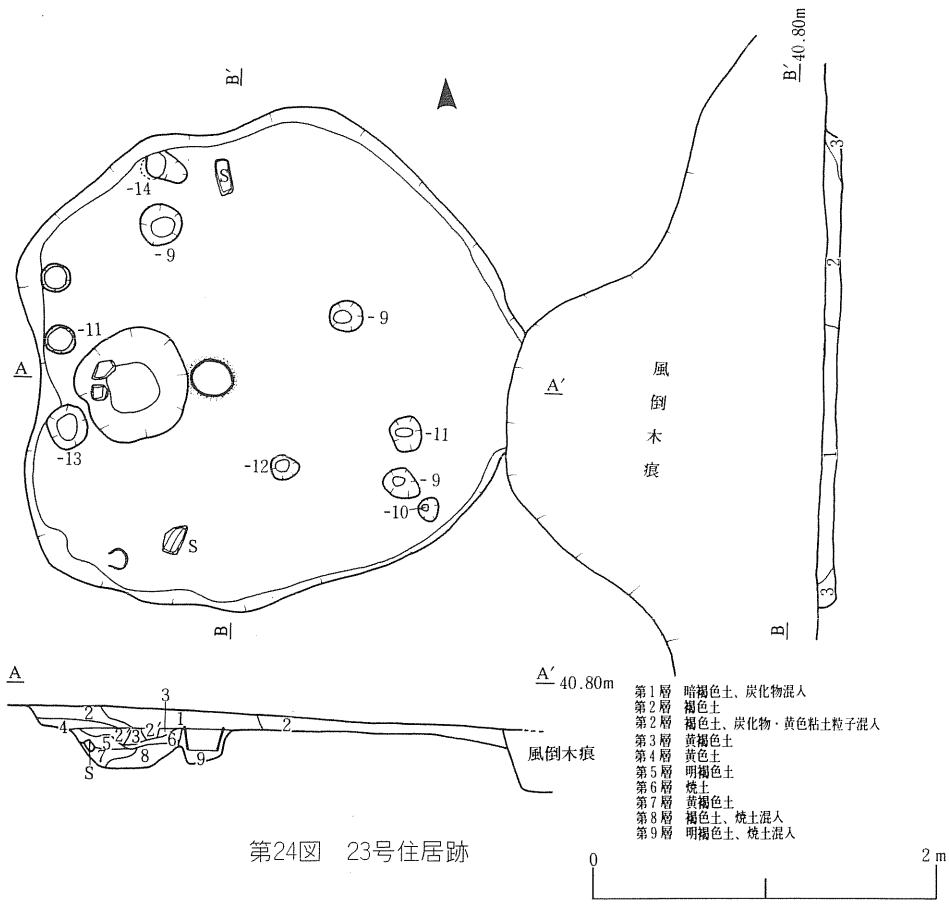
プランは径約2.8m の円形を呈する。確認面からの深さは12cmで壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは7個検出されているが、主柱穴については明確でない。炉は住居跡中央東寄りに作られた土器埋設炉である。深鉢形土器を正立に据えている。周囲は火熱をうけ赤変している。床面は堅く平坦である。

**出土遺物**

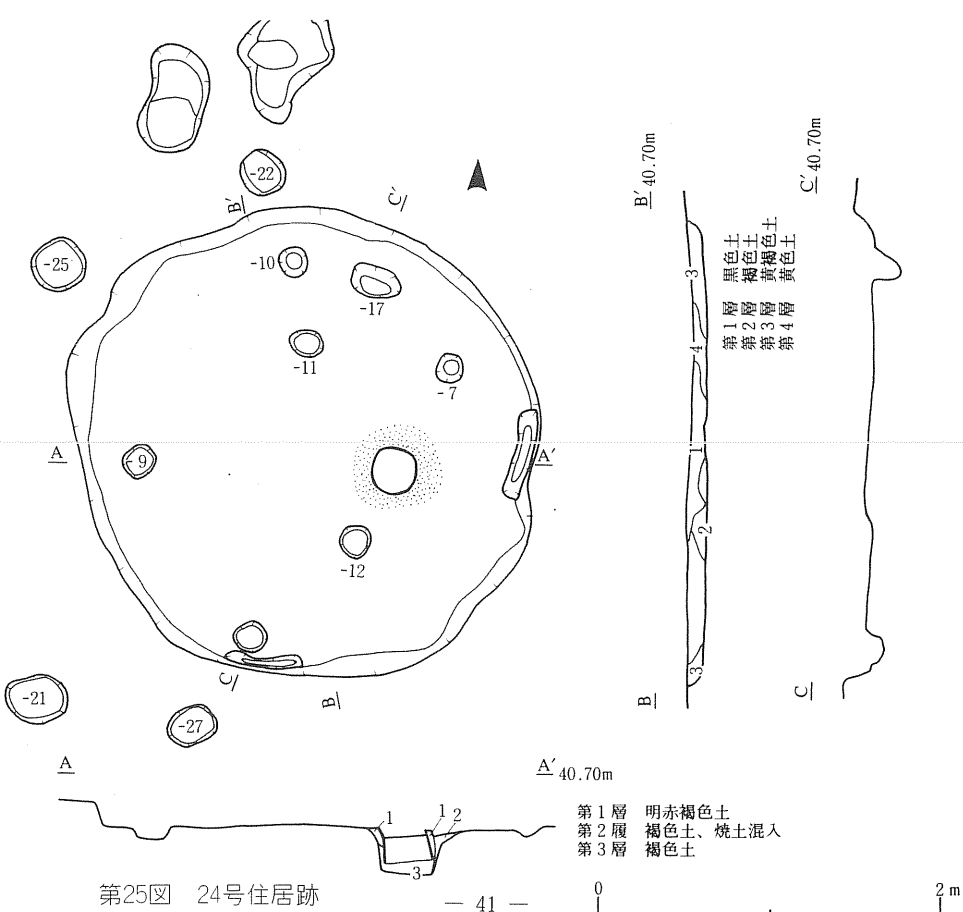
**土器**（第36図29）

炉埋設土器である。口縁部が外反し、胴部が膨らむ深鉢形土器である。口縁部は無文帯で、頸部に一条の沈線がめぐる。地文はＲＬ（縦回転）の縄文である。

**25号住居跡**（第26図）




第24図　23号住居跡




第25図　24号住居跡

調査区中央部西側で検出された。

プランは長軸4.1m、短軸3.6mの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは約40cmで壁はほぼ垂直に立ち上がる残存の良好なものである。ピットは北壁沿いに集中して検出されるが主柱穴は明確でない。炉は住居跡の中央寄りに作られている。長軸1.5m、短軸1.0～1.3mの掘り込み、掘り込み部をもつ炉であり、東側の床は火熱をうけ赤変している。埋設土器、石組部ともに未検出である。精査したが、抜き取り痕跡はみられなかった。床面は平坦で堅くしまり良好である。

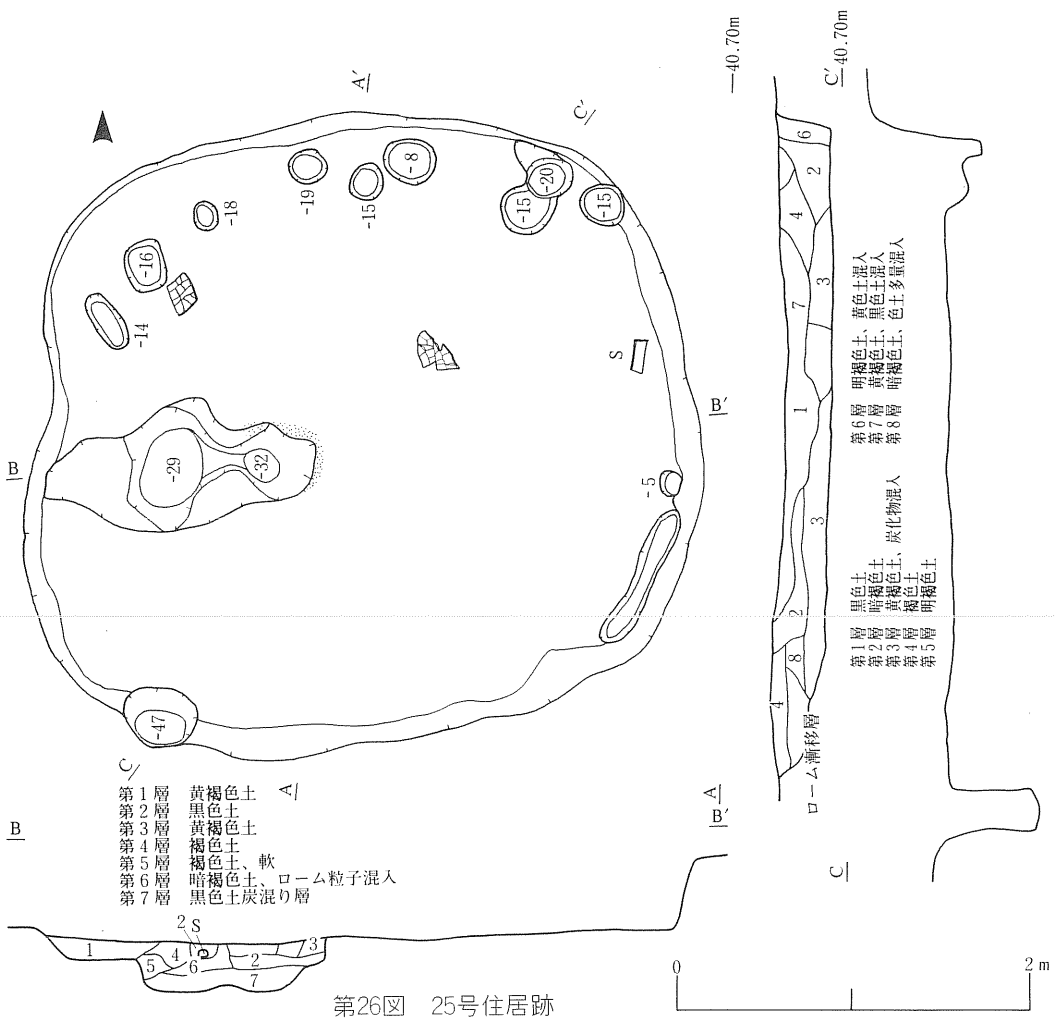
**出土遺物**

**土器**（第41図116～123）

覆土から出した。116はヘラ状工具により細い沈線を描く。118は口縁部が無文帯で、地文は撚糸文である。他は沈線区画の磨消し帯を施している。119には刺突文もみられる。

**26号住居跡**（第27図）

調査区中央部東側で検出された。北側は風倒木痕によって⅓程壊されている。




第26図　25号住居跡

プランは径約2.8m の円形を呈すると思われる。確認面からの深さは約20cmで壁はほぼ垂直に立ち上がる良好なものである。南、東壁下に周溝がみられる。ピットは壁沿いに掘り方のしっかりした深さ20～35cmのものが検出されており主柱穴と思われる。炉は住居跡中央やや東寄りに作られた土器埋設炉である。粗製深鉢形土器を正立に据えている。周囲は火熱をうけ赤変している。床面は平坦で堅くしまり良好である。

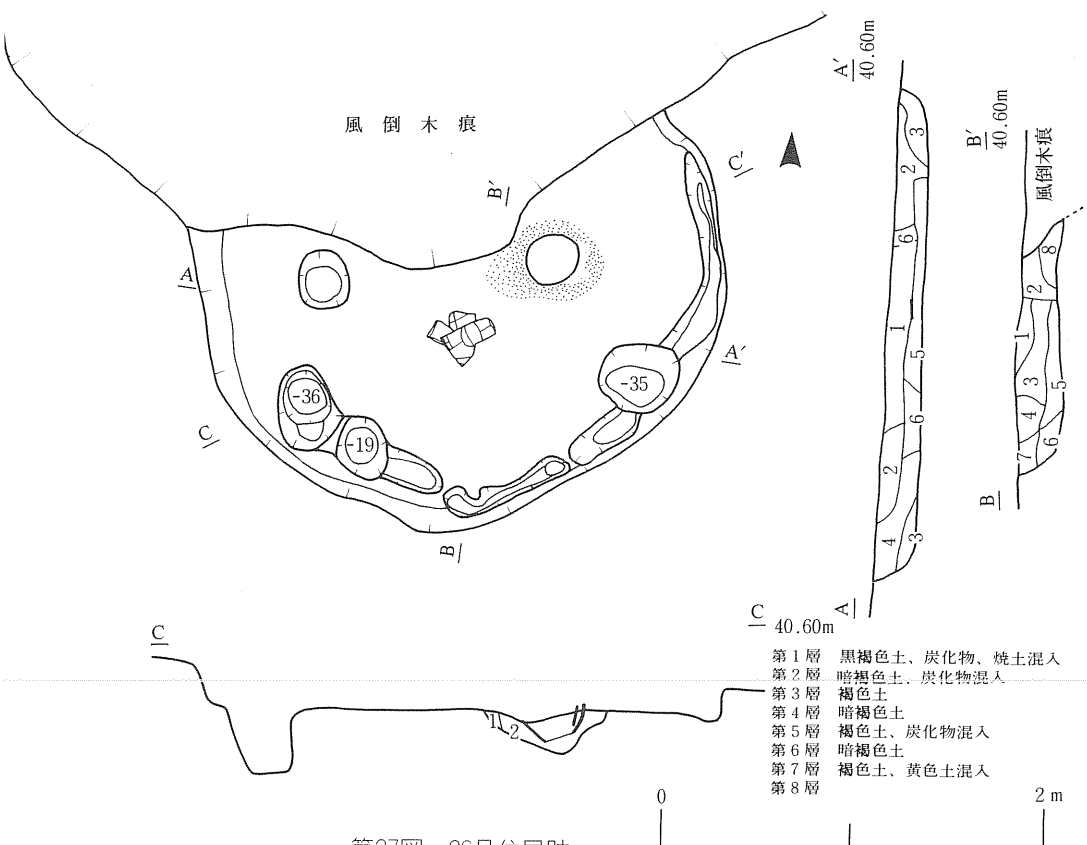
**出土遺物**

**土器**（第36図30、第41図124～126、第42図127～133）

30は炉埋設土器である。いびつな粗製の深鉢形土器で、地文は撚糸文である。124～133は覆土から出土した。124、126～133は沈線と磨消し帯で文様を展開させる。

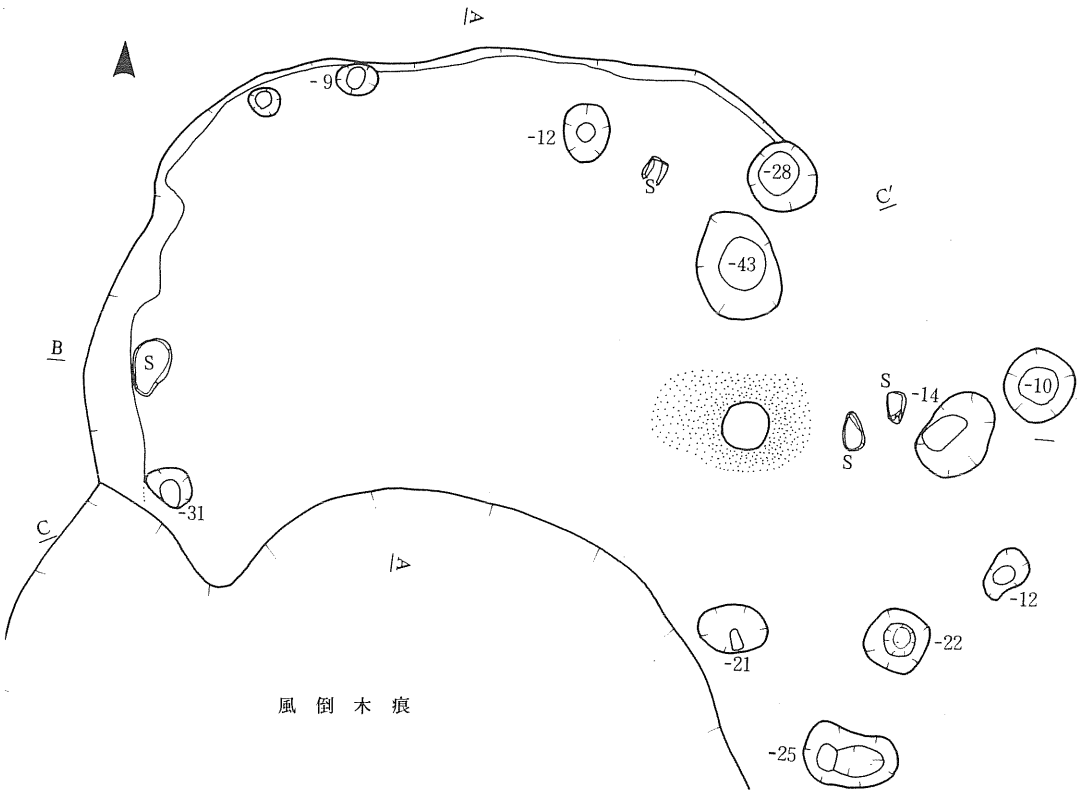
**27号住居跡**（第28図）

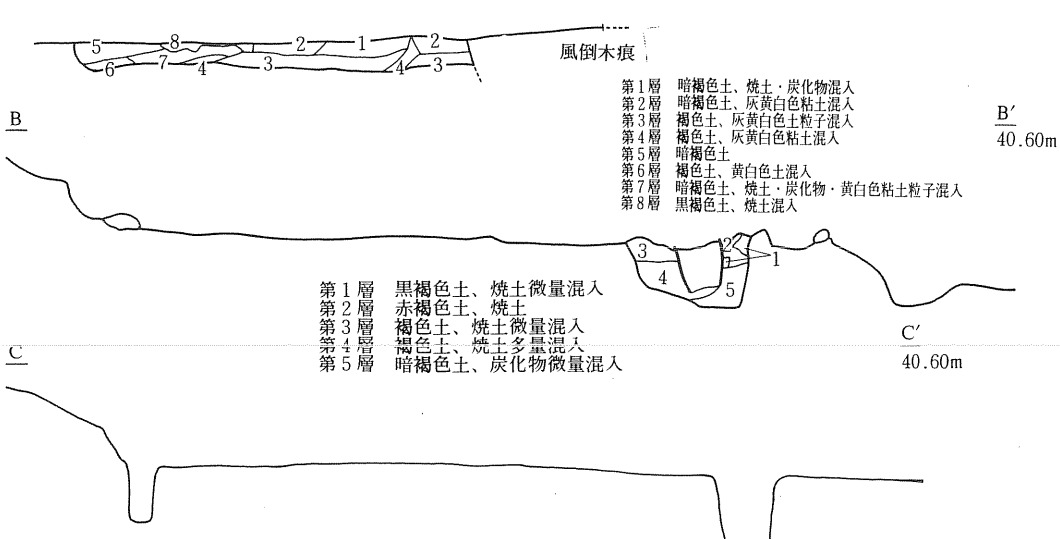
調査区中央部東側で検出された。




第27図　26号住居跡

南側は風倒木痕により破壊されている。東側は沢に続く傾斜面で、壁は検出できなかった。推定プラン長軸4.5m 以上、短軸4m 以上の楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは約30cmで壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは壁に沿って検出されるが主柱穴は明確でない。炉は東側に作られた土器埋設炉である。特に炉を中心とした長さ2.7×1.3m の範囲は非常に堅い。




0　2 m

第28図　27号住居跡

**出土遺物**

**土器**（第36図31、第42図134・135）

31は炉埋設土器である。口縁部に向いゆるく内反する粗製の深鉢形土器である。地文はＲＬ（縦回転）の縄文である。134・135は覆土から出土した。

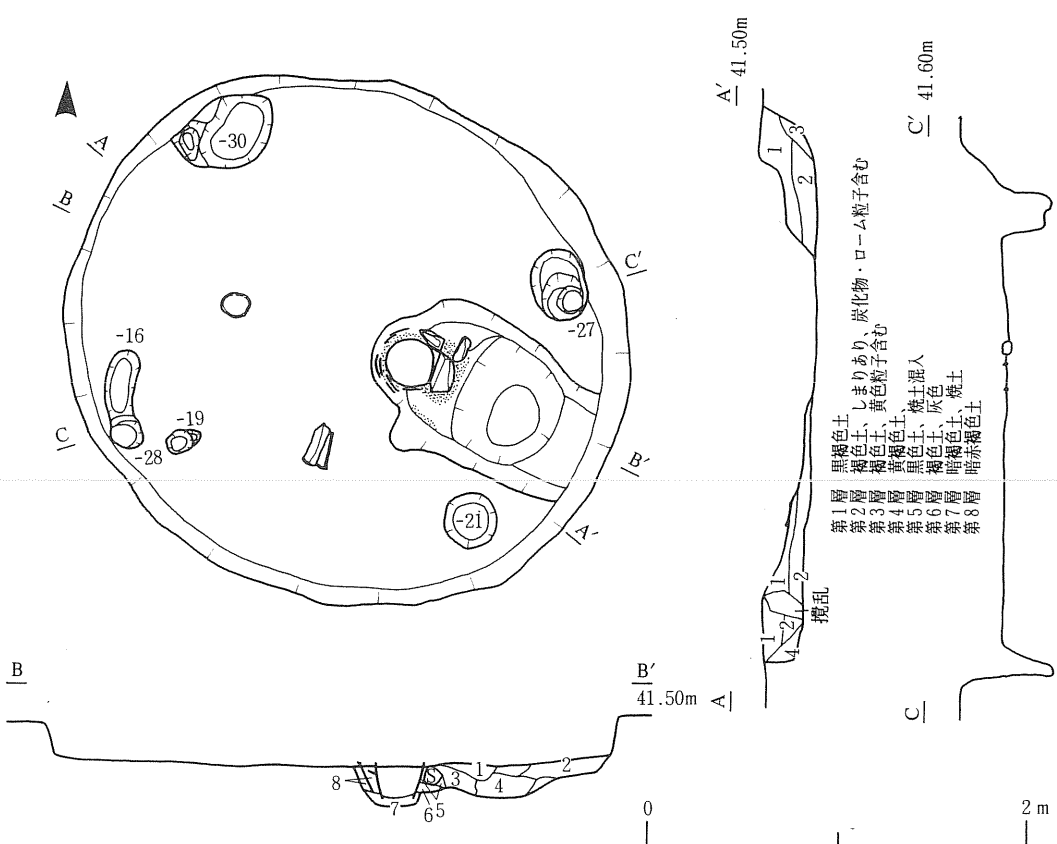
**石器**（第47図22）

22は基部が欠損している石斧で刃部には擦痕が認められる。

**28号住居跡**（第29図）

調査区の西側で検出された。

プランの径約３.０ｍの円形を呈する。確認面からの深さは約30cmで壁はほぼ垂直に立ち上がり極めて残存状態が良好である。ピットは大小７個検出されているが掘り方のしっかりした深いもので炉に相対する２個、北西壁下にある２個が主柱と思われる。炉は住居跡中央より若干南東寄りに作られた石囲い土器埋設部、石組部、掘り込み部からなるものである。埋設土器は深鉢形土器を正立して据えており、外側には個体の異なる土器片を回し、二重にしている。石囲い部、石組部を形成する礫は抜き取られた可能性が強い。掘り込みは壁に接する。床面は平坦で堅くしまり非常に良好である。




第29図　28号住居跡

**出土遺物**

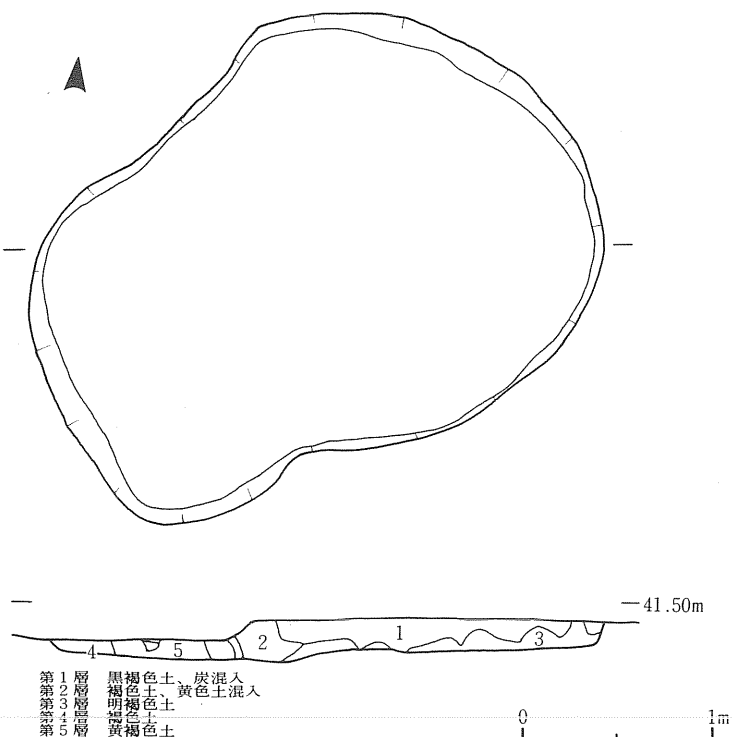
**土器**（第37図32～34・35、第42図136～137）

32・33は炉埋設土器である。いずれも口縁部が外反し、胴部の膨らむ深鉢形土器である。口縁部は無文帯で頸部から下は沈線区画の磨消し帯が垂下し、胴部で大きく横に展開する。また32は小さく区画した楕円文内に円形の刺突文を施している。34は床面から出土した口縁部がゆるく内反する深鉢形土器である。35・136・137は覆土から出土した。35は小形の丸底の壺でケズリによる整形がなされ、きれいに磨きが施される。

**出土遺物**

遺構内、外出土の土器を文様から群に、器形から類に分けて述べてみたい。

**1群土器**（第45図141・142）




第30図　竪穴状遺構

ヘラ状工具によって山形に沈線を施している。小破片2点が出土した。

**2群土器**（第39図59、第45図143・144）

山形口縁をもち、口縁上と頂部下に縦位の粘土紐を貼付、撚糸圧痕文を施している。

A－3類：59・143・144とも口縁部が外反する深鉢形土器である。

**3群土器**（第45図145～151・154）

隆線や沈線によって渦巻文、楕円文が施される土器群である。

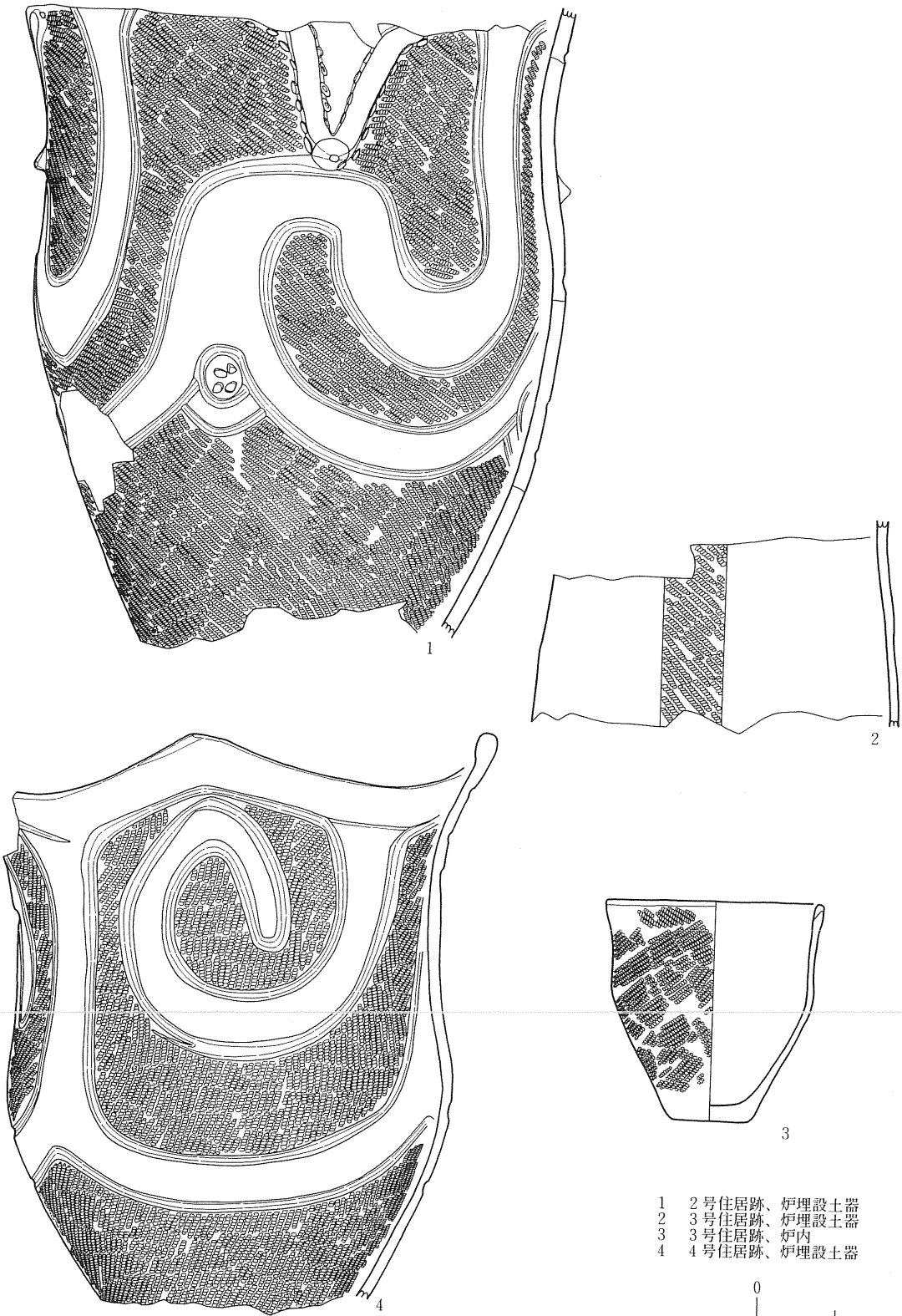
A－2類：147は深鉢形土器の破片である。

A－3類：151は隆線による渦巻文が施されている。

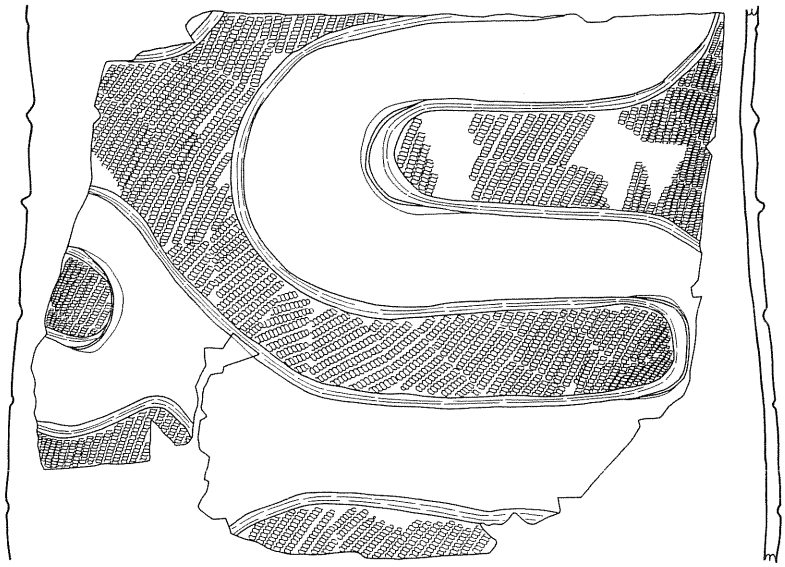
C－2類：148・150・154は浅鉢形土器の破片で、特に154は口縁が逆「く」の字状に内傾し、粘土紐貼付による渦巻文、楕円文が施される。

**4群土器**（第45図152・153）

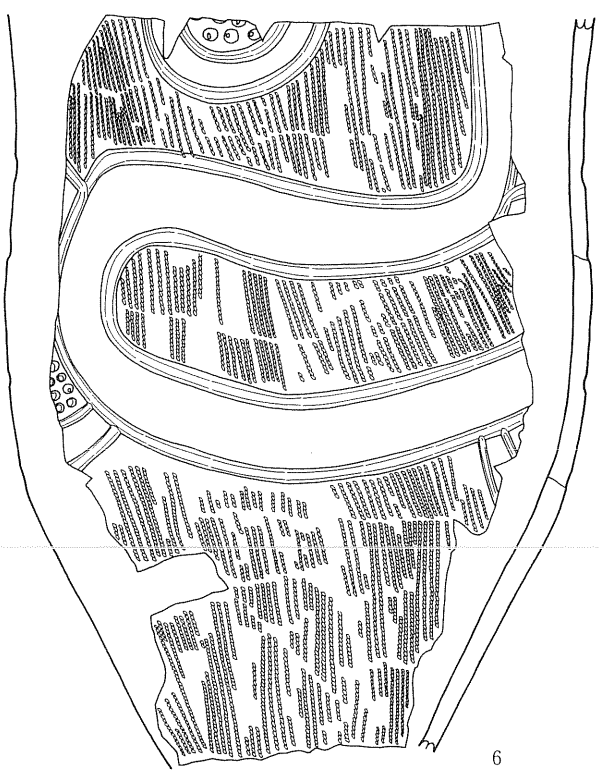
沈線による懸垂文が施される土器である。



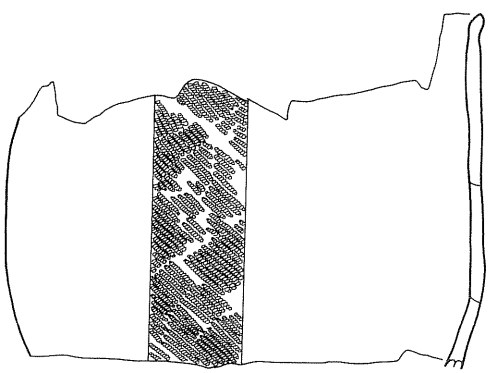

第31図　遺構内出土土器



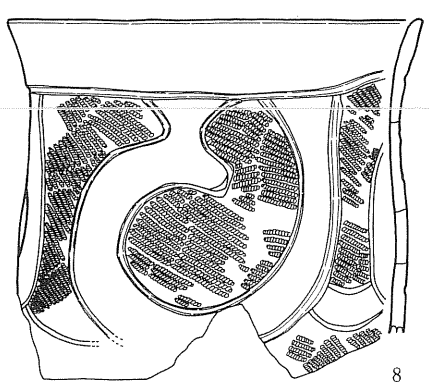
5



6



7

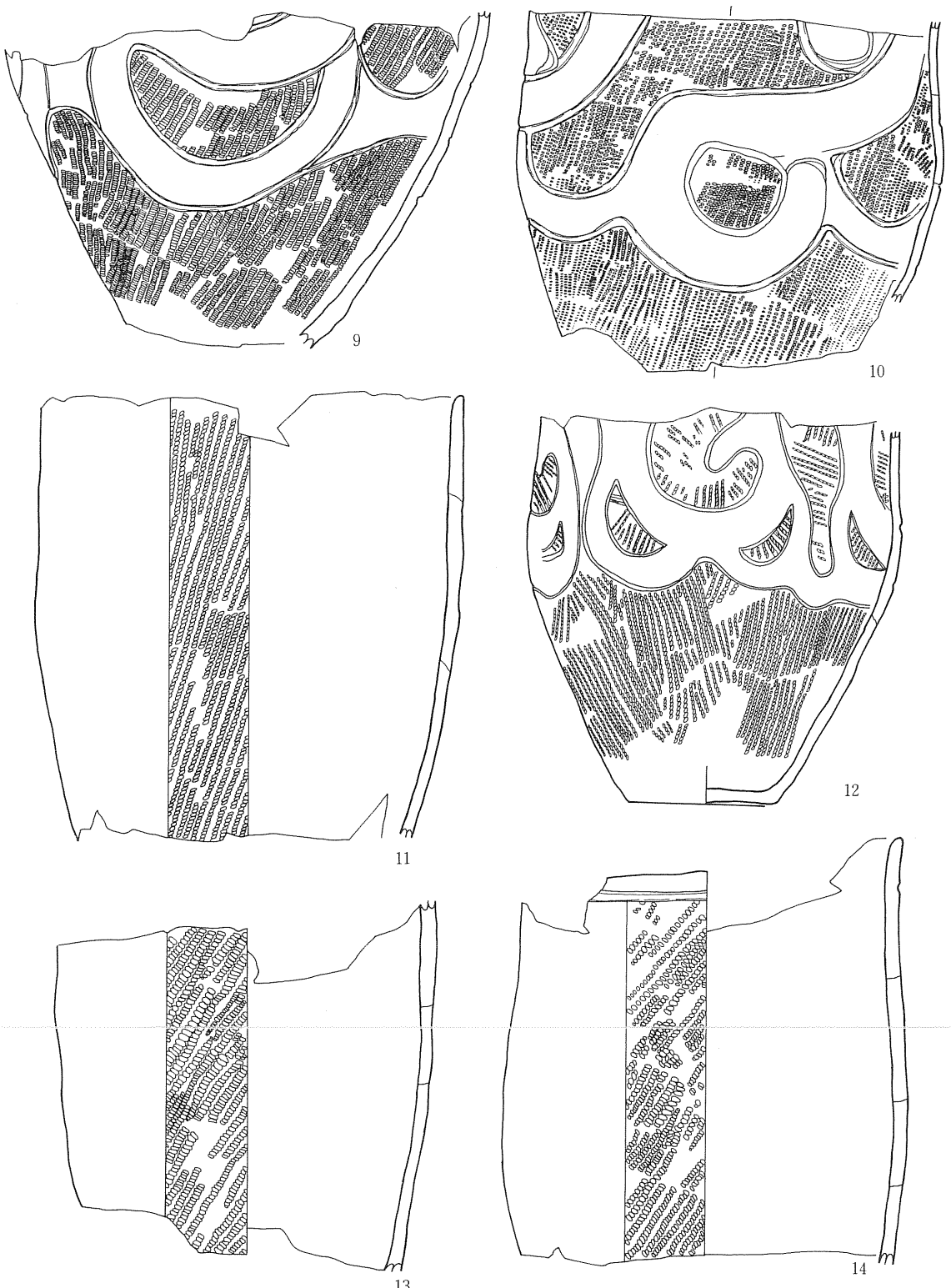


8

5　4号住居跡、古炉
6　4号住居跡、床面
7　5号住居跡、炉埋設土器
8　6号住居跡、炉埋設土器

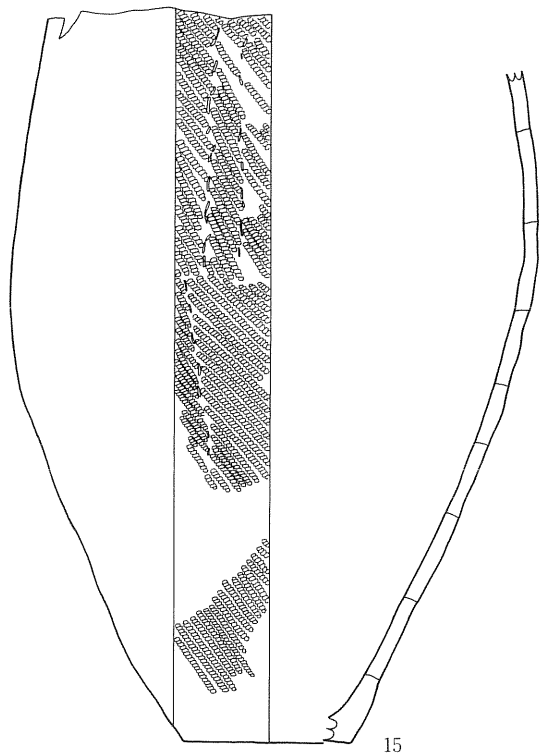
0　10cm

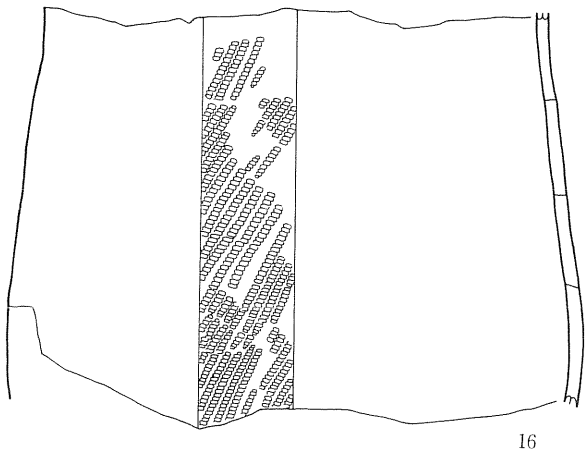
第32図　遺構内出土土器

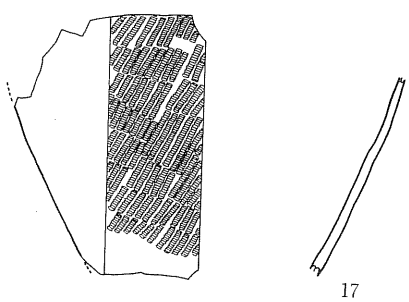


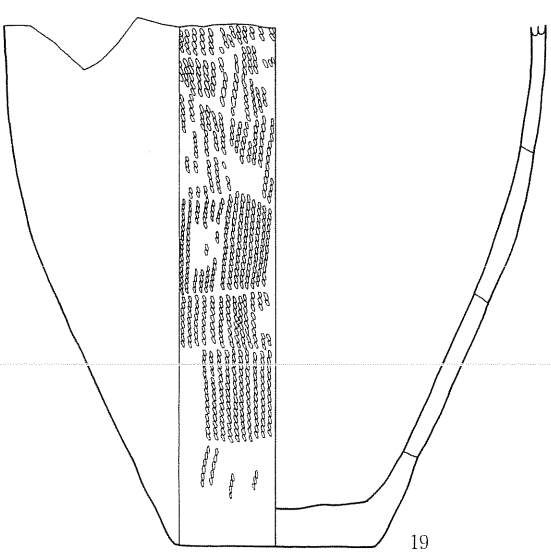

9　7号住居跡、炉埋設土器
10　8号住居跡、炉埋設土器
11　9号住居跡、炉埋設土器
12　9号住居跡、床面直上
13　10号住居跡、炉埋設土器
14　12号住居跡、炉埋設土器

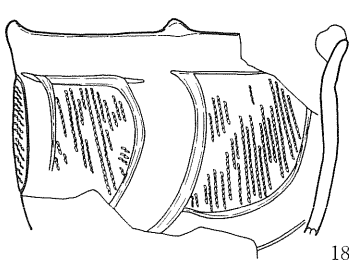
第33図　遺構内出土土器



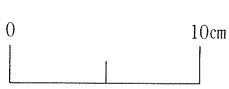



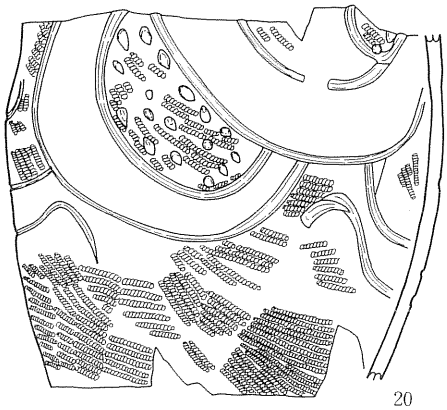



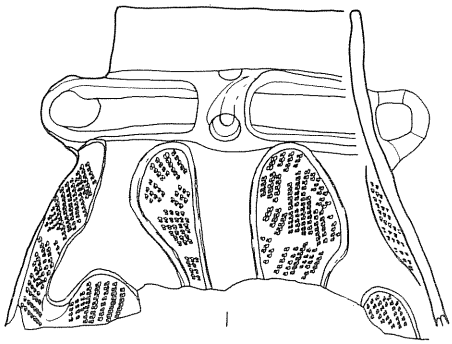

15　14号住居跡、炉埋設土器
16　15号住居跡、炉埋設土器
17　15号住局跡、炉埋設土器
18　15号住居跡、床面
19　16号住居跡、炉埋設土器



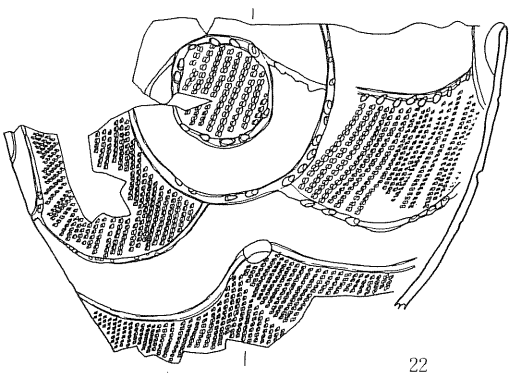

第34図　遺構内出土土器



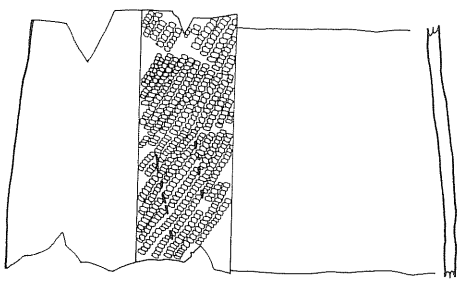
20



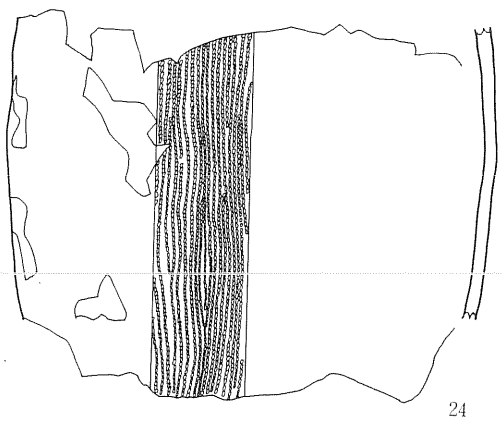
21



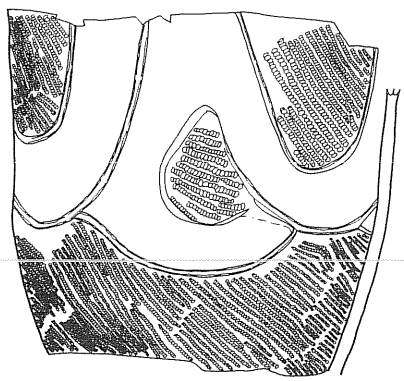
22



23

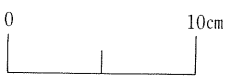


24

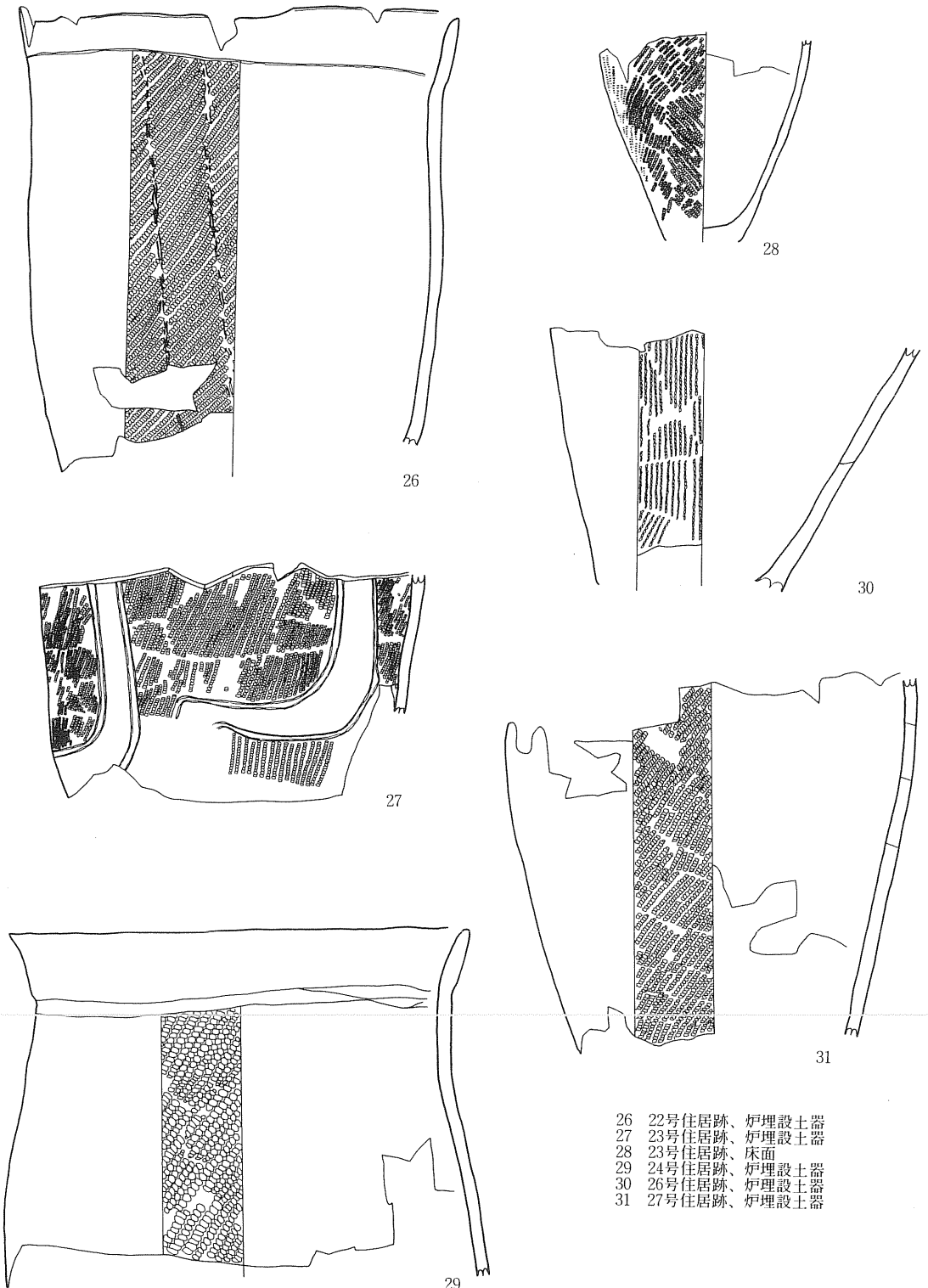


25

20　16号住居跡、炉埋設土器
21　17号住居跡、炉埋設土器
22　18号住居跡、炉埋設土器
23　19号住居跡、炉埋設土器
24　20号住居跡、炉埋設土器
25　21号住居跡、炉埋設土器

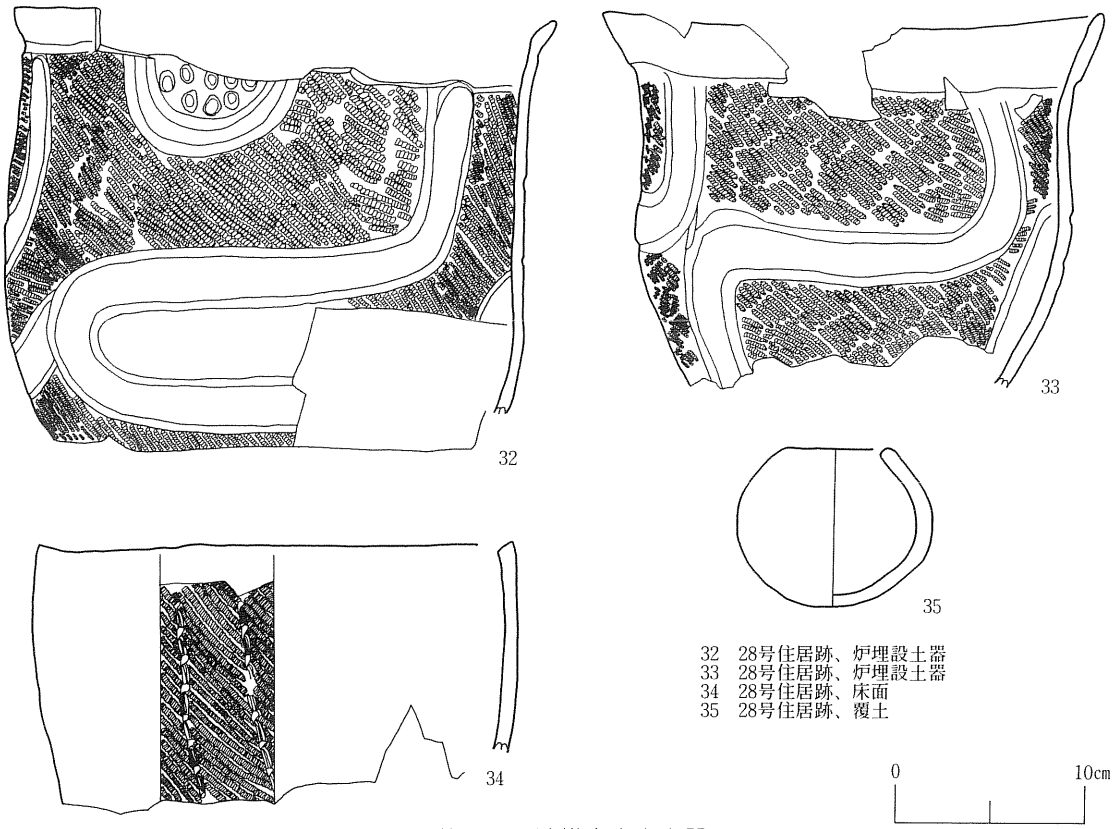



第35図　遺構内出土土器




26　22号住居跡、炉埋設土器
27　23号住居跡、炉埋設土器
28　23号住居跡、床面
29　24号住居跡、炉埋設土器
30　26号住居跡、炉埋設土器
31　27号住居跡、炉埋設土器

第36図　遺構内出土土器




第37図　遺構内出土土器

**5群土器**（第31図4、第32図5・8、第33図9～12、第34図18、第35図21・25、第36図27、第37図33、第38図、第39図57・58・60～63・67・68・70～75、第40図79～94・97～100、第41図101～105・107～110・112～115・117・118・120～126、第42図127～131・134・136・137、第45図157～165、第46図166～173）

沈線区画による磨消し帯を施し、「C」・「J」字状文、波状文などを横方向に展開させる土器群である。

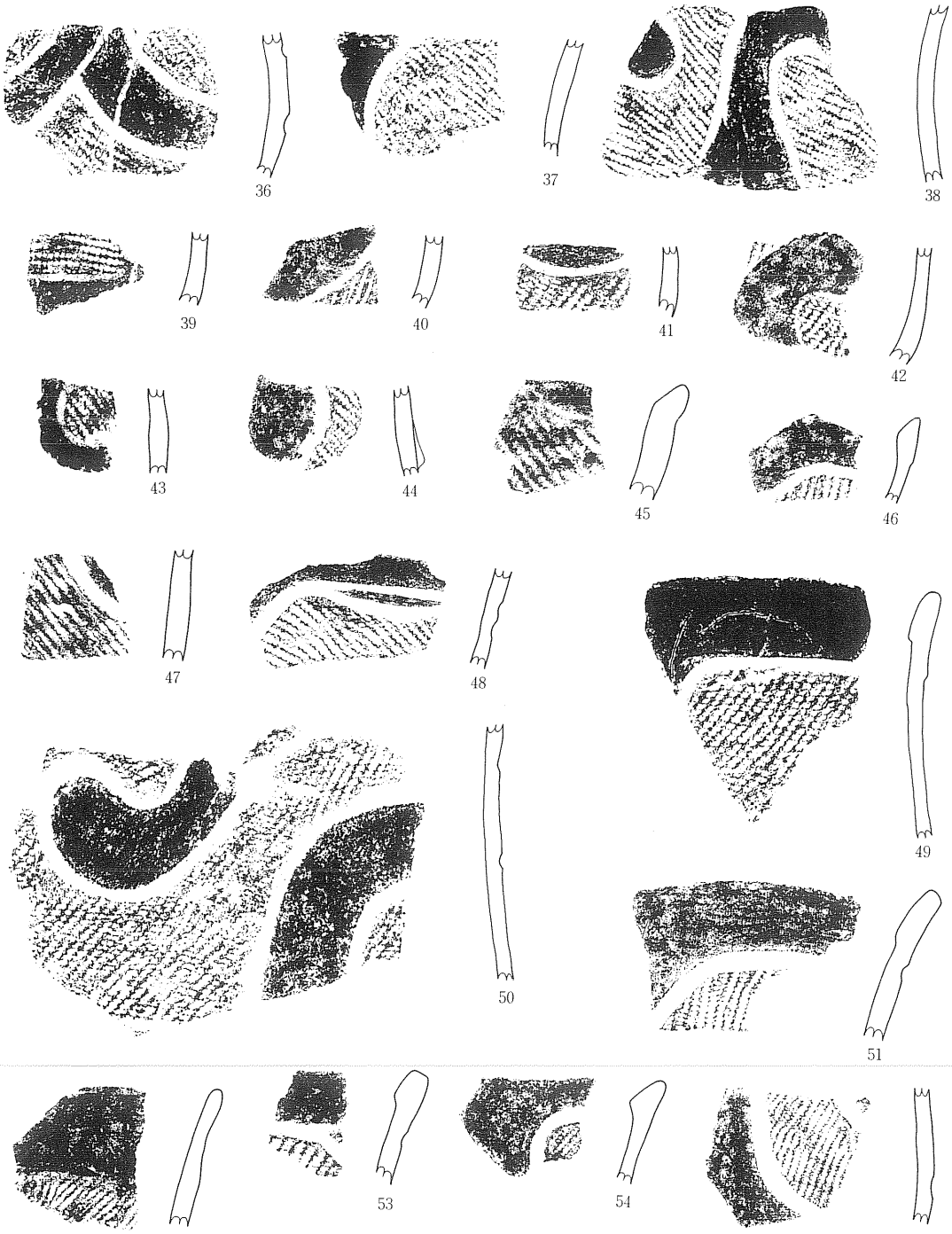
A－2類（46・161・164）：口縁部が内反する深鉢形土器である。沈線と磨消し手法で文様を展開させる。

A－3類（4・5・8・10・12・18・33・49・51・52～54・70～72・85・97・101・124・155・～158・160・162・163）：口縁部が外反する深鉢形土器である。口縁部が無文帯のものが多く、頸部下方には沈線区画による磨消し帯を施している。区画内に縄文を充填するものである。

D－1類(21)：口縁部がほぼ直立する壺形土器である。隆線をめぐらした頸部の4ヶ所に橋状把手を有する。胴部には沈線区画の磨消し帯を施し、区画内には複節斜縄文を充填している。

**6群土器**（第46図175～177）

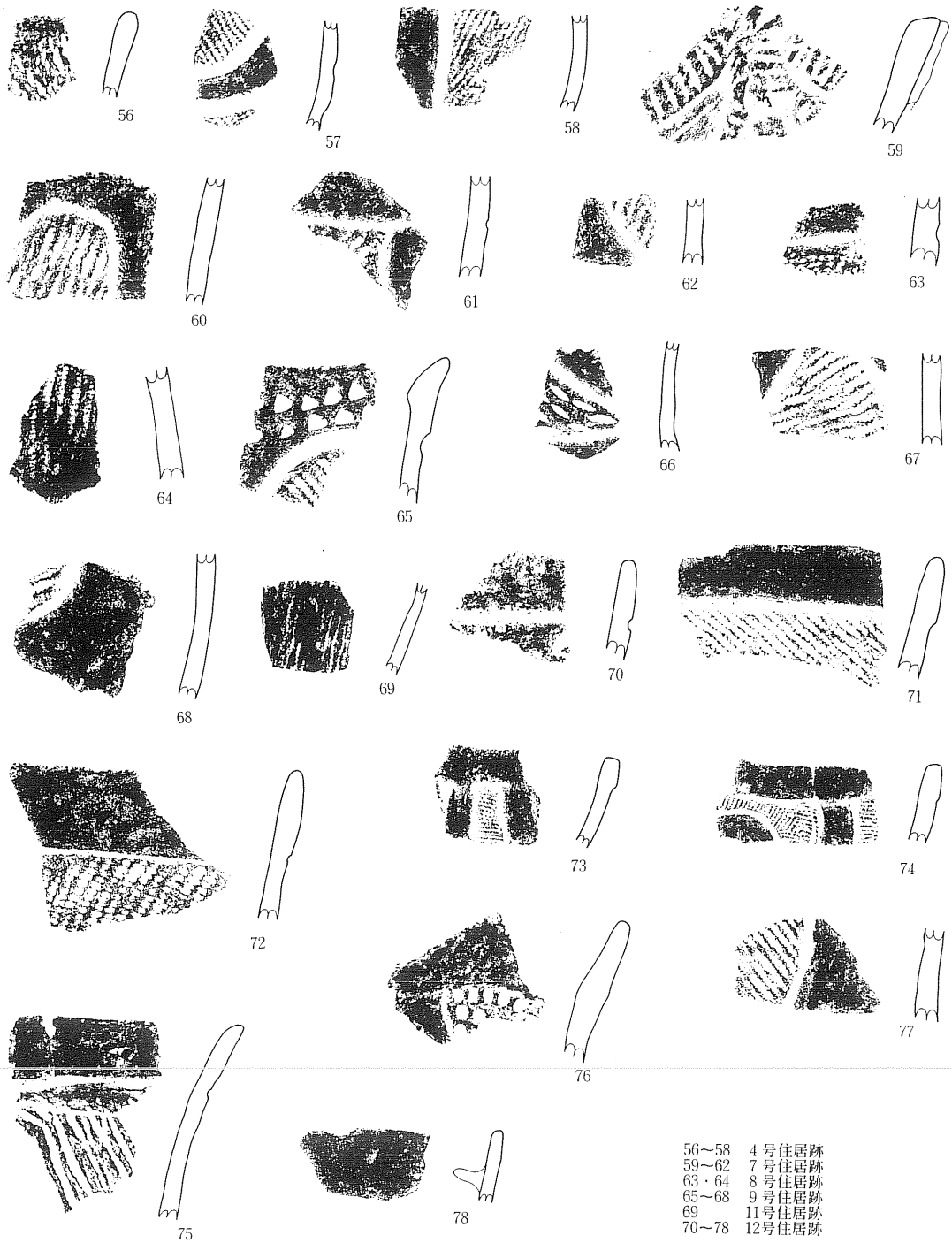
稜線によって区画した磨消し帯を有するものである。




36～38　1号住居跡、炉埋設土器
39～44　1号住居跡
45～48　2号住居跡
49・50　3号住居跡、炉埋設土器
51～55　4号住居跡

0　10cm

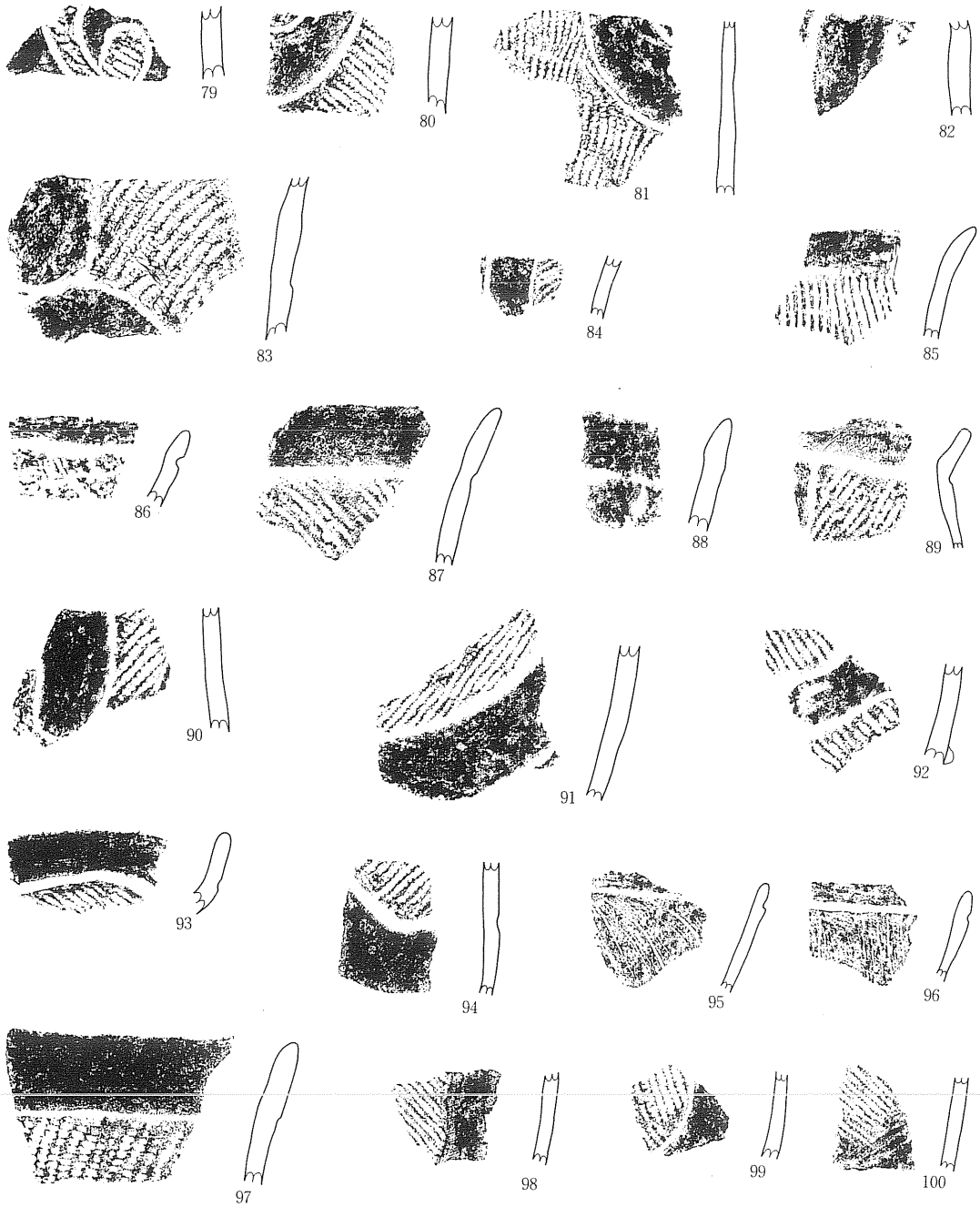
第38図　遺構内出土土器




56～58　4号住居跡
59～62　7号住居跡
63・64　8号住居跡
65～68　9号住居跡
69　11号住居跡
70～78　12号住居跡

0　10cm

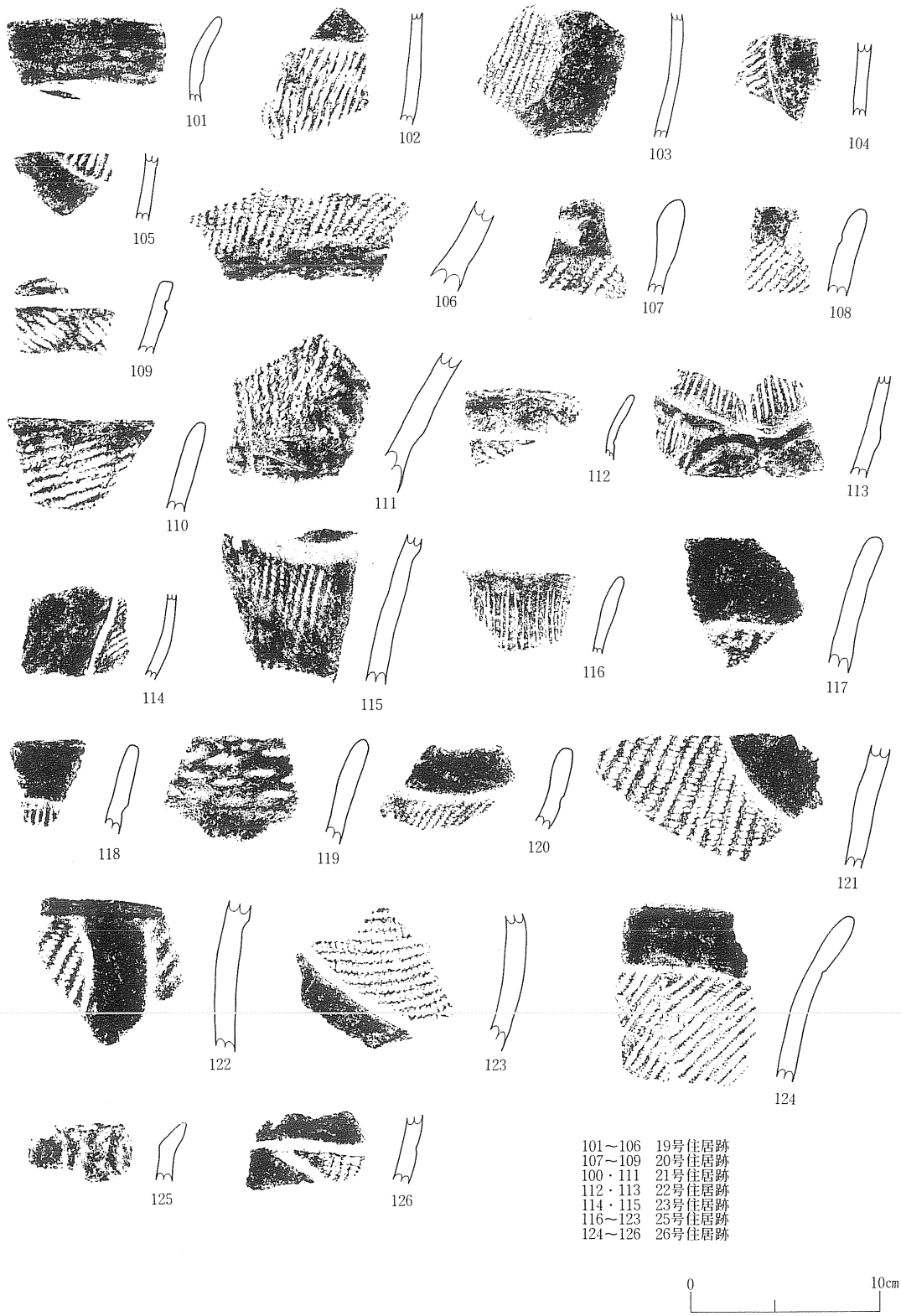
第39図　遺構内出土土器



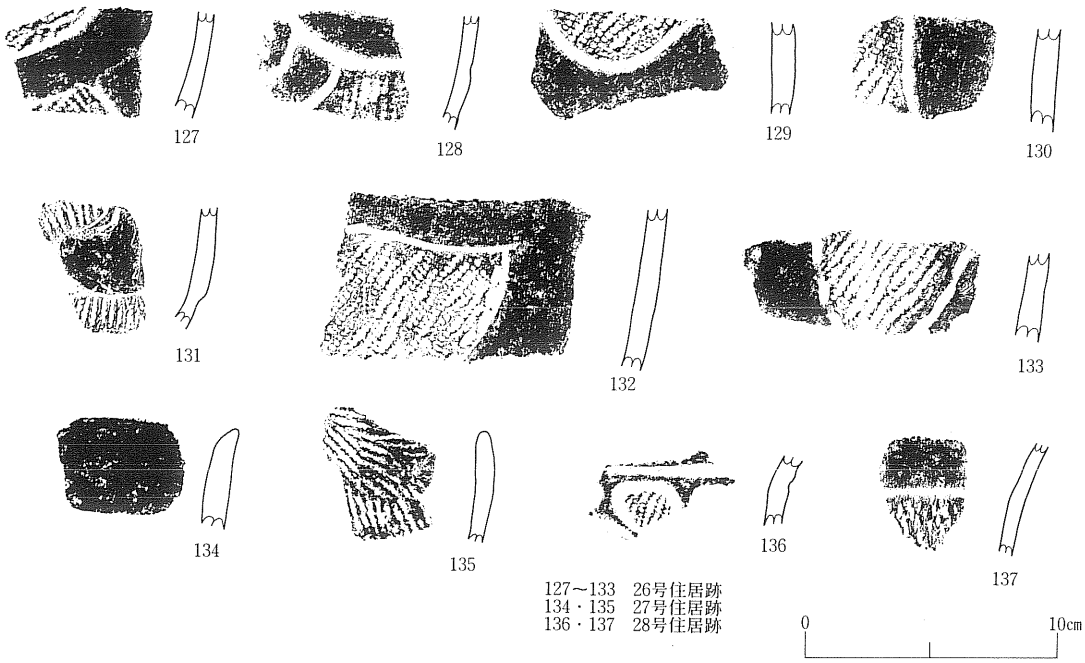

79～84　12号住居跡
85～92　14号住居跡
93～100　18号住居跡

0　10cm

第40図　遺構内出土土器




第41図　遺構内出土土器




第42図　遺構内出土土器

Ａ－３類：175は口縁部が外反する深鉢形土器である。

**７群土器**（第31図１、第32図６、第35図20・22、第37図32、第39図65・66・76・77、第41図119、第42図127・132・133、第46図174・179～188）

５群土器と同様に沈線区画による磨消し帯を施すが、さらに刺突文が施される土器群である。

Ａ－３類（１・６・20・22・32・65・76・119・179～181・184～188）：口縁部が外反する深鉢形土器である。65・119、183～188は口縁部無文帯に円・三角形の刺突文を施している。１・６・20・32・76・174・179・180～182は区画文内に、22・132・133は沈線上や沈線に沿って刺突文が施されている。

**８群土器**（第31図３、第33図11・14、第37図34）

Ａ－１類（11・14）：11・14は口縁部がほぼ直立する粗製の深鉢形土器である。11は地文が撚糸文である。

Ａ－２類：34は口縁部がわずかに内反する粗製の深鉢形土器である。地文はＬＲ（前々段多条）の縄文である。

Ｂ－３類：３は口縁部が外反し、胴部がゆるく膨らむ鉢形土器である。

**９群土器**（第43図139・第46図190）

小形の鉢形土器でヘラ状工具による細い沈線で葉脈状の文様を施すものである。

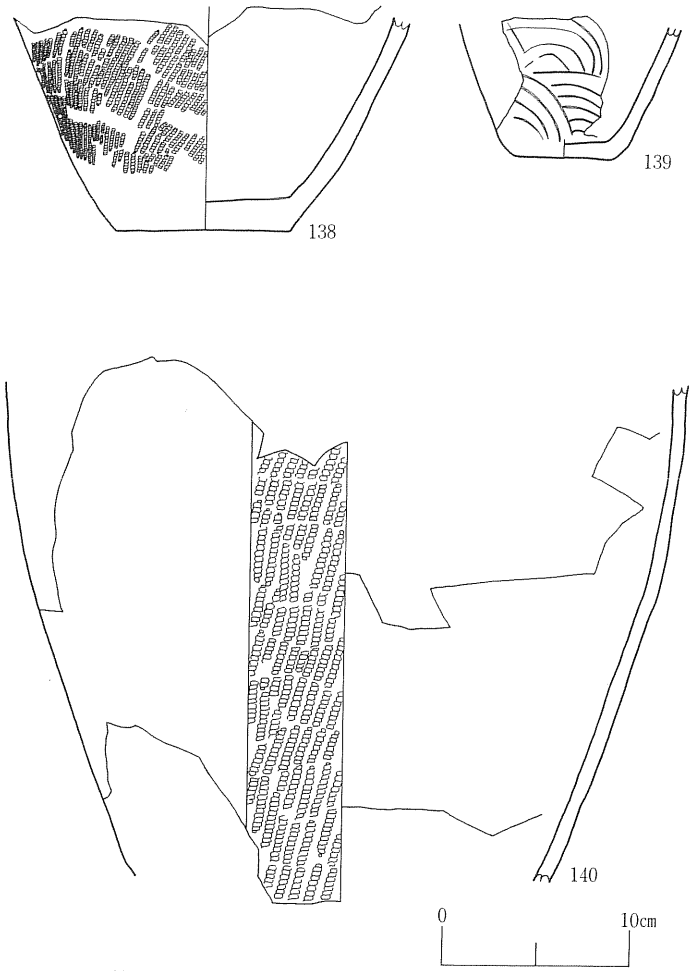
**10群土器**（第46図191～194）

縄文時代晩期の土器を本群とした。平行沈線文、入組文が施される。器形は浅鉢か台付浅鉢形土

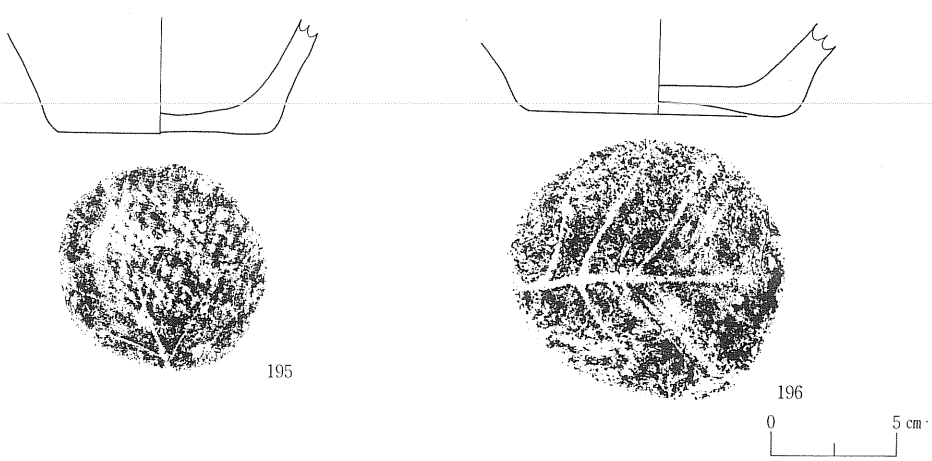
器と思われる。

**石器**（第49図、第50図）

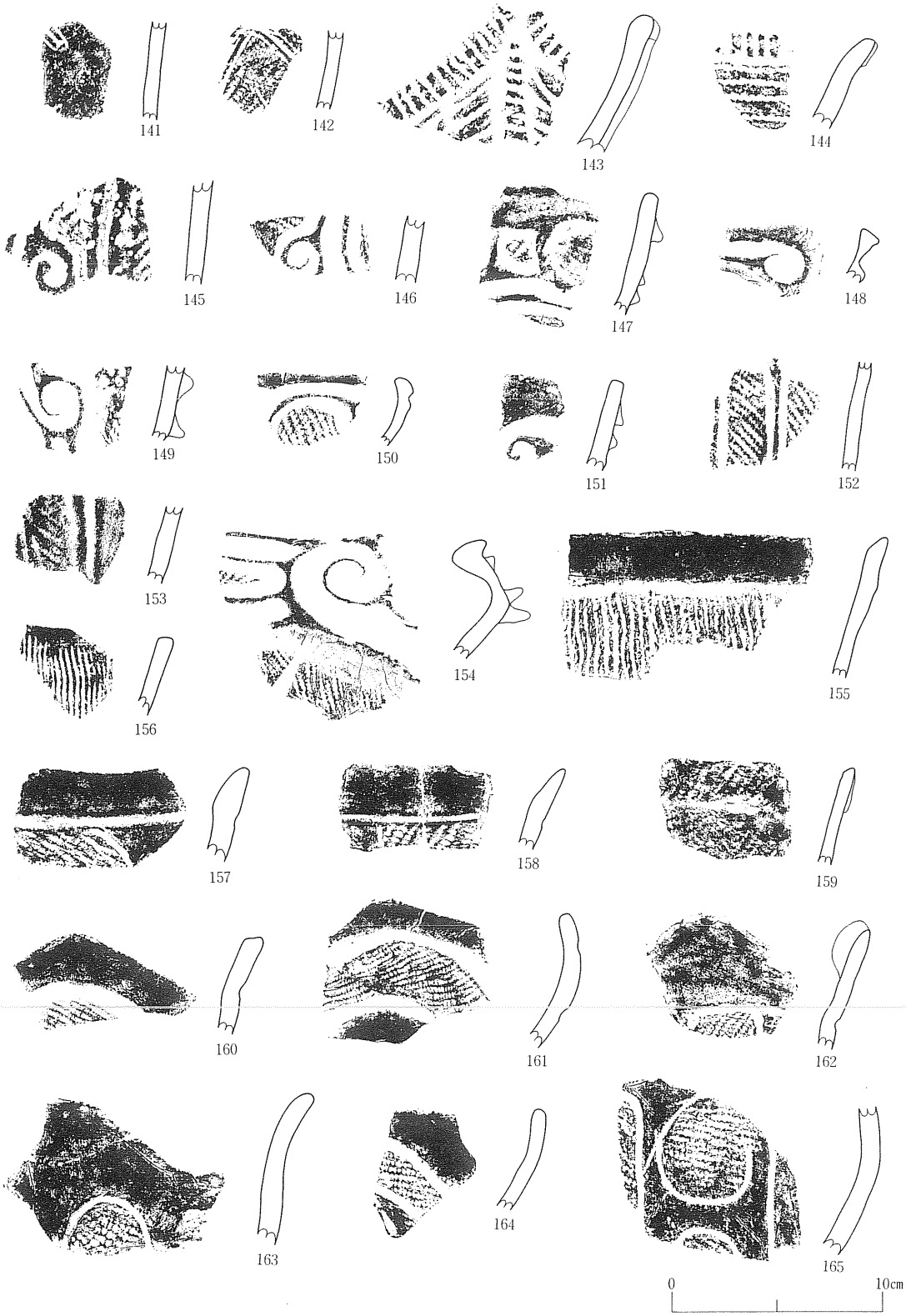
29は木葉形を呈する尖頭器、30は有舌尖頭器の一種と考えられる。表裏面にアスファルトの付着物が認められる。31～36はヘラ状石器で、いずれも両面から加撃調整（両面加工）されたものである。掻器的な用途をもつと考えられる。37は両側縁部に刃部をもつ削器で、38は一方の側縁部に刃部をもつ削器状の石器である。29～43は磨製石斧である。44～47は礫の両端を打ち欠いた石錘である。48～55。57は磨石、56は敲石である。



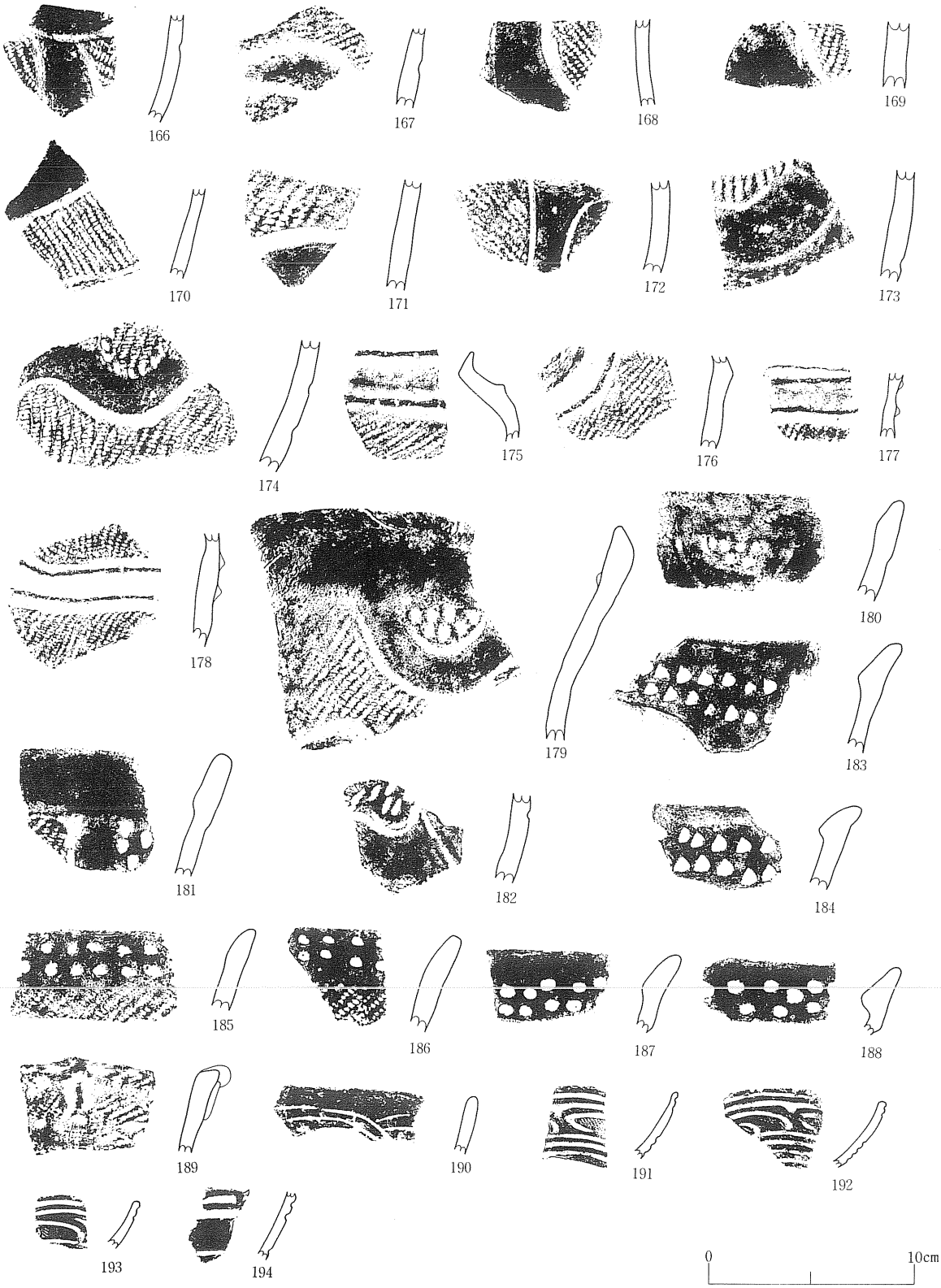

第43図　遺構外出土土器




第44図　土器底部




第45図　遺構外出土土器

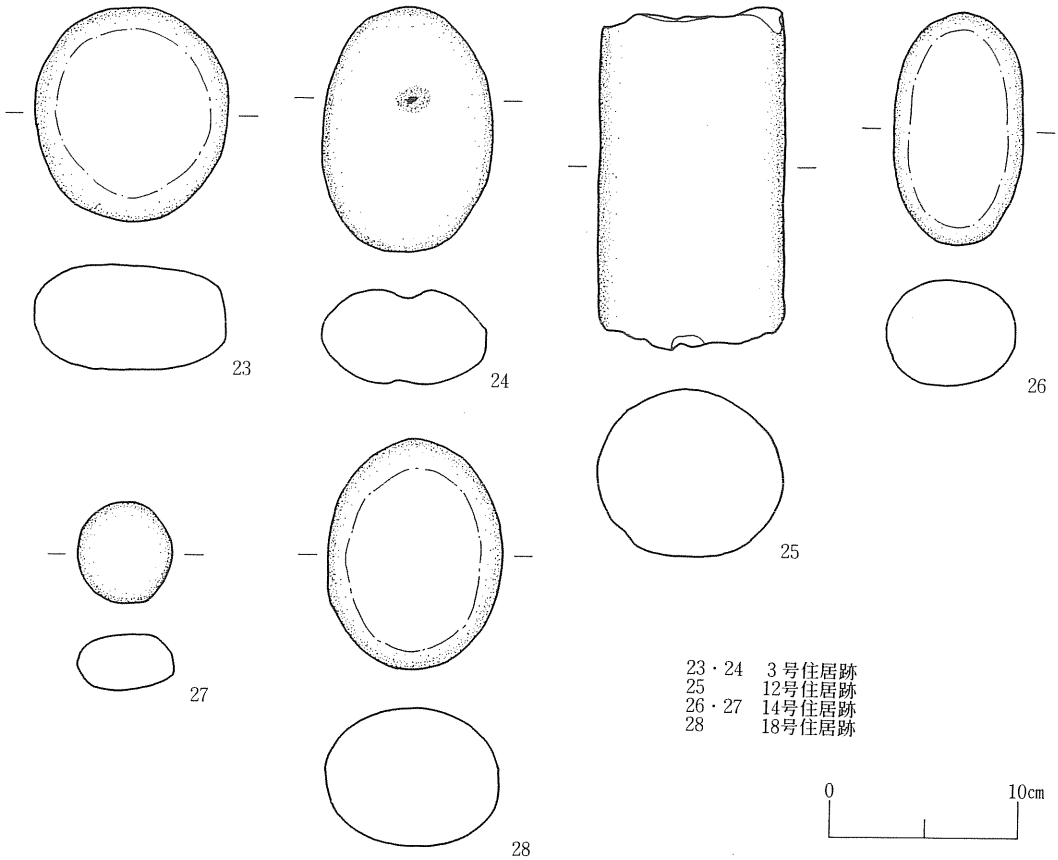



第46図　遺構外出土土器

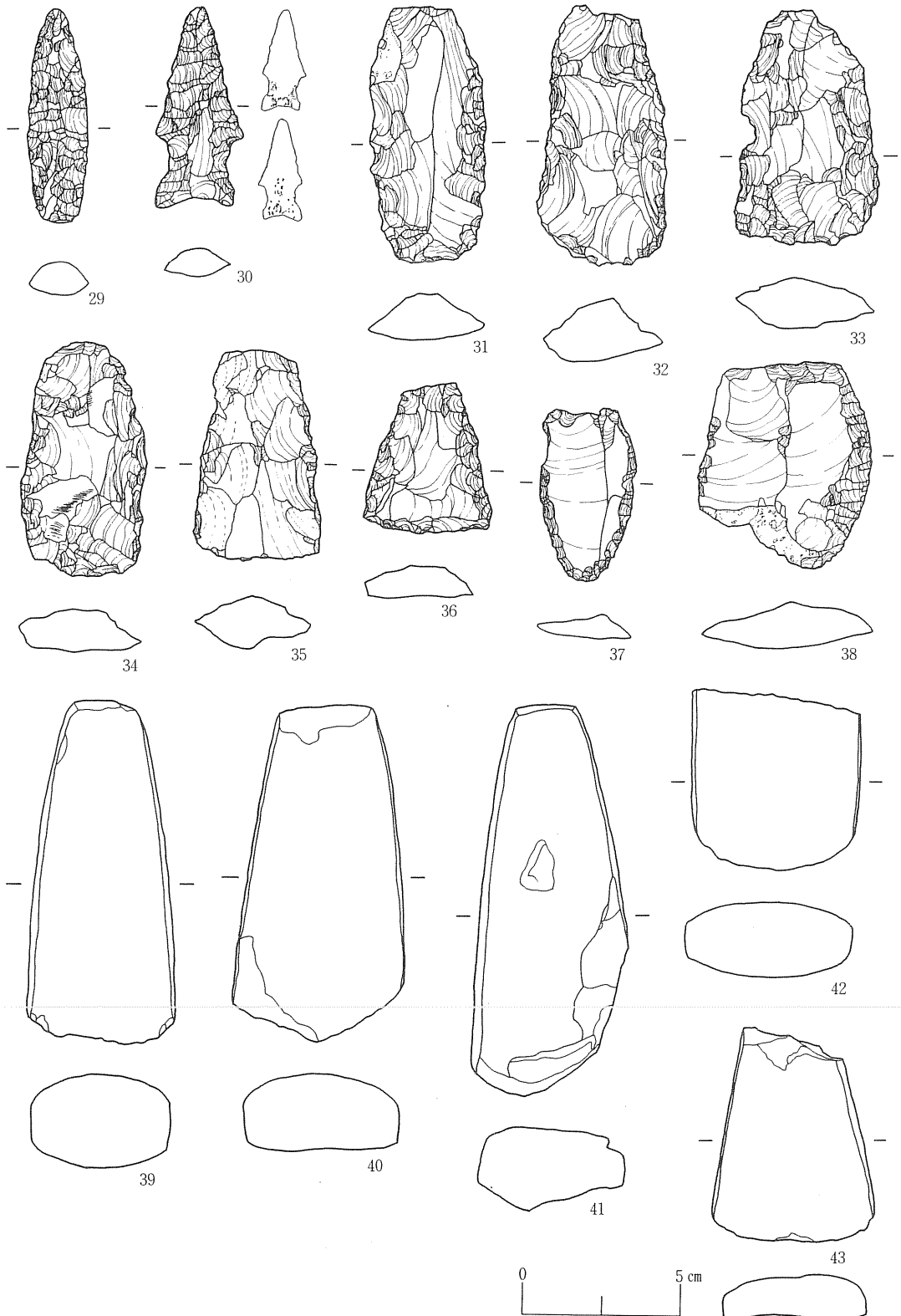
| | | | |
|---|---|---|---|
| 1・2 | 1号住居跡 | 18・19 | 12号住居跡 |
| 3～8 | 2号住居跡 | 20 | 14号住居跡 |
| 9 | 3号住居跡 | 21 | 15号住居跡 |
| 10・11 | 4号住居跡 | 22 | 27号住居跡 |
| 12～16 | 7号住居跡 | | |
| 17 | 8号住居跡 | | |

0　5 cm

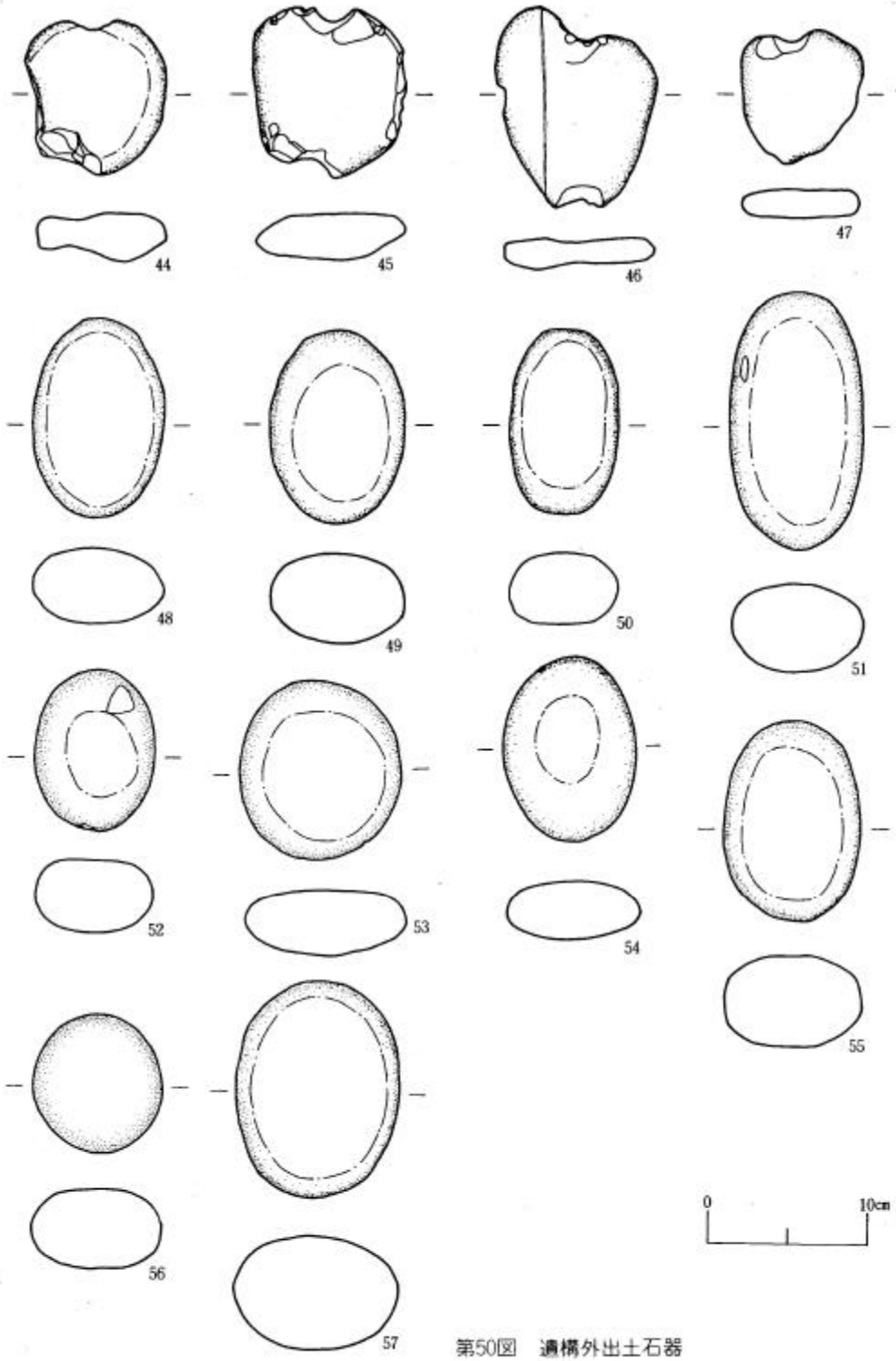
第47図　遺構内出土石器




第48図　遺構内出土石器




第49図　遺構外出土石器




第50図　遺構外出土石器

## ま と め

### 遺構について

下堤Ｅ遺跡から検出された遺構は竪穴住居跡、竪穴状遺構、土坑である。特に竪穴住居跡が圧倒的に多く、ここでは住居跡について簡単にまとめてみたい。

遺跡は標高40m 程の台地上に位置するが、南から北西方向に小沢が入り込んで台地を三分している（以下便宜的に西、中央、東地区と呼ぶ）。中央地区は両側に小沢があり台地は馬の背状になっている。竪穴住居跡はこの三つの台地で総数28軒が検出された。内訳は西地区６軒、中央地区10軒、東地区12軒である。

プランはすべて円形、楕円形を呈するものである。規模は径２.５ｍ前後のものが２軒、３ｍ前後18軒、４ｍ前後２軒、５ｍ前後２軒、5.5m 前後２軒、７ｍ前後の中形のものが２軒である。各地区別に概観すると、小沢にはさまれた中央地区では径３ｍ前後８軒、４ｍ前後のものが２軒である。径5.5m ～７ｍ前後の中形の住居跡は西、東地区に限られる。これは中央地区のように小沢にはさまれた狭小な台地では、住居跡の規模決定に際して地形的な制約が大きな比重を占めていたと考えられる。三地区で2.5m ～３ｍ前後の小形の住居跡は20軒を数え、全体の⅔以上を占めている。

炉の形態は作り変えのあるものを含めて複式炉13軒、石囲い土器埋設炉３軒、石囲い炉３軒、土器埋設炉11軒である。いわゆる複式炉には次の６形態がみられる。①石囲い土器埋設部＋石組部＋掘り込み部（14・28号住居跡）、②土器埋設部＋石組部＋掘り込み部（２・12号住居跡）、③土器埋設部＋掘り込み＋掘り込み部（１・４・16・25号住居跡）、④土器埋設部＋堀り込み（３・８・23号住居跡）、⑤石囲い土器埋設部＋掘り込み（５号住居跡）、⑥石組部＋掘り込み（４号住居跡旧炉）の以上である。しかし①・②・⑤の石囲い土器埋設部、石組部にすべて礫が残存するものは認められず、１～２個を残し他は抜き取られているようである。

複式炉の住居跡内での位置はすべて壁際に寄っている。また長軸方向に各地区によって規則性がみられる。東地区では12号住居跡が西方向、８・14・16号住居跡は南方向、中央地区の18・23・25住居跡は西方向、西地区の２・28号住居跡は東南方向、１・３・４・５号住居跡は北西方向に位置している。

また住居跡の炉に作り変えの認められるものが数軒ある。①複式炉の位置を移動させ、古い炉に貼り床をしているもの（４号住居跡）、②同位置での作り変え（２号住居跡）のあるものや、複式炉から石囲い炉へ移行させるもの（10号住居跡）、③土器埋設炉から同位置で石囲い炉に移行させるもの（19・21号住居跡）などがみられる。本遺跡では複式炉、土器埋設炉から石囲い炉へと移行させている。これは湯の沢Ｄ遺跡と同様の現象である。

最後に住居跡の時期についてであるが、住居跡の炉埋設土器、床面出土の土器を年代決定の決め手とするならば、13号住居跡を除き縄文時代中期末葉の大木10式期に位置づけられるものである。しかし27軒すべてが同時期に存在したとは考えがたいが、住居跡の重複も認められず、また炉埋設

土器にも土器型式による差はほとんどみられないことから同一時期に何軒の住居跡が存在していたのか不明である。ただ炉には4形態認められること、複式炉は各地区によって位置、長軸方向に規則性がみられることや、さらに複式炉、土器埋設炉から石囲い炉へ移行していることなどを考えると同一形態の炉をもつ住居跡は同一時期に存在した可能性も考えられる。

**出土土器について**

本遺跡から出土した土器は、整理用コンテナで20箱である。実測図として載せたものは炉埋設土器、床面、床直上から出土したものが主である。器形は深鉢形土器が大半を占め、浅鉢形土器、鉢形土器、壺形土器もみられる。ここでは先にその施文様から群に、器形から類に分類した土器の時期について考えてみたい。

1群土器は小破片2点の出土であり詳細については不明であるが、ヘラ状工具による沈線が山形に施される。大木6式期と思われる。2群土器は山形口縁を有し、頂部下に粘土紐と貼付、撚糸圧痕文を施す土器群で円筒上層a式期に比定される。3群土器は隆線や沈線によって渦巻文、楕円文が展開させる。4群土器は沈線による懸垂文が施される。この3・4群土器は大木9式期に比定されるものであるが、3群土器は大木9式土器の古い方に位置づけられる。5群土器は沈線区画の磨消し帯を「C」「J」字状に文様を展開させる。6群土器は稜線によって区画した磨消し帯を有する土器群である。7群土器は沈線区画による磨消し帯を有するが、さらに区画文内、沈線沿いに刺突文を施している土器群である。8群土器は粗製の深鉢形土器を一括した。地文は撚糸文、LR（前々段多条）縄文などがある。9群土器は小形の鉢形土器である。細い沈線で葉脈状の文様を施している。これら5群土器から9群土器はいわゆる大木10式期に比定される一群である。本遺跡ではその施文様から5群に分類した。しかし住居跡の新旧2時期の炉埋設土器を比較しても施文様に大きな相違は認められず、これら土器群の新旧については不明である。10群土器は少量の小破片が出土している。平行沈線文、入組文が施される土器で、縄文時代晩期の大洞$C_1$式期に比定されるものである。

# 参　考　文　献


秋田市教育委員会：「小阿地下堤遺跡坂ノ上遺跡発掘調査報告書」　1976

秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」下堤Ｇ遺跡、野畑遺跡、湯ノ沢Ｂ遺跡、1983

秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」坂ノ上Ｅ遺跡、湯ノ沢Ａ遺跡、湯ノ沢Ｃ遺跡、湯ノ沢Ｅ遺跡、湯ノ沢Ｆ遺跡、湯ノ沢Ｈ遺跡、野形遺跡、1984

秋田県教育委員会：「内村遺跡発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書第92集　1981

秋田県教育委員会：「梨ノ木塚遺跡発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書第63集　1979

鹿角市教育委員会：「天戸森遺跡発掘調査報告書」鹿角市文化財調査資料26　1984

北上市教育委員会：「滝ノ沢遺跡」北上市文化財調査報告第33集　1983

盛岡市教育委員会：「柿ノ木平遺跡」昭和57年度発掘調査概報　1983

岩手県立博物館：「岩手の土器」ー県内出土資料の集成ー　1982

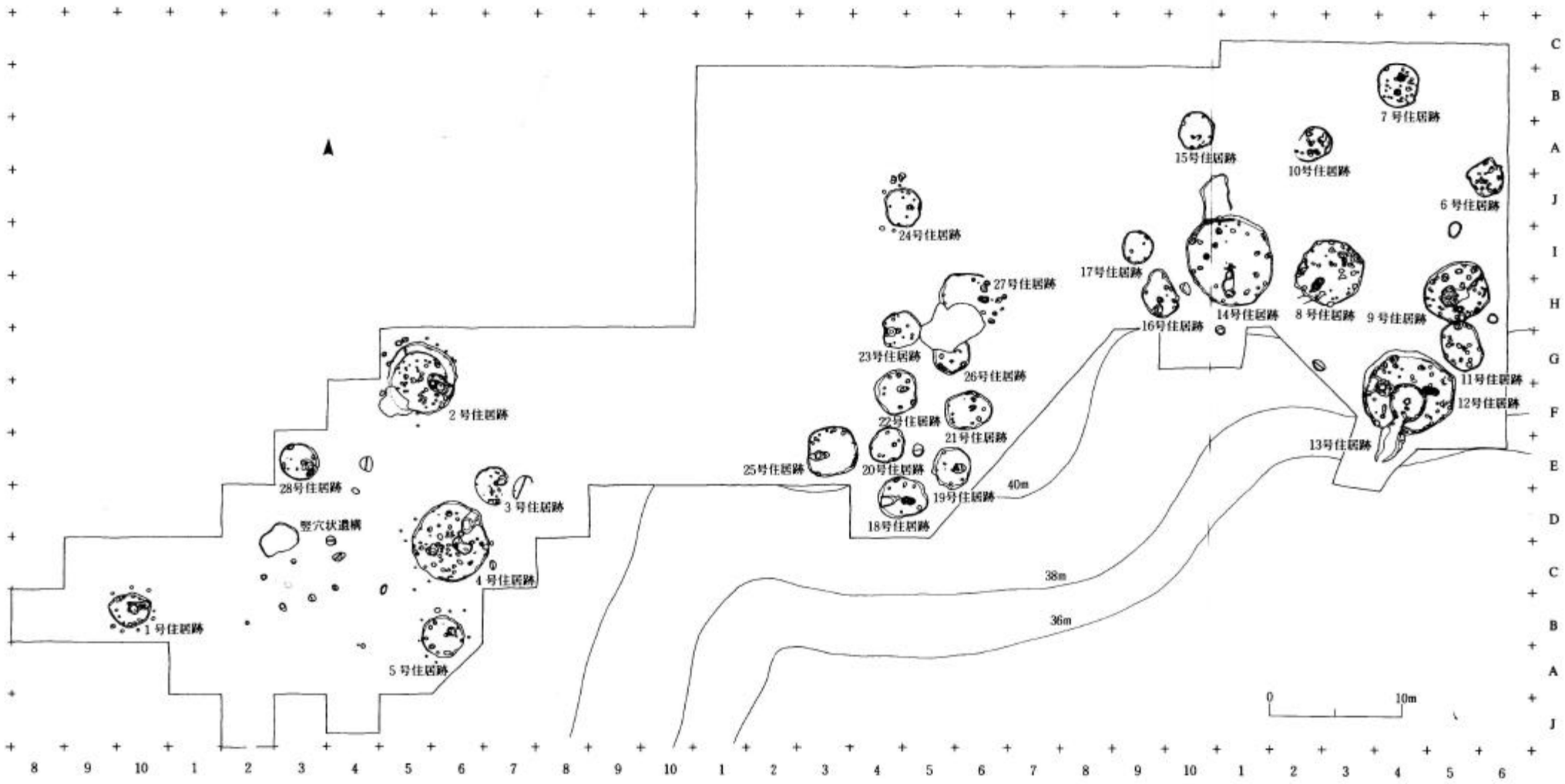
村越　潔　　：「円筒土器文化」雄山閣出版　1974

江坂輝彌編　　：「石神遺跡」ニュー・サイエンス社　1970

芹沢長介　坪井清足他：「縄文土器大成　第２巻中期」　講談社　1981

目黒吉明　　：「住居の炉」縄文文化の研究８社会・文化　雄山閣出版　1982

中村良幸　　：「『複式炉』についてー岩手県を中心としてー」考古風土記第７号　1892


1号住居跡
2号住居跡
3号住居跡
4号住居跡
5号住居跡
6号住居跡
7号住居跡
8号住居跡
9号住居跡
10号住居跡
11号住居跡
12号住居跡
13号住居跡
14号住居跡
15号住居跡
16号住居跡
17号住居跡
18号住居跡
19号住居跡
20号住居跡
21号住居跡
22号住居跡
23号住居跡
24号住居跡
25号住居跡
26号住居跡
27号住居跡
28号住居跡
竪穴状遺構
40m
38m
36m
0
10m
8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6
C B A J I H G F E D C B A J

第51図　遺構配置図

遺跡全景（北西→）

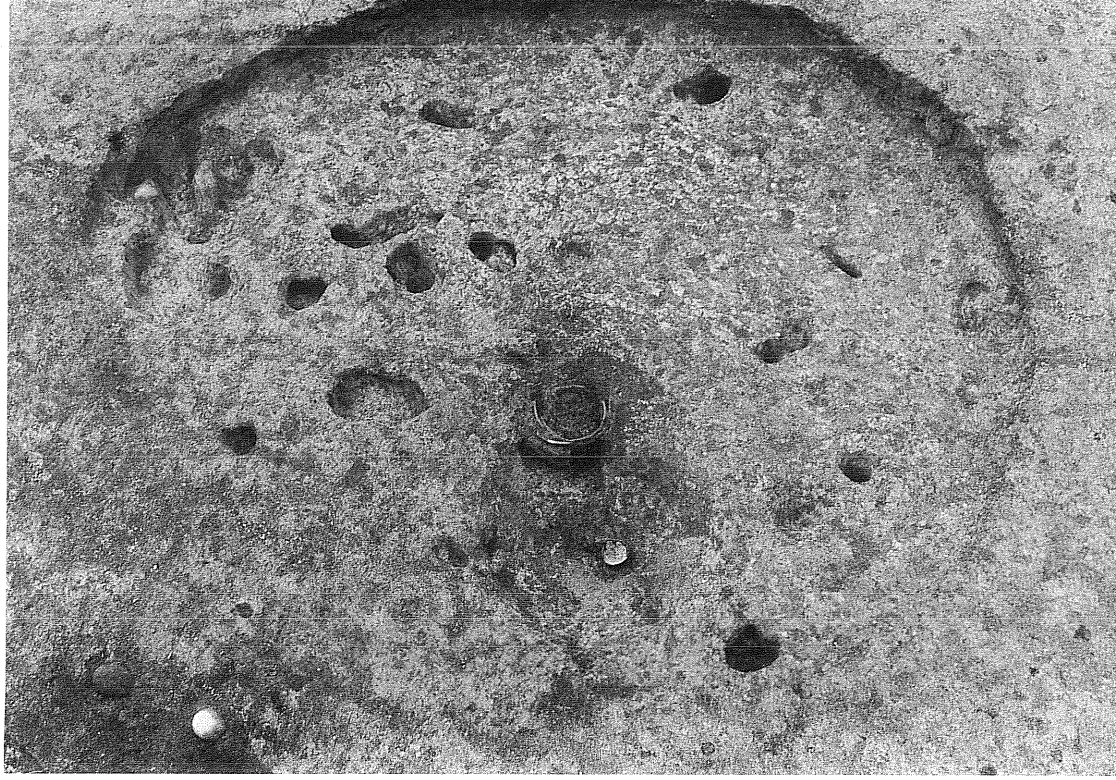
遺跡全景（北東→）

**図版 1**

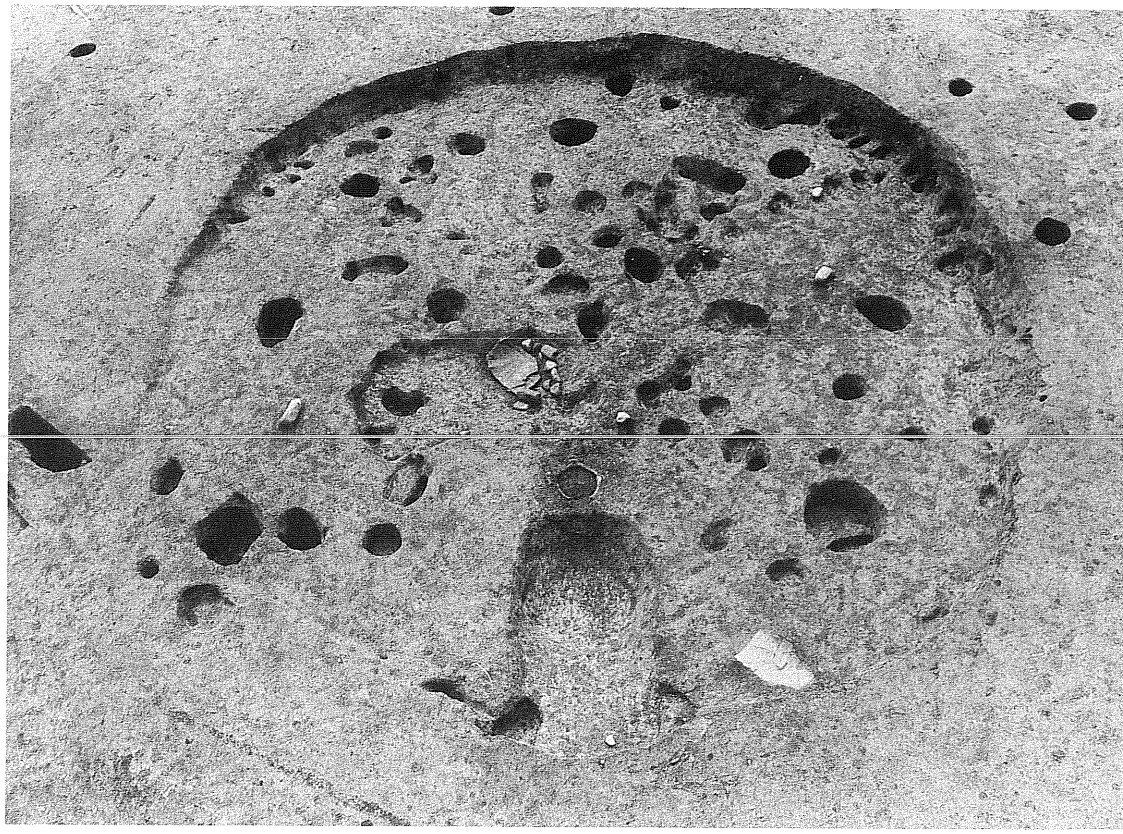
1 号住居跡（北東→）

2 号住居跡（南東→）

**図版 2**



3 号住居跡（北東→）



4 号住居跡（北東→）

**図版 3**

5号住居跡（北東→）

6号住居跡（南西→）

**図版 4**

7 号住居跡（南→）

8 号住居跡（南西→）

**図版 5**

9 号住居跡（西→）

10号住居跡（南西→）

**図版 6**

11号住居跡（西→）

12・13号住居跡（南→）

**図版 7**

14号住居跡（北→）

15号住居跡（南→）

**図版 8**